

論文題目

パーソナリティ認知過程における  
自己一致性に関する研究

洪名外喜男

1984

# 論文目次

はしがき

## 第1章 序論

1. 社会心理学における対人認知研究の意義 1
2. 対人認知研究の領域 4
3. パーソナリティ認知研究の動向 27
4. 問題の所在 50

## 第2章 対人関係における自己一致性の機能

1. 自己一致性と対人交渉過程 77
  - (1) 問題の設定 77
  - (2) 研究1 84
  - (3) 研究2 97
  - (4) 考察 101
2. 自己一致性の程度が対人感情

に及ぼす影響	104
(1) 問題の設定	104
(2) 研究3	106
3. 自己認知の質的水準と自己一 致性	120
(1) 問題の設定	120
(2) 研究4	124
4. 集団内地位と自己一 致性	134
(1) 問題の設定	134
(2) 研究5	138
5. まとめ	148
(1) 自己一 致性と想定類似性の 比較	149
(2) 自己一 致性を認知する過程 の対人的適応機能	151

### 第3章 自己一 致性の生起機制

1. 自然な事態における自己一 致性の生起過程	155
(1) 問題の設定	155

(2) . 研究 6	158
2 . 自己一致性の生起機制に関する実験的検討	168
(1) 問題の設定	168
(2) 研究 7-a	171
(3) 研究 7-b	180
(4) 研究 7-a と 7-b についての考察	185
(5) 研究 8-a	190
(6) 研究 8-b	195
(7) 研究 8-a と 8-b についての考察	200
3 . まとめ	205
(1) 一致機制の検討方法	207
(2) 一致過程における個人差	210

#### 第 4 章 自己一致性の生起過程における個人差要因

1 . パーソナリティ認知過程における認知的複雑性の影響	213
------------------------------	-----

(1)	問題の設定	214
(2)	研究 9	219
2	パーソナリティ認知過程における社会的望ましさへの反応傾向の影響	233
(1)	問題の設定	233
(2)	研究 10	239
3	自己一貫性生起過程の類型的差異と社会的動機づけ	249
(1)	問題の設定	249
(2)	研究 11-a	253
(3)	研究 11-b	267
(4)	考察	274
4	類型差の一般性の検討	278
(1)	問題の設定	278
(2)	研究 12	282
5	まとめ	294
(1)	個人差要因としての認知的要因	294
(2)	対人関係と動機的要因	298

第 5 章 総 括

301

引用文献

308

5

10

15

20

25

20

は し が き

5 多様化し、個人の社会的行動、集団行動、さら  
10 らに集合現象に至る幅広い領域の中で、社会  
生活の現実に関連する数々の興味深い問題が  
検討されていく。科学的な社会心理学研究への  
15 の志向が強まったのは今世紀に入ってから  
このことであるが、とくに、最近20~30年の研究  
の発展は顕著で、質・量ともに充実の度を増  
し、応用範囲も広がってきた。また、そ  
うした研究を支える方法の発展も、コンピュ  
20 タ利用とあまって目覚ましいものがある。  
このような研究領域や研究方法の歴史的変  
遷の中で、本研究の主題に関連する対人認  
15 知学は、これまで一貫して、社会心理学  
の研究の主要な研究領域の一つとみなされて  
20 いる。それは、対人認知過程の研究が、対  
人関係の成立過程のみならず、その維持・発

展過程、さらに対人行動や集団過程について  
の理解を可能にし、ひいては、社会的存在とし  
ての人間の本質にせまるものであることに  
よると思われる。

本研究の中心的課題であるパーソナリティ認  
5 知の問題は、対人認知研究の中でもとくに基  
本的な問題である。個人が、他者のパーソナ  
リティもしくは持続的な行動特徴を自分なりに  
概念化し、理解しようとする過程に、このよ  
10 うな心理的機制が働くのかを究明することは  
、対人認知研究にとって不可欠の課題である  
と思われる。

筆者がこの問題にとり組んですでに20年余  
の歳月が経過した。この間の研究成果をふり  
返ってみると、問題の複雑さや奥深さもさる  
15 ことながら、筆者の力量不足のため、満足  
のいく成果が得られたとは必ずしもいい難い。  
しかし、地道に一つの主題を追究してきた  
本研究が、今後の対人認知研究の発展にわ  
20 かでも役立てばと願いつつ、それをまとめ



したいである。

5

10

15

20

20

20

# 第 1 章 序 論

本研究の主題であるパーソナリティ認知過程の問題は、1940年ごろから対人認知研究の中心的な検討課題とされ、現在に至るまで数多くの研究が行われてきている。本章では、まづ、社会心理学における対人認知研究の意義や対人認知の研究領域について述べ、つぎに、パーソナリティ認知に関する従来の研究動向の展望と考察を行う。そして、最後に、本研究の検討課題について述べる。

## 1. 社会心理学における対人認知研究の意義

日常生活において、われわれは自分とかがかりをもつてくる相手がどのような人間であるかに強い興味と関心をもつている。相手がどのような性格の人間であるか、どのような

20  
×  
20

行動特徴の持ち主であるか、さらに、どのような意図で相手の行動が行われているかを理解することによって、相手に対する効果的な働きかけや相手の働きかけに対する適切な対処が可能になる。

一般に、人間を対象としたこうした認知過程には、物理的事象についての認知過程とはかなり異なる特徴がある。

人間を対象とした認知の過程は、他者についての表面的・外面的特徴などの直接的情報によって行われるだけではない。相手に関する認知者の直接的・間接的経験をとおして、相手の外面的特徴の背後にある感情や欲求、意図、さらにはパーソナリティなどの内面的特徴が推論的に判断される。このように、他者の外面的特徴の背後にある内面的特徴にまで推論的に判断が及ぶ場合の人の認知を“対人認知 ( person perception ) ”と呼ぶことができる。

対人認知の問題が研究課題としてとり上げ

られ発展してきた過程をみると、そこには対人関係に関する問題意識がつねに存在したとみるこゝとができる。すなわち、人は、自分をとりまくさまざまな人々との交渉の過程で、それらの人々の内的状態について推論し、その推論に基づいて行動している。したがって、対人認知過程に働く心理的過程を究明することは、対人関係の成立過程のみならず、対人関係の維持・発展過程、さらには対人行動や集団過程についての理解を可能にするこゝとなる。これが社会心理学における対人認知研究の第1の意義である。

つきに、対人認知の過程はきわめて主観的な判断過程である。したがって、その過程は認知者のパーソナリティや欲求、態度、価値観、動機づけなどの内部的要因によって大きく影響されると思われる。いま、何人かの認知者が同時にひとりの他者に対したとして、その他者について推論され概念化される内容は、認知者間で互いに異なるものであろう。そ

れゆえ、それぞれの認知者が行う対人認知の過程は、刺激となる他者というよりも、むしろ認知者自身を表現するものである。対人認知の過程を究明することは、このような認知者自身の人間観を明らかにすることにつながり、さらには「人とは何か」という問いに答えることとなる。これが、対人認知を研究することの第2の意義である。

## 2. 対人認知研究の領域

社会心理学において、対人認知研究が本格的に始められるようになったのは1940年代からである。もちろん、それ以前に行われた研究で、対人認知の領域に包含できる研究もかなりある。しかも、そのうち、今日にかなりの影響を与えている研究も少なくない。しかしながら、対人認知研究が社会心理学の主要な研究領域の一つとして確固とした位置を確立したのは1950年代になってからである。

1954年に刊行された Lindzey 編の社会心理学ハンドブック (The Handbook of Social Psychology) 第1版に、Bruner & Tagiuri による "The perception of people" の1章が設けられたことは、このことを如実に示すものといえよう。

対人認知の領域においてはじめて包括的な研究展望と理論的考察を行ったとみられる

Bruner & Tagiuri (1954) の論文には、すでに170篇あまりの研究書と学術論文がとり扱われている。第1版刊行後15年を経た1969年に

Lindzey & Aronson によって社会心理学ハンドブックの第2版が公けにされた。第2版では、第1版の共同執筆者のひとりである

Tagiuri によって再びこの対人認知領域の研究展望が行われた。その中では、じつに300篇あまりの研究書と学術論文が考察対象とされている。

社会心理学における実験的方法の進展や統計的な分析手法の開発、さらに個々の研究者の関心の広がりなどによって、対人認知の研

究領域もしいたいに多様化してきている。

表1は、本邦の大橋(1960)、長田(1966)、瀬谷(1977)による展望を含めた対人認知の代表的な研究展望と理論的考察をまとめたものである。対人認知の領域を区分する観点が研究者によりいくらか異なる。しかし、表1をみれば、ここ20数年間の膨大な対人認知研究がどのような領域に向けられて行われてきているかを知ることができよう。

対人認知研究全体からみても、また、個々の領域の中でみても、研究の流れに変化がみられる。こうした研究の主要な流れを概観しておくことは、本研究を進めていくうえで意味深いことであろう。以下の節では、表1に掲げた代表的な研究展望を参考にし、対人認知研究の諸領域を概観する。

### (1) 情動の認知

他者が示すさまざまな特徴の中で最も目立つものの一つは情動表出(expression of emotions

表 1 対人認知の代表的な研究展望にみられる領域区分

展望者	領域		対人関係の認知	他者認知の過程
	情動の認知	パーソナリティ認知		
Bruner & Tagiuri (1954)	情動の認知	他者についての印象形成	_____	_____
	パーソナリティの知覚		対人関係における知覚	_____
長 田 (1966)	_____	パーソナリティ認知	_____	_____
	情動の認知	対人判断能力	他者認知の過程	
Tagiuri (1969)	対人認知の正確さ		印象形成	帰 属 理 論
	感情・情緒の認知	性格の認知	印象形成	
Hastorf et al. (1970)	対人認知の正確さ		印象形成	対 人 関 係 の 心 理
	感情・情緒の認知	性格の認知	印象形成	
瀬 谷 (1977)	感情・情緒の認知	性格の認知	印象形成	対 人 関 係 の 心 理



) である。一般に、人は、他者の表情がその人の内的な情動や感情状態を反映すると考えているようである。

今日的な意味での対人認知研究に含まれる最も古典的な研究は、他者の感情・情動の認知に関するものである。この問題は、Darwin (1872) による情動の顔面表出 (facial expression) の研究に端を発した。それ以後今日に至るまで、多くの研究者によってさまざまな研究が展開されてきている。

およそ1930年代前半までの情動認知研究は表情写真を刺激とした実験的研究が多い。そこでとり扱われた問題は、おもに情動認知の正確さである。すなわち、一般的な情動認知の正確さ (Feleky, 1914; Ruckmick, 1921)、正確さの規定要因 (Gates, 1923; Kanner, 1931; Kellogg & Eagleson, 1931; Jenness, 1932)、さらに認知のキがかかりとなる顔面部位 (Buzby, 1924; Dunlap, 1927) などの研究がその代表的なものである。

1930年代後半から1960年代にかけての情動認知研究では、それまでの正確さに関する研究に加えて、顔面に表出された情動あるいは表情の尺度化に関する研究が顕著である。これらは、各表情刺激間が正確に識別される比率をキガかりとして表情を分類・尺度化しようとしたものである。

他者について認知された情動を数量化し、尺度化しようとする最初の試みはWoodworth (1938) によって行われた。Woodworthの研究はFeleky (1914) の資料を再分析したものである。これより彼は、①愛・幸福・喜び、②驚き、③怖れ・苦しみ、④怒り、⑤嫌悪、⑥軽蔑、の6カテゴリーをもつ直線的な尺度を提出した。数年後、この尺度はSchlosberg (1952) によって修正された。Schlosbergは、Woodworth尺度で正反対の位置にある愛・幸福・喜びと軽蔑の写真が混同されやすい事実を指摘した。そして、各カテゴリーの配列を直線的でなく円形とし、また、快-不快、注

意 - 拒否 という二極の次元によって情動のカテゴリーを並べるよう提案した。こうした方向の研究には、Engen, Levy, & Schlosberg (1958)、Abelson & Sermat (1962)、Stringer (1967) などがある。

1960年代後半から今日に至る情動認知研究では、正確さに関するものはほとんどみられなくなっている。それに代って、交差文化的な関心に基づく研究と、情動認知を非言語的コミュニケーションの中でとり扱う研究が増加してきている。

交差文化的 (cross-cultural) なアプローチは、表情が生来的な伝達性をもつという Darwin の仮説 (1872) を、異なる文化的背景や経験の影響を考慮に入れて検討しようとするものである。表出行動は生来的・普遍的なものではなく、かなりの部分が社会的に学習される性質のものであると考える方が妥当であろう。人は同じ情動でも異なる仕方で表出する。そうした理由から、情動の認知を文化的な基盤

に基づいて理解しようという関心は、それだけ正しい意味での人の理解に近づくものであるといえよう。こうした流れの研究では、Ekman, Sorensen, & Friesen (1969) や Ekman (1971) が代表的である。

表出行動を文化や経験を考慮して理解しようとするれば関心はさらに広がる。すなわち、刺激を表情だけに限定せず、姿勢やからだの方向、からだの動き、視線などの刺激による伝達行動、つまり非言語的コミュニケーション (non-verbal communication) の枠組からの検討である。Tagiuri (1960)、Exline, Gray, & Schvette (1965)、Ellsworth & Carlsmith (1968)、Argyle (1972, 1975)、Mehrabian (1968, 1972) などは、こうした方向からの代表的な研究である。

情動の認知に関する研究は、当初、認知の正確性を規定する要因の検討に向けられた。しかし、それは予想以上に複雑な問題であることが明らかになった。すなわち、情動認知は、情動が表出される文脈や文化的背景、そ

の他多くの変数によって強く影響されるからである。こうして、この領域に関する研究の関心は認知の正確さの問題を離れ、情動表出とその認知過程の解明へと移ってきている。

## (2) パーソナリティ認知

対人認知の研究領域の中で、多くの研究者たちから継続的に関心に向けられているのが他者の性格や持続的な行動特徴の認知、すなわち、パーソナリティ認知 (personality perception) の問題である。表1に示した内外の展望で、ほとんどの研究者がこの問題に一つの章をあげていることから、これを知らることができるといえる。

1930年代の後半、すなわち、情動認知研究の第1のピークが終わったころから、他者のパーソナリティ認知に関する科学的研究が現れてきている。そうした研究の関心は、大別するとつぎの二つに整理される。

一つは、他者のパーソナリティを認知する際の、刺激人物の実際の特徴と判断結果との対

応、すなわち判断の正確さ (accuracy) と、そうした判断能力の一般性に関する問題である。他の一つは、印象形成の過程や刺激人物と認知者の特徴およびその相互作用過程など、他者のパーソナリティ認知過程に関する問題である。第2の問題への関心が高まったのは、第1の問題よりやや遅れて1940年代になってからである。

まず、パーソナリティ判断の正確さと判断能力の一般性に関する研究について検討しておく。この問題についての初期の研究者の動機は、Hastorf, Schneider, & Polefka (1970) が指摘するようにきわめて実用的なものであった。つまり、パーソナリティの正確な判定者がリーダーや教師、心理治療者などの社会的役割を果たす場合、その能力によってきわめて有効な活動ができる。また、そのような判断能力の優れた人の特徴を知ることができれば、潜在的なリーダー、教師、治療者を選ぶことが可能になる。このような動機から、研究者は

、さまざまな人の異なる特徴や行動を正確に予測できる判定者を研究したり、良好な判定者と不良な判定者の特徴を明らかにしようとした。こうした考え方による初期の代表的な研究として、Vernon (1933) や Estes (1938) の研究がある。また、Dymond (1948, 1949, 1950) も共感能力もしくは他者を判断する正確度を測定する尺度に関する一連の研究を行っている。

このような他者のパーソナリティ判断の正確性に関する諸研究から、一つの新たな研究上の展開が生じている。すなわち、正確度の基準 (criterion) に関する検討である。かりに他者の向性について判断しようとするならば、その正確度を求めるにはあらかじめ他者の向性を測定しておかなければならない。初期の研究では、その基準として、パーソナリティ・テストの結果 (Vernon, 1933)、熟練した臨床心理学者の評価 (Estes, 1938)、自己評定 (Dymond, 1950) などが用いられている。とくに Dymond の研究で用いられたような、評定尺度もしくは

は質問紙法で予測される尺度上の位置と現実のそれとの差異は、正確度の基準としてしばしば使用される測度である。新たな展開とは、従来どちらかといえば任意に用いられてきた正確度の基準に対する批判と測定方法の修正である。このような研究の代表的なものとしては、Hastorf & Bender (1952)、Bender & Hastorf (1953)、Cronbach (1955)、Crow & Hammond (1957)、Cline & Richards (1960)などがあげられる。

認知や判断の正確度を追究しようとする研究においては、認知の歪みや誤差は修正もしくは排除されるべき夾雑物である。しかし、その後、パーソナリティ認知の誤りや歪みの中にこそ対人認知の本質的な心理的機制が含まれているという考えがしだいに強くなってきている。とくに、歪みや誤りを生じる原因に含まれる対人関係の意味に焦点をあてるようとする考えである。また、他者を判断する場合の過程、すなわち他者の印象がどのような機



制に基づいて形成されるのかという問題である。これがパーソナリティ認知の領域における第2の関心である。

こうした他者認知の過程に目を向けた研究は、すでに1930年代にもみうけられる。しかし、その関心が急激に高まったのは1940年代になってからである。もちろん、すでに述べたように、研究者たちが認知の正確さの研究に伴う種々の方法上の困難さに直面したこと、そうした動きを高める一因ではあった。しかし、研究者たちの目を他者認知の過程へ積極的に向けさせる刺激となったものとして、つぎの二つをあげることができよう。

一つは、知覚もしくは認知における動機的要因、すなわち社会的知覚 (social perception) に関する諸研究である (Levine, Chein, & Murphy, 1942; Proshansky & Murphy, 1942; Bruner & Postman, 1949; McClelland & Atkinson, 1948; Tajfel, 1957)。他の一つは、Asch (1946) による印象形成に関する研究である。

動機的要因を含めた対人関係の側面からパーソナリティ認知を問題とする研究動向については、本論文の主題と関連するので、本章の3 (パーソナリティ認知研究の動向) で詳しく述べる。つぎに、印象形成とその過程に関する研究領域について触れよう。

### (3) 印象形成

印象形成の問題はもともとパーソナリティ認知の領域に含まれるものである。しかし、この用語は、他者についての情報が少なく、相互作用も制限され、確立した関係も存在しない状態でパーソナリティ認知を意味するものとして定着している。ある人物がいくつかの特徴記述で示された場合、これらの断片的な刺激情報がどのようにしてまとまりのある印象が形成されるかを問題とすることに、研究者たちは関心をもっている。また、それを検討するための研究方法も研究間で類似している。ここに、印象形成の問題が一つの独立

した研究領域として扱われるようになった理由があるといえよう。

印象形成に関する研究は、Asch (1946) の実験結果やその仮説の一般性、妥当性を問題にして行われていた。Aschの実験は、彼自身が仮説した印象形成に関する二つの一般的なモデルの適切性を検討したものである。第1は単純総和モデル (simple summation model) である。このモデルでは、ある人についての全体印象はその人の持つ個々の特性の合計によると仮説している。第2は、個々の特性が相互に有機的に関連しあって組織化され、まとまった全体印象に統合されるというゲシュタルト的統合モデル (integrated whole model) である。この仮説を検討するために用いられた実験方法は、現在に至るまでこの領域の標準的な研究方法となっている。

ところでAschの結果は、第1の仮説を否定し第2の仮説を支持するものであった。それはつぎの三つである。すなわち、①与えられ

に刺激特性のうち、全体的な印象を形成する際に中心的な役割を果たす特性と周辺的な役割しか果たさない特性がある（刺激特性の中心性—周辺性）、②一連の刺激特性が与えられる場合、その提示順序が印象反応を規定する（順序効果）、③ある特性が中心的役割を果たすかどうかは、同時に提示される他の文脈的特性との関係による（文脈効果）。

Hastorf, Schneider, & Polefka (1970)は、この Asch の研究からつぎの二つの研究方向が分岐したと指摘している。第1の方向は、刺激特性と推測される反応特性との関係に関する研究である。第2の方向は、刺激情報を結合し処理する方法に関する研究である。

まず、刺激特性と推測される反応特性の関係についてその研究動向を検討しておく。他者について推測する場合、Aschは、刺激特性→印象→反応特性の推測という二段階過程を考えた。しかし、それとは別の過程の可能性が Bruner & Tagiuri (1954)によって示唆された

。すなわち、他者についての推測は刺激情報から直接的になされるというものである。

Bruner & Tagiuri は、人は誰でも、ある特性が他のどのような特性と結びつくかについてなんらかの考えを抱いてゐるとして、これを暗黙のパーソナリティ理論 (implicit personality theory) と表現した。その後の研究はこの暗黙のパーソナリティ理論をめぐって展開されてきており、特性間の関係 (Bruner, Shapiro, & Tagiuri, 1958; Wishner, 1960)、方法論の検討 (Jackson, Messick, & Solley, 1957; Passini & Norman, 1966; Rosenberg & Sedlak, 1972)、理論の普遍性と個別性ないし個人差の検討 (Hastorf, Richardson, & Dornbusch, 1958; Koltuv, 1962; Walters & Jackson, 1966) などに関心が向けられている。

つぎに、情報処理あるいは情報統合の方法についての研究は、Asch が示した順序効果 (order effect) と文脈効果 (context effect) に関して展開されてきている。とくに、それらの

効果を説明するための情報統合モデルによる  
アフォーチである。

Aschは、順序効果を説明するために、志向  
印象仮説 ( *directed impression hypothesis* ) あるいは  
意味変容仮説 ( *change-of-meaning hypothesis* ) を  
提出した。これに対し Andersonらは、注意減  
退仮説 ( *attention decrement hypothesis* ) を提唱  
し、それが妥当であることを実験的に確認し  
ている ( Anderson, 1965a ; Anderson & Barrios, 1961  
; Anderson & Hubert, 1963 ; Anderson & Norman, 1964  
 ) 。また、順序効果にかかわる個人差の検討  
も試みられている ( Mayo & Crockett, 1964 ; Nidorf  
& Crockett, 1965 ; Meltzer, Crockett, & Rosenkrantz,  
1966 ; 高橋, 1968 ) 。

文脈効果について Asch は意味変容仮説によ  
る説明を行ったが、ここでも Anderson らによ  
る別の説明が提唱されている ( Anderson &  
Lampel, 1965 ; Anderson, 1966 ) 。両者の相違点  
は、ある特定の情報特性と他の文脈特性の相  
互作用を仮定するかしないかにある。Anderson

(1965b, 1966) は、後者の観点から加重平均モデル (weighted average model) を提出し、そのモデルの枠内で印象形成過程のさまざまな問題が検討されている。

以上のような情報統合過程に関する研究は、人の一般的な判断過程の解明に向けて展開されてきている。Anderson (1974) による認知代数学 (cognitive algebra) の提唱はその好例である。

#### (4) 対人関係の認知

対人認知研究の主要な領域の一つに対人関係の認知がある。この領域に含まれる研究はきわめて膨大で多岐にわたる。1958年に、期せずして二冊の著作が同時に刊行されている。一つは、Tagiuri & Petrullo の「対人認知と対人行動」であり、他の一つは、Heider の「対人関係の心理」である。いずれも対人関係の認知領域での代表的な研究書であり、その後の研究に多大の影響を与えているものである

。そこで、ここでは、Tagiuri (1952) の研究に基づく対人感情の認知にかかわる研究の展開と、Heider (1958) の認知的バランス理論 (cognitive balance theory) と帰属理論 (attribution theory) にかかわる研究の展開を中心に、その動向を概観しておく。

まず、第1の対人感情の認知についてとり上げる。この問題領域の研究は、認知的ソシオメトリー (Moreno, 1953) と深い関連をもちながら発展してきた。対人選択における認知的側面の重要性が示唆されたのは1940年代である。しかし、研究の関心が高まったのはTagiuri (1952) の研究以後である。

Tagiuri は関係分析 (relational analysis) の方法を提唱した。それは、他者に対する選択・拒否に、成員の誰から選択・拒否されているかという認知を加えてソシオメトリックな関係を分析する方法である。Tagiuri, Blake, & Bruner (1953) は、現実集団の感情関係について分析した。そして、正確性 (accuracy)、相



互性 (mutuality)、一致性 (congruency) の三つの測度がいずれも偶然に期待される以上に高く認められること、なかでも一致性の測度が重要であることを指摘した。一致性に関しては、その後さまざまの場で確認され (Tagiuri, Bruner, & Blake, 1958; 大橋, 1956b; Thibaut & Riecken, 1955)、その生起機制についての検討も試みられている (Backman & Secord, 1959; 洪名, 1962; 小川・藤原, 1962; Harvey, Kelley, & Shapiro, 1957; Kogan & Tagiuri, 1958)。

関係分析は、基本的に二者関係 (dyad) を単位としたものである。しかし、その後 Tagiuri, Kogan, & Bruner (1955) によって他者関係認知の領域に適用され、関係の可視性 (visibility) やそれを規定する要因の分析が行われている (Tagiuri, 1957; Tagiuri, Kogan, & Bruner, 1955; Tagiuri, Kogan, & Long, 1958; Kogan & Tagiuri, 1958)。

同じく認知的ソシオメトリーの考え方にやうなものに、Ausubel らの研究がある。Ausubel, Schiff, & Grasser (1952) は、自己と他者の集

団内での地位の認知を社会的共感 (sociempathy) と呼び、一連の研究を展開している (Ausubel, 1953, 1955; Schiff, 1954; 田中, 1955)。

Tagiuri らや Ausubel らによって示された結果は、ソシオメトリック・テストに基づく研究手法が広く一般化するのに伴って、今日に少なからずの影響を与えてきている。

つぎに、Heider の理論に基づく研究の展開について触れる。Heider の影響は二つに分けることができる。一つは、1950年代の後半から1960年代にかけて多くの研究を刺激した認知的バランス理論によるものである。他の一つは、1960年代後半から1970年代にかけて注目された帰属理論にかかわる影響である。

Heider の認知的バランスに関する理論仮説は、人 P の他者 O と事物 X (物、人、事象) に対する関係、および O と X の関係という三つの関係に関するものである。すなわち、P-O、P-X、O-X についての P の認知、の間のダイナミックスを問題とし、これらが全体的

な P-O-X 系としてバランスのとれた状態を保つ、もしくはそれへ向う傾向があるというものである。この理論の妥当性や一般性、さらに拡張化をめぐりさまざまの検討が試みられ ( Jordan, 1953 ; Cartwright & Harary, 1956 ; Morrissette, 1958 ; 大橋, 1956a, 1958, 1961 )、また Newcomb (1953, 1959)、Osgood & Tannenbaum (1955)、Rosenberg (1960) らによる一連のいわゆる認知的一貫性理論 (cognitive consistency theory) が展開されてきている。

帰属理論は、現実の社会生活の中でわれわれが他者の性格や行動傾向を推論したり解釈したりする過程を問題にしている。この主題への関心は、Heider の基本的考察に基づいて理論化を試みた Jones & Davis (1965) と Kelley (1967) の研究を契機として急激に高まったといえる。今日では、以下に示すさまざまの内容に関してその検討が続けられている。たとえば、責任の帰属 ( Shaw & Sulzer, 1964 ; Walster, 1966, 1967 ; Shaver, 1970 ; Lerner & Simmons,

1966 ; Phares & Lamiell, 1975 ; Weiner & Kukla, 1970 ) 、 行為者と観察者による帰属 ( Jones & Nisbett, 1971 ; Nisbett, Caputo, Legant, & Marecek, 1973 ; Stephan, 1975 ) 、 動機・意図の帰属 ( Weiner & Kukla, 1970 ; Messick & Reeder, 1972 ) 、 自己知覚と帰属 ( Bem, 1972 ; Duval & Wicklund, 1973 ; Borden & Hendrick, 1973 ) 、 成功 - 失敗と帰属 ( Weiner, Heckhausen, Meyer, & Cook, 1972 ; Gilmor & Minton, 1974 ) 、 情緒的覚醒と帰属 ( Schachter, 1964 ) などに関する検討である。

### 3. パーソナリティ認知研究の動向

すでに略述したように、パーソナリティ認知の研究は、まず、他者のパーソナリティ判断の正確性と判断能力の一般性の検討に始まった。そして、正確性の測度に関する測定上の論議を経て、パーソナリティ認知過程、とくに認知の歪みを生じる原因に含まれる人間関係の意味の検討へと研究の関心が推移してきてい

る。そこで、そうした研究の推移について、三つの側面から、代表的と思われる具体的な研究に触れながら跡づけることにする。

### (1). 他者のパーソナリティ判断の正確性と判断能力の一般性

まず、他者のパーソナリティ判断の正確性と判断能力の一般性に関する初期の代表的な研究を三つとり上げ、その内容と問題点について略述する。

第1は Vernon (1933) の研究である。この研究では、はじめに、男子大学生48名が知能・パーソナリティ・芸術的能力の測定をされた。続いて、被験者は7名から11名の互に既知の小集団に編成された。そして、抽象的知能・ユーモアのセンス・音楽性など、さきの測定と同じ次元の特性に関して自己評定および他の全員に対する他者評定を求められた。また、見知らぬ人の写真や筆跡などが提示され、その人のパーソナリティを記述あるいは選択す

るよう求められた。

実験の結果から、Vernon は被験者を三つのタイプに分けた。すなわち、自己評定が自分のテスト結果や他者からの評定と一致する“自己評定が正確な人”、同様に“友人についての評定が正確な人”、“見知りぬ人についての評定が正確な人”の三つである。これらのタイプの個人は、最初に測定された三つのテスト結果に関してそれぞれ異なった特徴を示していた。こうして Vernon の実験は、他者を正確に判断することが一般的な特性であるとはいえないことを示したのである。

第 2 は Estes ( 1938 ) の実験である。この実験では、15名の男子大学生に、ひとりあるいはふたりでつぎのような5種類の行動をとらせた。そして、これを映画(2分間)に編集したものが刺激として使われた。その行動とは「部屋の隅に歩いて行き上着とシャツを脱ぐ、ふたりで簡単なトランプゲームをする、火のついたマッチを燃えつきるまでもって眺める

、ふたりにカードを使って家を組み立てる、  
 立ったまま相手の右手をつかんで押しあう  
 」である。対象となった大学生（映画の登場  
 人物）は、大学の長期のパーソナリティ研究  
 プロジェクトに被験者として参加していた。  
 したがって、彼らのパーソナリティは熟練した  
 臨床心理学者たちにより別個に判定されてい  
 た。

Estes は、大学生や精神医学的ソーシャルワ  
 ーカー、さらに種々の職業や趣味をもった成人  
 などの判定者群にこの映画を見せ、登場人  
 物のパーソナリティを判断させた。その結果、  
 “良好な判定者”と“劣った判定者”の区別  
 はできたが、何が良好な判定者たちの特性か  
 は明らかにできなかつた。

第3の研究は Dymond (1949, 1950) によるもの  
 である。Dymond の研究は、共感能力の測定  
 尺度を作成して、共感性のある人とない人の  
 相違を検討したものである。

男女大学生 80 名をいくつかの小集団に分け

、 ほぼ 10 分間の相互作用をさせた。その後、  
両極性のパーソナリティ特性 6 対を示し、つぎ  
の観点からの評定 ( 5 段階 ) を求めた。すな  
わち、①自己評定、②他者評定、③他者が他  
者自身をどう評定するかの予測、④自分が他  
者からどのように評定されるかの予測、であ  
る。これらの評定結果から、各被験者につい  
て二つの得点が求められた。すなわち、①と  
③との差および②と④との差である。Dymond  
は、この二つの測度がいずれも共感能力を測  
定していると考え、両測度の合計得点を逸脱  
得点 ( deviation score ) とした。この得点は、  
値が大きくなるほど他者の反応を正確に予測  
できないことを示すものである。

この研究ではさらに、逸脱得点をもとに共  
感性の高い 6 名と低い 6 名が抽出され、WAIS  
、ロールシャッハ・テスト、TAT などで両群の  
差異が検討された。その結果、共感性の高い  
群は低い群にくらべ、動作性知能が高い、他  
者との情緒的関係において安定している、柔



軟性がある、他者に関心をもち暖かき友人も多い、などの特徴のあることが示された。

以上の研究を比較検討すると、一般的な結論を導き出すのを困難にしていくいくつかの方法上の問題点が指摘されよう。

まず、判断者に与えられる刺激人物（判断対象）に関する情報の種類と量の問題がある。これは、刺激人物と判断者との間に、判断時点までにどの程度の相互作用が交わされてきたかということにも関係している。Vernonの研究では、判断者は既知と未知の刺激人物について判断を求められた。Estesの研究では、映画に登場した未知の人物について、またDymondの研究では、10分間の相互作用のうちに判断が求められた。他者のパーソナリティ認知は、認知者が利用できる他者についての情報量や他者との相互作用の程度、さらにそれに伴う両者の関係の確立度によって少なからず影響を受ける。判断の正確度を検討しようとする場合、こうした条件への配慮がとう

せん必要になるといえよう。

つきに、判断が求められるパーソナリティ側面（次元）の種類が問題になる。この点についても三つの研究ではそれぞれ別個の側面がとり上げられてゐる。パーソナリティの諸側面には、判断されやすい側面と判断されにくい側面のあることも示されておる（Estes, 1938）。この点も十分に配慮されるべき問題であろう。

さらに、判断の正確性の基準に関する問題がある。判断の正確性を検討する場合、あらかじめその基準となる指標が刺激人物について用意されていなければならぬ。さきの三つの研究では、パーソナリティ・テストの結果（Vernon, 1933）、熟練した臨床心理学者の評価（Estes, 1938）、対象人物の自己評価（Dymond, 1950）などがその基準として用いられた。どの測度が用いられるにしても、基準としての適切性に問題がある。正確性をどのように規定するかという問題が、どの測度を基準にす

るかの前提に置かれなければならないであろう。

最後に、判断に正確な人や良い判定者をどのような個人差要因で説明するかという問題がある。三つの研究では、知能や向性、ロールシヤッハ・テスト、芸術的能力などの諸次元で、正確さにかかわる個人差を説明しようとしてみているが、必ずしも一貫した結果が得られていない。判断の正確さという側面も含めて、広くパーソナリティ認知の過程に機能している個人差要因の検討は今後に残された課題であろう。

## (2). 正確性の測度

正確性の基準としてよく用いられるのは、ある質問もしくは評定尺度に対する被験者の反応と判定者による推測との一致度である。以下に、こうした方法の中に判定の正確度以外の要因が反映されることを指摘し、それを排除した測度の検討を提唱した研究について

触れる。

第1は、Bender & Hastorf (1953) による共感性に関する研究である。彼らは、50名の男子学生に42項目の陳述を示し、①自己評定、②級友のうちでよく知つてゐる4名の自己評定の推測、をそれぞれ4段階で評定させた。これより、つぎの四つの測度が算出された。すなわち、投影得点 (projection score : 判断者の自己評定と、対象者の自己評定についての判断者による推測との類似度)、類似性得点 (similarity score : 判断者の自己評定と対象者の自己評定との類似度)、素共感性得点 (raw empathy score : 対象者の自己評定についての判断者による推測と、対象者の自己評定との類似度)、改良共感性得点 (refined empathy score : 素共感性得点から投影得点を除いたもの) である。

四つの測度間の相関関係と各測度に関する4名の友人相互間の関係の分析から明らかになつたのは、つぎの点である。すなわち、投

影得点は素共感性得点と正に高く相関するが、改良共感性得点とは高い負の関係を示すこと、しかも、投影得点と改良共感性得点は対象を超えてかなり安定した測度であること、である。これより、Benderらは、共感性得点を考える場合、投影による歪みを修正する必要があることを指摘している。Benderらが問題とした共感性は、その操作から明らかなように、判断の正確性と同義の概念である。

第2は、Cronbach (1955) による検討である。彼は、ある尺度に関する刺激人物(対象者)の反応とそれに対する判断者の推測から求められる正確度には、数学的にみれば四つの成分が含まれるとした。すなわち、上昇(elevation)、弁別の上昇(differential elevation)、ステレオタイプの正確度(stereotype accuracy)、弁別の正確度(differential accuracy)である。Cronbachによれば、上昇は、刺激人物が用いる尺度の部分と異なる部分を判断者が用いることによる歪みである。弁別の上昇は、

刺激人物の得る得点を判断者が順序づけて予測する能力に関するものである。また、ステレオタイプの正確度は、特性を順序づける能力に欠けることによる歪みである。以上の三つの測度はいわば反応誤差といえるものである。最後の弁別的正確度は、それぞれの項目で刺激人物間の差を推測する能力に関するもので、さきに述べた三つの反応の歪みとなる成分を除去したあとに残るものである。その意味で、真の正確性の測度にあさわしいものであるとしている。Cronbachの研究は、他者のパーソナリティ判断における“真に正確な判断”を分析するための数学的な根拠を示したものである。

第3は、Crow & Hammond (1957) による正確性の測度と反応の構え (response set) の安定性に関する研究である。この実験では、72名の医学部学生に対して、患者と医師が面接している映画(6分間)が示された。その後、8個のパーソナリティ特性について二つの側面が

ら評定（7段階）をさせた。一つは、これらの特性に関して患者自身がどう評定反応したかの推定であり、他の一つは、これらの特性に関してその患者が実際にどうかの推定である。測定は6か月間隔で3回行われたが、各回の判断対象は判断者1名につき10名とされた。

測度として、弁別的正確度と3種の反応の構え、すなわち、暗黙のステレオタイプ度（*implicit stereotype score*：判断者がすべての対象者の反応推定に一律の判断をしてしまう程度）、ステレオタイプへの固執度（*adherence to stereotype score*：判断者が、ある項目について対象者間に個人差を弁別しない程度）、想定真実得点（*assumed veridicality score*：判断者が、対象者に対する評定と対象者自身の自己評定に対する推定の間類似性を想定する程度）が求められた。各測度に関する3回の測定間の相関が算出され、ステレオタイプの反応の構えの方が弁別的正確度よりも長期に

わたつて安定していることを示す結果が得られた。これより Crow & Hammond は、他者のパーソナリティを正確に判断する一般的能力の存在に疑問を投げかけた。同時に、この研究でとり上げたような反応の構えが正確度に及ぼす影響の検討に加えて、反応の構えそのものについても十分研究する必要があることを強調した。

こうした指摘にも示されたように、研究の関心は正確性の測度の検討から離れ、したいに判断に際しての歪みに含まれる心理的な意味の検討へと移ってきている。

### (3) パーソナリティ認知の歪みと対人関係

他者のパーソナリティを認知する際に生じる誤りや歪みは、正確さを追究するという観点からみれば有害なものであり、排除されるべき夾雑物である。しかし、他者を認知する際の過程を究明するという観点に立てば、正確性の誤りや歪みの過程にこそ、重要な心理的



意味が含まれていると考えることができる。認知の歪みは、人が他者を認知する際の基本的傾向を反映するものであり、それ自体解明されるべき心理的過程なのである。

### (i) Fiedlerの想定類似性

認知の歪む過程について、認知者と被認知者との関係、とくに両者のパーソナリティ特性間の関係に焦点をあてたものにFiedlerらの“想定類似性 (assumed similarity)”に関する研究がある。

Fiedler (1950, 1951)、Fiedler & Senior (1952) は、セラピストとクライエントの治療的人間関係で良い関係を作り出すセラピストの要件を研究した。その研究過程で、セラピストの逆転移感情 (countertransference feelings) に注目した。想定類似性の概念は、こうした逆転移感情を数量化しようとする過程で提唱されたものである。

まず、Fiedler (1951) は、熟練した22名のセラピストとクライエントを対象に、パーソナリ

ティ特性を記述した76種の短文カードを手え、これをQ-テックで8段階に分類させた。クライエントについては自己評定、セラピストについては、クライエントの自己評定の推測およびセラピスト自身の自己評定と理想の自己についての評定、の4側面で評定が求められた。この結果から、つぎの六つの測度が算出された。

① 実際の類似性 (real similarity: RS) … セラピストの自己評定とクライエントの自己評定との類似度。

② 理想自己に対する実際の類似性 (real similarity to the therapist's ideal: RSi) … セラピストの理想自己の評定とクライエントの自己評定との類似度。

③ 想定類似性 (assumed similarity: AS) … セラピストの自己評定とクライエントの自己評定に対する推測との類似度。

④ 理想自己に対する想定類似性 (assumed similarity to the therapist's ideal: ASi) … セラ

ホストの理想自己の評定とクライエントの自己評定に対する推測との類似度。

⑤ 修正想定類似性 (unwarranted assumed similarity : UAS) ... セラピストがクライエントと自分との類似度を過大もしくは過小評価する程度、 $UAS = r_{As}^2 - r_{Rs}^2$  で求められる。

⑥ 理想自己に対する修正想定類似性 (unwarranted assumed similarity to the ideal : UAS<sub>i</sub>) ... セラピストがクライエントと自分の理想自己との類似度を過大もしくは過小評価する程度、 $UAS_i = r_{As_i}^2 - r_{Rs_i}^2$  で求められる。

以上の六つの測度のうち、Fiedlerは、逆転移感情の測度として UAS と UAS<sub>i</sub>、とくに UAS を重視した。結果において、セラピストの有能性の程度と UAS, UAS<sub>i</sub> との相関は、前者で  $\rho = .59$  ( $p < .01$ )、後者で  $\rho = .08$  (ns) であった。UAS はセラピストのクライエントに対する心理的な近さ (psychological closeness)、共感 (empathy) あるいは好意的感情 (liking) の表明という積極的な意味をもつものとして解釈

された。これとほぼ同様の結果が、別の15組のセラピストとクライエントに関しても確認された ( Fiedler & Senior, 1952 ) 。

こうした結果をもとにして、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) は、他者について自己との類似性を想定することに含まれる特定の心理的意味を、治療的人間関係という限定された場から、より一般的な対人関係の場に広げて検討している。

まず、3か月以上大学の学生宿舎で共同生活し互に既知の男子学生26名が被験者とされた。そして、治療的人間関係について検討した場合と同様に、パーソナリティ特性を記述した76種の短文カードを与えQ-テクニックで8段階に分類させた。分類は、自己評定、理想自己の評定、自分の最も好きな友人と最も嫌いな友人の自己評定に対する推測、の四つの観点から求められた。

この結果から、想定類似性 (AS)、実際の類似性 (RS)、修正想定類似性 (UAS) に関する測

度が、好きな友人と嫌いな友人についてそれを  
 7個算出された。すなわち、①想定類似  
 性 ( $AS_p$  と  $AS_n$ 、 $p$  は好きな友人、 $n$  は嫌いな  
 友人を示す。以下同様)、②理想自己に対す  
 る想定類似性 ( $AS_{ip}$  と  $AS_{in}$ )、③実際の類似  
 性 ( $RS_p$  と  $RS_n$ )、④理想自己に対する実際の  
 類似性 ( $RS_{ip}$  と  $RS_{in}$ )、⑤理想自己間の実際  
 的類似性 ( $Id/Id_p$  と  $Id/Id_n$ )、⑥修正想定  
 類似性 ( $UAS_p$  と  $UAS_n$ )、⑦理想自己に対する修  
 正想定類似性 ( $UAS_{ip}$  と  $UAS_{in}$ )。

以上の測度に関してつぎの結果が示された。

②. 人は、自分の好きな友人の方が嫌いな  
 友人よりも自分と類似していると認知する ( $AS_p > AS_n$ ,  $UAS_p > UAS_n$ )。同様に、自分の好き  
 な友人の方が嫌いな友人よりも自分の理想自  
 己に類似していると認知する ( $AS_{ip} > AS_{in}$ ,  
 $UAS_{ip} > UAS_{in}$ )。

④. 実際の類似性、理想自己に対する実際  
 的類似性および理想自己間の実際の類似性に  
 ついては、好きな友人に対する場合と嫌いな

友人に対する場合との間に差はない。

㊦. 他者に関するすべての類似性の測度において、集団内で人気の高い個人と人気の低い個人の間には差は認められない。

こうして想定類似性の概念は、相手に対する潜在的好意の程度を示す指標として位置づけられた。その際、これまでその測度として使用されてきた AS と UAS のうち、UAS については算出方法の数学的な妥当性が不明確であると考察され、以後の研究 (Fiedler, 1954) からは AS のみが想定類似性の測度として用いられている。

想定類似性に関する諸研究の結果は、おおむね Fiedler らの結果を支持するものが多い (Lundy, Katkovsky, Cromwell, & Shoemaker, 1955; Lundy, 1956, 1958; Northway & Detweiler, 1955; Thompson & Nishimura, 1952; 梶田, 1967)。しかし、自己評価の低い個人は他者との間に類似性を想定しないことを示す研究もあり (梶田, 1966; Kajita, 1968)、こうした認知者の個

人差を考慮に入れた検討が、今後に要請される課題であろう。

Fiedler の想定類似性は、パーソナリティに関する認知者の自己評定と他者に対する評定との関係を問題にしたものである。Fiedler は、その後、この概念をリーダーシップ研究の領域に広げて優れた成果を上げている (Fiedler, 1967, 1978)。すなわち、想定類似性の概念は“好きな相手と嫌いな相手との間に認知するパーソナリティの類似度 (assumed similarity between opposites: ASO)”や“いつしよに仕事をしたくない相手に対するパーソナリティ認知 (least-preferred coworker: LPC)”という方向に展開され、リーダーの特性もしくは条件の一つとして位置づけられた。こうした点からみて、Fiedler の関心が“自己認知”よりもむしろ“他者に対する認知”に向けられていたことが明らかである。

(ii) . Secord & Backman の対人的適合理論

認知が歪む過程の対人関係的な意味を検討

しようとする際に、自己概念 (self concept) もしくは自己認知の機能に注目する方向がある。社会的文脈の中で自己を理解しようとする立場は、すでに Cooley (1902) の“鏡に映った自己 (looking-glass self)” や、さらにそれを役割取得との関連から体系づけた Mead (1934) にみられる。Cooley は、個人に対する周囲の人々の態度や行動によって、その個人の自己概念または自己感情が規定されていると強調した。ここでは、自分が他者からどのようにみられているかという認知過程の重要性が示されている。

こうした考え方を背景にして Secord & Backman (1961) は、個人には、自己概念のある側面に關する“自己認知”、“自分の行動についての認知”、“その側面に關して他者が自分に対して示す行動の認知”という三つの認知過程間を能動的に適合化しようとする傾向があると考え、これを“対人的適合理論 (inter-personal congruency theory)” としてまとめた。



る。たとえば、自分で頭が良いと思っ  
ている人がいて、自分でうまく問題解決行動がとれ、他者から難しい問題を解決するための助力がその人に求められるということがあれば、その人は認知的に適合的であるというものである。どれかの認知過程間に不適合な状態があると、個人は、自己に関する認知を変えたり、他者の行動に関する認知ないし解釈を変えたりすることによって適合状態への回復をはかろうとすると考えられている。

他者との交流の中で対人的適合をはかる方途として、具体的につぎの五つが仮説されている。すなわち、認知的再構成 (cognitive restructuring)、選択的評価 (selective evaluation)、選択的相互作用 (selective interaction)、適合反応の喚起 (evocation of congruent responses)、比較による適合 (congruency by comparison) である。仮説された理論や方途に関しては、Backman や Secord らによって直接的に検証を試みられた結果や、他の研究の中で間接的にそれを支え

る結果も多い ( Backman & Secord, 1962, 1964 ; Backman, Secord, & Peirce, 1963 ; Secord & Backman, 1964, 1965 ; Secord, Backman, & Eachus, 1964 ; Harvey, Kelley, & Shapiro, 1957 ; Harvey, 1962 ; Gerard, 1961 ; Goffman, 1959 ) 。しかし、その研究方法や結果に関して、さらに検討すべき課題も多く残されている。

この Secord & Backman ( 1961 ) の理論とその後  
 の展開は、Cooley らによって示されてきた「  
 社会的文脈における自己」という考え方を、  
 もっと一般的な認知的一貫性理論 ( cognitive  
 consistency theory ) の中に包括しようとしたもの  
 として位置づけることができよう。なお、  
 この問題については、本研究の主題とも関連  
 するので、この論文の第2章と第4章で具体  
 的に述べることにする。

以上、他者のパーソナリティ判断の正確性の  
 検討に端を発し、対人認知研究の中心的課題  
 の一つに発展してきたパーソナリティ認知研究  
 の動向を概観し考察してきた。そこで、つぎ

に本研究の問題について述べる。

#### 4. 問題の所在

##### (1) 基本的課題

本研究の中心的課題は、対人関係の側面からパーソナリティ認知の過程を検討しようとするものである。とくに、本研究においては、個人が認知する“他者からみられていると思ふ自己”に注目し、それと、認知者の“自分自身について認知するパーソナリティ”との関係を、主として認知的一貫性理論の枠組の中で検討する。

対人的事態でパーソナリティ認知の行われる状況はきわめて多様である。しかし、認知者が他者について利用できる情報の量や、認知者と被認知者の間の相互作用の程度、さらに両者の関係確立度という観点も考慮して整理すると、つぎの二つに大別される。すなわち、認知者が未知の他者に対する場合と既知の

他者に対する場合である。本研究でとり扱うのは、後者の、認知者と被認知者が既知である状況におけるパーソナリティ認知である。それゆえ、その過程には、認知者が被認知者との間でそれまでに作り上げてきた種々の対人関係要因、たとえば感情関係や地位関係が影響してくると思われる。

本研究では、認知者の“自分について認知するパーソナリティ”と“他者からみられていいると思ふ自己”の二つの認知内容が一致することを“自己一致性 (self congruency)”と定義する。いま、ある他者からみられていいると認知する自分のパーソナリティ内容と、実際にその人が認知している内容とがくい違ふような場合、認知もしくは判断の正確性という観点からすれば、それは認知者の判断の誤りであり認知の歪みである。しかし、本研究においては、そうした認知の歪みの過程にこそ、人が他者を認知する際の基本的な傾向が反映されると考へる。具体的に、人が特定の他者に

ついでパーソナリティの自己一致性を認知する過程に、その人の対人的適応のあり方が示されると思われる。

以上のことから、パーソナリティ認知過程における自己一致性にかかわる種々の問題を解明することは、人の対人的行動や対人的適応についての理解を可能にすると思われる。

なお、認知者Sと他者Oの2者間に存在する主要なパーソナリティ認知過程を図示すると図1のように表現できる。

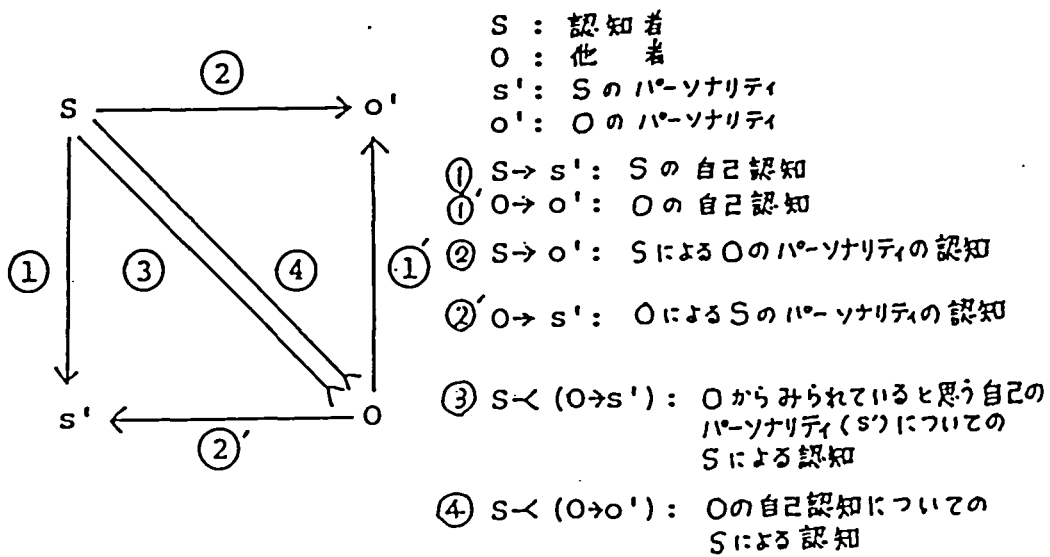


図 1 2者間のパーソナリティ認知過程図式

20  
20

本論文で中心的にとり扱われる自己一致性は、①  $S \rightarrow S'$  と ③  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致で示される。図 1 から明らかかなように、自己一致性は、①と③の過程の両者とも、認知の主体が  $S$ 、認知の最終対象が  $S'$  である点で他の認知過程と異なる。とくにこの関係に注目したのはつぎの理由による。すなわち、認知者が①  $S \rightarrow S'$  と③  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致を認知しようとする場合、認知過程③の最終対象  $S'$  が他者  $O$  の認知を介しての  $S'$  であるところに、認知者と他者との対人関係が強く反映されると期待したのである。

本論文の自己一致性と類似した概念に、すでに述べた Secord & Backman (1961) の対人的適合がある。対人的適合は、とくに、自己概念のある側面に関する“自己認知”と“その側面に関して、他者が自分に対して示す行動の認知”の適合を問題にしている。自己一致性も対人的適合も、二つの認知過程の一つに  $S \rightarrow S'$  をとり上げる点は共通する。しかし、他

方の認知過程において、自己一貫性では認知の最終対象が“他者に認知されたS'”であり、対人的適合では“S'に関連する他者の行動”である点が異なる。

ところで、図1に示した認知過程のいくつかは、これまでのパーソナリティ認知研究で検討された諸概念の指標になったものである。本章の3「パーソナリティ認知研究の動向」で引用した順におもなものを示すとつぎのようである。

最初に、認知の正確性に関連した研究について述べる。

まず、Vernon (1933) の正確性は①'  $O \rightarrow O'$  と②  $S \rightarrow O'$  間の一貫度である。また、Dymond (1949, 1950) の共感性は①'  $O \rightarrow O'$  と④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$  の一貫度および②'  $O \rightarrow S'$  と③  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一貫度を問題にしたものである。さらに、Bender & Hastorf (1953) の投影得点は①  $S \rightarrow S'$  と④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$ 、類似性得点は①  $S \rightarrow S'$  と①'  $O \rightarrow O'$ 、素共感性得点は①'  $O \rightarrow O'$  と④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$  の一貫度である。この指標

(①'と④の一致度)は、上述した Dymond の共感性の指標の一つと同じである。また、類似性得点(①と①'の一致度)は Fiedler (1950, 1951)、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) でも使用されている。最後に、Crow & Hammond (1957) の正確性は、②  $S \rightarrow O'$  と ④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$  の一致度である。

つぎに、認知の歪みに含まれる意味を問題にした研究について述べる。

Fiedler (1950, 1951, 1964)、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) の想定類似性は、①  $S \rightarrow S'$  と ④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$  の一致度もしくは①  $S \rightarrow S'$  と ②  $S \rightarrow O'$  の一致度である。前者の①と④の一致度は、さきに述べた Bender & Hastorf の投影得点の指標と同じである。また、Secord & Backman (1961) の対人的適合は、すでに説明したようにパーソナリティ認知と内容が異なるけれども、形式的には①  $S \rightarrow S'$  と ③  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致を問題にしたものとみなすこともできる。

以上の検討から明らかかなように、本論文で



検討しようとするパーソナリティの自己一貫性、すなわち①  $S \rightarrow S'$  と③  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  間に一致を認知する過程については、これまでほとんど研究されてきていない。

そこで、つぎに、本研究で検討する具体的課題について述べる。

## (2). 自己一貫性の存在と機能

パーソナリティ認知の過程には、対人感情と深い関係をもつものとして想定類似性の存在が知られている (Fiedler, Warrington, & Blaisdell, 1952; Fiedler, 1954)。図1に示せば、それは、①  $S \rightarrow S'$  と②  $S \rightarrow O'$  の一致、もしくは①  $S \rightarrow S'$  と④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$  の一致で表される。<sup>(注1)</sup>

本研究では、対人的文脈における自己認知過程を重視する立場から、図1に示した認知過程のうち、とくに、認知者が自分に認知するパーソナリティ ( $S \rightarrow S'$ ) と、他者からみられると思う自己 ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) に注目する。そして、両者の一致度、すなわち自己一貫性の程

(注1). Fiedler (1951), Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952), Fiedler & Senior (1952) の研究では、AS は①  $S \rightarrow S'$  と④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$  の一致で示され、Fiedler (1964) の研究以後では①  $S \rightarrow S'$  と②  $S \rightarrow O'$  の一致で示されている。梶田 (1968) は、同じ認知者 S による②  $S \rightarrow O'$  と④  $S \leftarrow (O \rightarrow O')$  の測度間に  $r = .606$  ( $df = 55, p < .001$ ) の相関があったことを報告している。

度と相手に対する好悪感情との関係について、以下の四つの観点から検討し、自己一致性を認知する過程に含まれる対人的適応機能を究明することを第1の目的とする。

#### (A) 自己一致性と対人交渉過程

他者に対する好悪感情の規定要因については、従来から多くの研究が行われてきている。その中には、本研究でとり上げる自己一致性に関連すると思われる内容のものも存在している。すなわち、認知者の側で、相手から自分が受容されている、あるいは好意的に評価されていると認知すると、当該他者に対して好意をもつようになるというものである (Backman & Secord, 1959; Dittes, 1959; Manis, 1955; Maehr, Mensing, & Nafzger, 1962; Videbeck, 1960)。しかしながらこれらの研究では、認知の対象としてパーソナリティが扱われているのではなくて、感情や能力の評価が問題にされている。

Backman & Secord (1962)の研究では、パーソナリティについての  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  <sup>(注2)</sup> の一致度と選

(注2) Backman & Secord (1962)は、こうした記号で表現していない。しかしその研究では、認知者のパーソナリティに関する“他者から自分に向けられる行動の認知”と記述された内容が、実際には“他者が自分(認知者)をどうみているか”という観点から測定されたので、便宜的に、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  と表記した。

5 択的評価（好悪感情）の關係が31名の女子学生について検討されている。そして、中立的もしくは好意をもたない相手よりも好意をもつ相手について、これら二つの認知過程間に高い一緻性が認知されるという結果を示している。

10 そこで、本研究では、まず現実の学級集団の場で Backman & Secord (1962) の研究を追試的に検討して、自己一緻性と好悪感情との關係を究明する。つぎに、その学級集団活動の進展に伴う自己一緻性と好悪感情の關係の継時的変化について検討する。

(b). 自己一緻性の程度が対人感情に及ぼす影響

15 すでに述べた Backman & Secord (1962) の研究や、Kajita (1968)、今川・岩渕 (1981) の研究では、個人がある特定の他者について認知する自己一緻性の程度 ( $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一緻度) と当該他者に対する好悪感情が密接に關係していることが示されている。しかし、これら

の研究で示された関係はあくまで相関的關係であつて、因果的關係までが吟味されたものではない。対人關係の中における自己一致性の機能を明確にするためには、個人がある特定の他者について認知する自己一致性の程度が、その他者に対する好悪感情の規定因として位置づけられるかどうかを検討する必要がある。

そこで、個人ごとに、その個人が中立的感情をよせる他者について認知している自己一致性の程度（独立変数）を、実験的情報を与えることで増加・減少させ、それに伴つて当該他者に対する好悪感情（従属変数）がどのように変動するかを検討する。

### (C). 自己認知水準と自己一致性

本研究における自己一致性は、パーソナリティに関する認知者の  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  が一致することと定義された。いま、自己一致性の程度によつて相手に対する好悪感情が異なるという結果が得られたとしても、つぎのような

問題が残る。すなわち、自己ないし他者から認知されたパーソナリティの質、つまり、認知者の側で自分自身のパーソナリティとしてどのような内容を認知し、さらに、他者からどのようなパーソナリティの持ち主としてみられていると認知するかによつて、自己一致性の程度が異ならないかどうかという問題である。

Deutsch & Solomon (1959) の実験では、ある作業課題（埋没図形発見テスト）の成績に関して肯定的な自己評価あるいは否定的な自己評価をした個人について、他者から肯定的あるいは否定的に評価される際の感情的反応を検討している。そして、肯定的な自己評価をしている個人が他者から否定的な評価を受けると、その相手に対し非常に非好意的に反応する、しかし、否定的な自己評価をしている個人が他者から否定的な評価を受けると、その相手に対しかなり好意的に反応するという結果を示している。この結果は能力評価に関するものであるが、認知者の自己認知が否定的

なものであっても自己一致性が想定される他者に対して好意的に反応することを示している。

鈴木(1971, 1974)は、自分について認知するパーソナリティ内容の受容度(満足している程度)が肯定的か否定的かに関係なく、好きな友人について認知する自己一致性<sup>(注3)</sup>の方が嫌いな友人についての場合より大きいことを示している。

想定類似性については、自己評価の低い個人の場合では好きな友人についても嫌いな友人についても類似性が想定されないという結果が得られている(Kajita, 1968)。また、自分について認知するパーソナリティ内容の受容度が否定的な個人の場合では、他者に対する好悪感情が違っても想定される類似性の程度に差が認められないという結果が示されている(鈴木, 1974)。

以上のことからわかるように、従来の研究では、自己認知内容に関する評価(自己認知

(注3) 鈴木(1971, 1974)は、認知的類似性(perceived similarity)と呼んでいる。それは、同時に検討された想定類似性と区別するためのものである。

内容が肯定的か否定的か)と受容(自己認知内容に満足しているか満足していないか)の二つの側面が別個にとり扱われ、統一的な結果が得られていない。そこで本研究では、認知者の $S \rightarrow S'$ に関する評価水準と受容水準を同時に考慮して、自己認知水準の違う個人が他者について認知する自己一致性について検討する。

#### (d). 集団内地位と自己一致性

Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952)の研究では、集団内で人気の高い個人と人気の低い個人の間で、他者(好きな友人や嫌いな友人)について認知する想定類似性の程度に差が認められないことが示されている。

個人の集団内地位は、その集団の他の成員による感情的受容の程度を示すものであり、それ自体、対人的適応の指標でもある。こうした集団内地位と自己一致性との関係については未だまったく検討されていない。パーソナリティの自己一致性を認知する過程に対人的

適応機能が認められるかどうかを検討するためには、集団内地位との関係についての分析が必要である。

そこで、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952)の追試的検討を含めて、集団内地位と自己一致性の関係の分析をここでの検討課題とする。

### (3). 自己一致性の生起過程

パーソナリティ認知の過程で自己一致性が生起する際の機制には、理論的にも、また従来の研究結果からも、方向の異なる二つの一致過程を予想することができるといえる。一つは、認知者の側で、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ を基準にして、それに $S \rightarrow S'$ を近づけて認知することによって一致に至る過程である。他の一つは、逆に、 $S \rightarrow S'$ を基準にして、それに合致させるようなかたちで $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ を認知する過程である。

Gerard (1961) は、個人がある属性に関して自己評価(自己認知)しようとする際、二つの社会的比較過程が区別されるとしている。一



つは、自分の位置をその属性に関する他者の位置と直接比較する過程である。この時の他者の位置は、認知者にとって情報的影響 (*informational influence*) を与えるものである。他の一つは、自分の位置が他者からどのようにみなされているかという認知によって自己の評価が影響される過程である。この場合、他者が認知者にとってなんらかの意味で価値ある存在であれば、そうした他者の判断についての認知は、認知者に規範的影響 (*normative influence*) を及ぼすものとなる。Gerard (1961) は、個人の空間関係把握能力に関する自己評価について、規範的影響が顕著であったことを示している。

一方、Backman & Secord (1962) は“認知歪曲 (*misperception*)”の過程を強調する。これは、個人が、他者からみられている自己 ( $O \rightarrow S'$ ) に関する情報を与えられ、それが自分で認知している自己概念 ( $S \rightarrow S'$ ) と矛盾するような場合、その相手との対人的適応状態を維持しよ

うとして、相手からみられていゝらと思ふ自己の内容 ( $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ ) を  $S \rightarrow s'$  と合致する方向へ歪めて認知するというものである。

これらの研究は、いづれも  $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  が一致する際の一一致過程に関連するものである。しかし、どの場合も、自己の要因を強調するか、あるいは他者に関する認知の要因を強調するかのどちらか一方の側からの検討であつて、そうした認知過程間の原因-結果関係についての全体的な結論を示すに至つていない。また、これらの研究で扱われていゝる自己概念は、自分の能力的側面の評価に集中していゝる。能力的側面については、評価の方向性が明確であるという方法論的な利点はある。しかし、本研究で問題にしようとするパーソナリティ認知の過程を直接とり扱つた研究はほとんどみられない。

そこで本研究では、パーソナリティ認知過程における自己一致性の生起機制について、つぎの二つの側面から検討することを第2の目

的とする。

(a). 自然な事態における自己一致性の生起過程

自己一致性について、好悪感情との関連からいえば、嫌いな相手に対するよりも好きな相手に対して一致の程度が高い状態を示すと考えられる。また、認知的一貫性理論の考え方から、つぎのように期待できる。すなわち、自己一致性は、相手に対する好悪感情により異なる状態を示すと同時に、さらに個人がかかわりをもつすべての他者に関してある程度の一致を認知する過程として存在するであろう。しかも、そのような人々との対人的交渉の進展に伴って、一層安定的な対人的環境を構成するようにその一致の程度が高まると期待される。

Backman & Secord (1962) の研究では、対人的適合を保つ方途として、選択的相互作用 (selective interaction) が検討されている。そして、個人には、日ごと相互作用する機会の多い相手と

の間での方がそうでない相手との場合よりも、自己認知と相手から自分に向けられる行動に関する認知の適合性を高く認知する傾向があることを示している。しかしながら、この結果はある一時点での調査研究の結果であり、時間を関数とした継時的検討はなされていない。

そこで本研究では、学級集団の自然な過程の中で、ある時点で自己一致性が不成立な事例を抽出し、それが時間的経過に伴ってたどる変動過程を分析する。それによって自己一致性の生起機制について究明する。

#### (b). 自己一致性の生起機制に関する実験的検討

自己一致性の生起過程を自然な事態で究明することは、研究のための操作がいつさ加えられたいないありのままの状況での素朴な資料の収集という点で有意義である。しかし示された結果の中に、統制されなかった変数や予期しない要因による影響が含まれる可

能性がある。

そこで本研究では、自己一致性の生起機制を実験的に解明する。その際、認知者の  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  のいおれが一方だけを独立変数とし他方を従属変数とする分析では、因果関係的機制についての一方向からの検討にしかない。いおれの側からの検討も可能であるように、本研究では、 $S \rightarrow S'$  を独立変数、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を従属変数、あるいは  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を独立変数、 $S \rightarrow S'$  を従属変数とするような実験を計画し、他者に対する好悪感情も考慮して自己一致性の生起機制を明らかにする。

#### (4) 自己一致性の生起過程における個人差要因

パーソナリティ認知を含む対人認知過程はきわめて主観的な判断過程であり、認知者のパーソナリティや能力、欲求、態度、動機づけなどの内部的要因もしくは個人差要因に大きく影響される。

Vernon (1933). Estes (1938). Dymond (1950) など  
 パーソナリティ認知の正確さに関する初期の研究  
 5 究でも、その個人差が問題にされている。し  
 かし、結果において、パーソナリティ認知の正  
 確さに関係する一定した個人差は明確にされ  
 ていない。

パーソナリティ認知の過程にかかわる個人差  
 要因として、従来の研究では、自尊心情 (self-  
 esteem)、外罰性 (extrapunitive), 権威主義的  
 10 パーソナリティ (authoritarian personality)、依存性  
 (dependency) などが検討されてきている (   
 Harvey, 1962; Stotland, Thorley, Thomas, Cohen, &  
 Zander, 1957; Gruen, 1960; Scodel & Mussen, 1953;  
 Kajita, 1968 )。これらの研究のほとんどは、  
 15 他者からの評価に対する個人の反応にかかわ  
 る個人差要因の検討である。しかも、そこで  
 検討された個々の変数の影響に関する結果は  
 必ずしも一貫したものではない。

Bieri (1955, 1966) によって体系づけられた “  
 20 認知的複雑性 (cognitive complexity)” が、対人  
 20

認知の個人差要因として近年有力視されてきている ( Leventhal, 1957; Adams-Webber, 1969; 浜名・小川・市河・高橋, 1970 )。また、自己一致性を認知的一貫性理論の枠組の中で理解しようとするとき、個人差変数として動機的要因の検討が重要になると思われる。

そこで本研究では、自己一致性を中心としたパーソナリティ認知過程における個人差要因を、認知的要因と動機的要因の二つに整理して、認知の過程に及ぼす影響を究明することを第3の目的とする。具体的にいえば、認知的要因として認知的複雑性、動機的要因として社会的動機について検討する。

(A) . パーソナリティ認知過程に及ぼす認知的複雑性の影響。

認知的複雑性は、他者を多次元的に弁別・認知することを可能にさせる個人の認知的能力として定義される ( Bieri, 1955 )。

種々の場面で、他者の行動の予測と認知的複雑性の関係について検討を行った Bieri (1955

)、Leventhal (1957)、Adams-Webber (1969) らの研究結果では、認知的に単純な個人ほど自分の反応と他者に予測する反応との間に類似性を想定しやすい傾向のあることを示している。しかし、他者の行動を予測する際の正確さについては、認知的複雑性の程度との間に一貫した関係が認められていない。しかも、本研究の主題であるパーソナリティ認知もしくは自己一貫性については、そうした要因による影響がまったく検討されていない。

そこで本研究では、パーソナリティ認知過程に及ぼす認知的複雑性の影響について検討する。

#### (b). 社会的承認欲求の影響

Heider (1946, 1958) にはじまるいわゆる認知的一貫性に関する諸理論は、現象的には自己および他者に関する認知要素間の内的一貫性あるいは調和を問題としている。しかも、その基本的前提としてなんらかの動機的要因がその基底にあることを仮定している。しかし、



これらの理論と具体的な動機的要因との対応関係については、これまで必ずしも明確にされていらない。

本研究は、パーソナリティ認知の過程を認知的一貫性理論の枠組から検討しようとしてい  
 る。そこで、従来から、認知者の動機的要因の一つとして注目されてきた自尊心につ  
 いて、その規定因の一つと考えられる社会的承認欲求 ( *motive for social approval* ) の側面からパ  
 ーソナリティ認知過程に及ぼす影響を検討する。

### (C). 自己一致性生起過程の類型的差異と社会的動機づけ。

前述のように、自己一致性の生起過程には方向の異なる二つの一致過程が存在すると考えられる。一つは、認知者の側で、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を基準にしてそれに  $S \rightarrow S'$  を合致させることによつて一致に至る過程である。他の一つは、逆に、 $S \rightarrow S'$  を基準にしてそれに合致させるように  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を認知することによつて一致に至る過程である。

このような一致過程については、認知者全体についての集団法則的な傾向を分析することによって、その存否を検討することができると同時に、個々の認知者を単位とした検討も可能である。その際、個人によって自己の要因 ( $S \rightarrow S'$ ) を強調するような個人や、他者に関する要因 ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) を強調するような個人、さらにはそのいづれをも重視するような個人が存在するのではないかとということが問題となる。さらに、そうした個人差がいかなる要因によって生じているのかが問題となる。

そこで本研究では、自己一致性の生起過程にみられる類型的差異について、親和動機 (*affiliation motivation*) や基本的対人関係志向性 (*fundamental interpersonal relationships orientation*) などを含めた種々の社会的動機づけ (*social motivation*) の側面から検討する。

#### (d). 個人差要因の一般性の検討

自己一致性の生起過程にみられる個人差要

因が、パーソナリティ認知という問題領域だけに限定されるのではなく、それとはまったく次元の異なる問題領域にも一般化できる機能に基づく要因であることが示されれば、人間理解にとって有意義なことであると思われる。

本研究では、自己一致性の生起過程にみられる類型的差異を、対人的事態とは異なる知覚判断事態における場依存性-独立性 (field dependency - independency) に関して検討し、個人差要因の一般性について吟味する。

#### (5). 本論文の構成

本論文は五つの章より構成されている。第1章では、すでに述べたように、対人認知、パーソナリティ認知に関する諸研究の展望と研究動向、および本研究の基本的問題が述べられている。第2章においては、対人関係の中で果たしている自己一致性の機能に関する調査と実験、第3章では、自己一致性の生起機制を解明するための調査と実験、第4章

5  
10  
15  
20  
20  
20

においては、そうしたパーソナリティ認知の過程に影響している個人差要因の問題をそれかれ詳述する。そして第5章では、第1章から第4章までに提起された問題を総括し、今後さらに検討されるべき課題について述べる。

## 第2章 対人関係における自己一致性の機能

認知者と被認知者が既知の場合のパーソナリティ認知には、未知の場合と異なり、相手を認知し判断するのに必要な情報が十分存在する。また、その認知内容も、すでに確立している両者の感情関係や地位関係に強く影響されたものになる。

本研究では、認知者が“自分について認知するパーソナリティ ( $S \rightarrow S'$ )”と“他者からみられていると思う自己のパーソナリティ ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ )”という二つの認知内容の一致を“自己一致性”と定義する。いま、認知者の側で、特定の他者について認知する  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  と、実際にその人によって認知されている内容 ( $O \rightarrow S'$ ) とがくい違う場合には、認知もしくは判断の正確性という観点からすれば、それは認知者の判断の誤りであり、認知の歪みになる。し

かし本研究では、そうした認知の歪みの過程にこそ、人が自他のパーソナリティを認知する際の基本的傾向ないしは対人的適応のあり方が反映されると考える。

本章では、パーソナリティ認知過程における自己一致性の機能について、対人感情の側面から検討する。

## 1. 自己一致性と対人交渉過程

### (1) 問題の設定

他者に対する好悪感情の規定要因については、従来から多くの研究が行われてきている。その中では、パーソナリティ認知の過程に係るものとして、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952)、Fiedler (1954) の想定類似性 (assumed similarity) の研究がよく知られている。

想定類似性は、第1章の4 (問題の所在) で示した図1にそつていえば、認知者による自分のパーソナリティの認知 ( $S \rightarrow S'$ ) と他者に対

するパーソナリティ認知 ( $S \rightarrow O'$ ) が一致もしくは類似することに対してあてられた概念である。Fiedlerらによつて、想定類似性の程度は相手に対する好悪感情によつて異なり、好きな友人に対する方が嫌いな友人に対するよりも大きいことが示された。そして、この概念は、相手に対する潜在的好意度を示す指標として位置づけられた。

Secord & Backman (1961) は、Cooley (1902), Mead (1934) らの社会的文脈の中で自己を理解しようという考え方を、いわゆる認知的一貫性理論 (cognitive consistency theory) の枠組から整理した理論を提唱している。すなわち、個人には、自己概念のある側面に関する“自己認知”、“自分の行動についての認知”、“その側面に関して他者から自分に向けられる行動についての認知”という三つの認知過程間に、適合的な状態を保とうとする傾向があると考え、これを“対人的適合理論 (interpersonal congruency theory)”と呼んでいる。

この理論の検証のために計画された Backman & Secord (1962) の研究では、さきに述べた三つの認知過程のうち、認知者のパーソナリティについての“自己認知”と“そのパーソナリティ側面に関して他者から自分に向けられる行動の認知”の二つの認知過程がとり扱われている。彼らは、学生宿舎で生活して互いに熟知している31名の女子大学生を対象に、適合性理論からひき出された選択的相互作用 (selective interaction)、選択的評価 (selective evaluation)、認知歪曲 (misperception) に関する仮説を検討している。パーソナリティ認知の測定は、 $S \rightarrow S'$ 、 $S \rightarrow O'$ 、 $S \rightarrow (O \rightarrow S')$ <sup>(注4)</sup> の各過程について、両極性のパーソナリティ特性16対 (32個) から5個選択させる仕方で求められた。

認知者ごとに、相互作用頻度の高い相手と低い相手、および、好きな相手と嫌いな相手15名ずつについて、 $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  の一致度の差が検討された。そして、相互作用頻度の高い相手や好きな相手に対する方がそうでな

(注4) p.57 に記した注2(脚注)参照のこと。



い相手に対するより一致度の大きいことが示された（選択的相互作用と選択的評価）。

認知歪曲については、相互作用頻度の異なる相手や好悪感情の異なる相手について  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致度と  $S \rightarrow S'$  と  $O \rightarrow S'$  の一致度の差が検討された。その結果、相互作用頻度の高い相手や好きな相手に対する方がそうでない相手に対するより、自己認知と他者による評定との実際的一致（ $S \rightarrow S'$  と  $O \rightarrow S'$  の一致）以上に  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致を認知する程度が高いことが示された。

このような結果については、つぎの二つの点が問題になると思われる。すなわち、対人関係が検討された次元間の独立性の問題と、パーソナリティ認知と対人関係の継時的変化の問題である。

まづ、次元間の独立性について検討する。Backman & Secord (1962) の研究では、相互作用 (interaction) と評価 (evaluation、実際には liking) の相関は  $r = .18$  で、二つの対人関係次元は独

女だったと考察されている。しかし、浜名・市河(1964)が高校生男女55名について検討した結果では、好悪感情関係次元と相互作用関係次元の間に、男子で  $r=.56$  ( $df=25, p<.01$ )、女子で  $r=.42$  ( $df=28, p<.05$ )、全体で  $r=.49$  ( $df=54, p<.01$ ) のいずれも有意な正の相関が認められた。Backman & Secord (1962) と浜名・市河(1964)の結果間で、次元間の独立性が異なった原因につきのような要因を考えることが出来る。すなわち、大学生と高校生という被験者の発達差、共同宿舎と学級集団という環境差、さらに好悪感情と相互作用の理解に対する文化差などである。重ねて検討すべき問題ではあるが、感情と行動の連関性という面から考えれば、両者にかなりの程度の相関性を期待する方が妥当であるように思われる。

こうした点を考慮して、本研究では、とくに感情関係次元に的を絞り、まず現実の学級集団の場で Backman & Secord (1962) の研究を追試的に検討することによって、自己一致性

と好悪感情との関係を解明する。その際、想定類似性と好悪感情との関係をもあわせて吟味し、対人関係事態における自己一致性と想定類似性の機能について比較検討する。

つぎに本研究では、学級集団活動が進展するのに伴う自己一致性・想定類似性と好悪感情の関係の継時的変化について検討を行う。

Backman & Secord (1962) の研究では、この点の検討が欠けている。本研究で予想するよう  
 に、パーソナリティ認知の過程で自己一致性が  
 対人的適応の機能を担っているとすれば、対  
 人関係の進展に伴ってその好悪感情との関係  
 がさらに強まると期待できる。想定類似性を  
 あわせてとり扱うのは、自己一致性の機能を  
 一層明確にするためである。

付加的に、本研究では、自己一致性や想定  
 類似性と好悪感情との関係にパーソナリティ特  
 性の社会的望ましさ (social desirability) がど  
 のように影響するかについても検討する。す  
 でに述べたように、Fiedler, Warrington, &

Blaisdell (1952) の研究では AS と ASI (assumed similarity to the ideal) の二つの想定類似性が示されている。ASI に関しては、Lundy, Katkovsky, Cromwell, & Shoemaker (1955)、梶田 (1967) らによって“理想化傾向 (idealization)” というかたちで確認されている。かりにこれらの現象に特性の社会的望ましさが影響しているとしても、それは、AS よりもむしろ ASI に対して大きいと思われる。自己一致性について特性の社会的望ましさの観点から検討を行った研究は、現在のところ Backman & Secord (1962) の試みだけである。しかし、彼らの分析では検討の対象とされた被験者数が少数だったこともあって、明確な結論を得るに至っていない。もしも自己一致性あるいは想定類似性と好悪感情との関係が、特性の社会的望ましさの影響によるみかけ上の現象にすぎないとするれば、それらを認知する過程に含まれる機能はきわめて限定されたものになる可能性がある。

以上の三つの問題がここでの検討課題である。

## (2) . 研究 1

### (a) . 方法

被験者：研究の対象となったのは広島県立  
 広高等学校の1年生55名である。男女別の内  
 訳は、男子が26名、女子が29名であった。

測定内容：①好悪感情の測定…学級の同性  
 10 集団内で、自分を除く他の全成員を「好き」  
 な順に順位づけさせた。男子の場合、それが  
 1位から25位まで、女子の場合、1位から  
 28位までとなる。測定に際しては、まず、自  
 15 分を除く他の全成員を「好き」「どちらかと  
 いえは好き」「どちらかといえは嫌い」「嫌  
 い」の次元で4分割させ、つぎにそれぞれの  
 カテゴリー内で順位づけさせる方法を用いた。

②パーソナリティ認知の測定…①自己認知（  
 20  $S \rightarrow S'$ ）：各成員に24個のパーソナリティ特性を  
 与え、自分を最もよく表すと思う5個を選択

させ、1位から5位に順位づけさせた。②他者認知 ( $S \rightarrow O'$ ): 同性集団内の全成員の各々に関して、24個のパーソナリティ特性より、その個人を最もよく表すと思う5個を選択させ、1位から5位に順位づけさせた。③他者からみられていると思う自己 ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ): 同性集団内の全成員の各々に関して、24個のパーソナリティ特性より、その個人からみられていると思う5個を推定させ、1位から5位に順位づけさせた。

③特性の社会的望ましさの評定…24個のパーソナリティ特性を、「人間の性格として望ましい」と思う順に1位から24位に順位づけさせた。その際、さきの好悪感情の測定の場合と同様に、まづ、24個の特性を「望ましい」から「望ましくない」の次元で4分割させ、さらに分割されたカテゴリ一内でそれをれ細かく順位づけさせる方法をとった。

なお、パーソナリティ特性には、Backman & Secord (1959) の用具を加筆修正した24個を用い

(注5) 以上の測定は、回答する際の混乱を避けるために4回に分けて行った。

測度：自己一致性の測度は、被験者が自分に認知した5個 ( $S \rightarrow S'$ ) と他者からみられていると思う自己に推定した5個 ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) の一致数、想定類似性は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow O'$  の一致数とした。したがって、各測度のひとりの他者に関する得点可能範囲は0点から5点となる。

なお、測定が行われたのは学級編成後3か月を経た時期であり、各成員は互いに熟知した関係になっていた。

#### (b) 結果

まず、自己一致性および想定類似性と好悪感情との関係について検討を行う。表2に示したのは、好悪感情の測定に基づき、上位に順位づけられた3名と下位に順位づけられた3名を被験者ごとに抽出し、それらの相手との間に認知した自己一致性と想定類似性の得点（得点可能範囲は0点～15点）を好悪感情別に検討した結果である。

(注5) のんきな、協調的、知的でない、支配的、陽気な、消極的、信頼できない、親切な、意志が強い、こせこせする、義理がたい、冷静な、陰気な、積極的、不義理な、知的な、気持がデリケート、非協調的、線が太い、信頼できる、親切でない、服従的、興奮しやすい、意志が弱い、の24個を使用した。

表 2. 好悪感情別にみた自己一致性と想定類似性の程度

測 度	被 験 者 (人 数)	好 悪 感 情				差
		好 き		嫌 い		
		M	SD	M	SD	
自己一致性	男子 (26)	6.16	2.31	5.34	2.56	0.82
	女子 (29)	7.27	1.93	5.97	2.20	1.30**
	計 (55)	6.75	2.12	5.67	2.40	1.03**
想定類似性	男子 (26)	5.42	2.44	1.73	1.56	3.69***
	女子 (29)	6.00	2.23	2.00	1.41	4.00***
	計 (55)	5.73	2.35	1.87	1.49	3.86***

t 検定 ( 両 側 ) \*\*p<.02 \*\*\*p<.001

表 2 の 結 果 か ら 、 男 子 の 自 己 一 致 性 の 測 度 関 係 し て 好 悪 感 情 に よ る 有 意 差 が 認 め ら れ な かつ た 。 し か し 、 全 体 的 に 、 個 人 は 、 好 き な 相 手 に 対 す る 方 が 嫌 い な 相 手 に 対 す る よ り も 自 己 一 致 性 と 想 定 類 似 性 の 程 度 を 有 意 に 高 く 認 知 す る 傾 向 が 認 め ら れ た 。 こ の よ う な 結 果 は 、 Backman & Secord (1962) の 選 択 的 評 価 の 傾 向 や Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) 、 さ ら に Fiedler (1954) で 示 さ れ た 結 果 と 合 致 す る も の で あ る 。 な お 、 表 2 に つ い て 詳 し く 検 討 す る と 、 自 己 一 致 性 の 得 点 が 想 定 類 似 性 の

20  
20



得点よりも、好きな相手に対してても嫌いな相手  
 手に対してても高いことが注目される。とくに  
 、嫌いな相手に対する場合において両測度間  
 の差が顕著である。このことは、自己一致性  
 と想定類似性が対人関係の中で果たしている  
 機能の違いを示している可能性もあり、続け  
 て検討すべき問題であろう。

つきに、自己一致性および想定類似性と好  
 悪感情との関係に及ぼす特性の社会的望まし  
 さの影響について検討する。

社会的望ましさを要因は、パーソナリティ認  
 知、とくに社会的文脈における自己認知に関  
 連した問題をとり扱う場合、考慮しなければ  
 ならない要因である。一般に、個人は、自己  
 および他者のパーソナリティを認知する際、人  
 間の性格として望ましいと思う特性を、自己  
 に対し認知しあるいは好きな他者に対して認  
 知しがちであるといわれる。本研究で用いら  
 れたパーソナリティ特性の各々は、それぞれな  
 らか程度の社会的望ましさをもっている

。認知者が、自分自身に対して社会的に望ましい諸特性を認知し、そして、自分の好きな友人からも、自分がそうした社会的に望ましい諸特性をもつているとみられていると認知したと仮定しよう。その場合、社会的に望ましい諸特性が、かなりの頻度で  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の双方に認知される。その結果、特性の社会的望ましさに影響された“みせかけの自己一致性”が作りだされてしまうことになる。このことは、想定類似性についても同様である。

自己一致性や想定類似性の程度が他者との間で高く認知されても、それが、社会的に望ましい諸特性を自己および他者について認知したことによる効果ではないかという疑問が生じる。特性の社会的望ましさによる影響を統制してもなお、表2で示されたような結果が存在するのだから、自己一致性や想定類似性は対人選択の要因として狭い意味しかもち得ないことになる。

この問題の解明のため、つぎのような検討を試みた。この検討の鍵は、すべての被験者にとって社会的望ましき順位が等しい特性群をセットにして、それを別々に分析するところにある。自己一致性を例にとりて、本研究で対象とした55名の被験者がそれぞれ社会的望ましき順位で1位にあげた特性について説明する。

$S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  における特性の社会的望ましきと自己一致性の影響は、55名の被験者が最も社会的に望ましいとした特性についての判断に関して、表3のような2×2分割表で吟味できる。

表3. 自己一致性と特性の社会的望ましきの関係分析表

$S \rightarrow S'$	$S \rightarrow (O \rightarrow S')$		計
	与えたと思う(+)	与えないと思う(-)	
与えた(+)	a	b	a+b
与えない(-)	c	d	c+d
計	a+c	b+d	

表3において、二つの要因が周辺度数に影響する。一つは、特性の社会的望ましさの要因であり、他の一つは、選択数制限の要因である。たとえば、ある特性が、社会的に望ましいという理由で  $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (0 \rightarrow s')$  に認知されるとすると、 $(a+b)$  と  $(a+c)$  の周辺度数が多くなる。また、測定手続き上、 $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (0 \rightarrow s)$  は24個の特性から5個選択する方法がとられたので、この選択数制限の影響は  $(b+d)$  と  $(c+d)$  の周辺度数の増加となつて現れる。

したがって、表3の各セルに期待される度数は、社会的望ましさの要因と選択数制限の影響を反映した値になる。ところで、自己一貫性は、各セルのうち、 $(a)$  と  $(d)$  の度数を多くし、 $(b)$  と  $(c)$  の度数を少なくするように作用するはずである。そこで、観察された  $(a)$  と  $(d)$  の度数が期待値より大きく、 $(b)$  と  $(c)$  の度数が期待値より小さければ、自己一貫性が上に述べた要因による影響以上に認められたことになると考えた。

以上の論理により、各被験者が特性の社会的望ましさを順位づけで1位から5位にあげた五つの特性群について、自己一致性や想定類似性との関係を分析した。表4に示したのはその結果である。なお、この分析は、各被験者が最も好きと評価した他者との間で行った

表4. 特性の社会的望ましさを統制した自己一致性と想定類似性の検討

社会的望ましき順位	自己一致性				想定類似性					
	S-(O→s')			検定	S→O'			検定		
	+	-	計		+	-	計			
1 位	S→s'				S→s'					
	+	16	8	24	$\chi^2=7.21$	+	22	2	24	$\chi^2=13.66$
	-	9	21	30	df=1	-	13	17	30	df=1
	計	25	29	54	p<.01	計	35	19	54	p<.001
2 位	+	15	7	22	$\chi^2=8.47$	+	16	6	22	$\chi^2=4.43$
	-	9	23	32	df=1	-	14	18	32	df=1
	計	24	30	54	p<.01	計	30	24	54	p<.05
3 位	+	12	9	21	$\chi^2=5.96$	+	10	11	21	n.s
	-	8	25	33	df=1	-	14	19	33	
	計	20	34	54	p<.02	計	24	30	54	
4 位	+	8	7	15	$\chi^2=3.74$	+	5	10	15	n.s
	-	10	29	39	df=1	-	18	21	39	
	計	18	36	54	p<.10	計	23	31	54	
5 位	+	7	11	18	n.s	+	11	7	18	$\chi^2=7.96$
	-	4	32	36		df=1	-	8	28	36
	計	11	43	54		p<.01	計	19	35	54

(注) 55名中1名は、特性の社会的望ましきの記入に不備があり、分析対象より除いた。

ものである。

表4より、自己一致性については、特性の社会的望ましさの順位づけで1位から5位までにあげられた五つの特性群のうち、1位・2位・3位・4位の4特性群に有意差が認められた。これより、自己一致性は、特性の社会的望ましさによる影響を統制してもなお、対人感情の規定因としての役割を果たしていると考えられることのできる。想定類似性についても、5特性群のうち3特性群に有意差が得られ、自己一致性の場合よりやや弱いものの社会的望ましさによる影響以上の現象であると認められることのできた。

最後に、パーソナリティ認知過程相互の独立一依存関係について検討する。自己一致性と想定類似性は、対人感情に影響する要因として同じような規定力をもち、それぞれ独立の効果ないし影響を及ぼすのであろうか。それとも、どちらかが一方が他方に依存し規定される関係にあるのであろうか。このことの検討

は、各被験者に関して、 $S \rightarrow S'$  および最も好きな相手に対する  $S \rightarrow O'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  において、それをれ順位づけの1位にあげられた特性について行った。

まず、24個の特性から選択する5個に含まれる場合を「+」、含まれない場合を「-」と表現すると、 $S \rightarrow S'$ 、 $S \rightarrow O'$ 、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の関係は表5のようになる。

表5.  $S \rightarrow S'$  を中心とした三つの認知過程の関係パターン

パターン	$S \rightarrow O'$	$S \rightarrow S'$	$S \leftarrow (O \rightarrow S')$
1	+	+	+
2	+	+	-
3	-	+	+
4	-	+	-

表5に関して、各被験者が  $S \rightarrow S'$  で1位にあげた特性を基準にして考えると、その特性が  $S \rightarrow O'$  に含まれれば、その特性に関して想定類似性が成立する（パターン1と2）。また、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  に含まれれば自己一致性が成立する（パターン1と3）。

ある特性の認知に関して、自己一致性と想定類似性の成立・不成立にかかわる影響関係を比較的に分析しようとするれば、両者が同時に成立する場合（パターン1）や同時に成立しない場合（パターン4）ではなくて、一方が成立し他方が成立しない場合（パターン2と3）の度数の比較が決め手になると思われる。以上の考え方に基づいて、各被験者が最も好きとした相手だけについて分析した結果が表6である。

表6. 自己一致性と想定類似性の関係分析

認知過程		想定類似性		計
		成立	不成立	
自己一致性	成立	17 (a)	19 (b)	36
	不成立	7 (c)	12 (d)	19
計		24	31	55

CR=2.353  $p < .02$  (両側)

(法) 表中の(a)はパターン1, (b)はパターン3, (c)はパターン2, (d)はパターン4に対応する。

表6の分析結果から明らかのように、自己一致性が成立すると同時に想定類似性も成立



する場合（パターン1）はかなり多い。しかし、想定類似性が成立しなくても自己一致性の成立する場合（パターン3）の方が、想定類似性が成立しなくても自己一致性の成立しない場合（パターン2）より有意に多かった。このことは、自己一致性の方が想定類似性よりも、他者を好意的に評価したり、他者と好意的な関係を維持したりする際に有力に作用していることを示すものである。

研究1の結果から、パーソナリティ認知過程における自己一致性と想定類似性は、他者に対する好悪感情と密接に関係していること、なかでも自己一致性の方が想定類似性よりも、他者を好意的に評価したり、好意的な関係を維持したりする対人的適応の機能を大きく担っていることが示唆された。

そこで、こうした結果をさらに明確化する目的で研究2を計画した。研究2でとくに問題としたのは、自己一致性および想定類似性と好悪感情との関係の経時的変化を検討する

ことである。これは、研究1から示唆されたように、自己一致性が想定類似性以上に対人的適応の機能を担うものであるとすれば、対人関係の進展に伴って、自己一致性と好悪感情との関係がさらに強まるものと期待されたからである。

### (3) 研究2

#### (a) 方法

被験者：研究の対象となったのは、広島県立広高等学校の1年生50名である。男女別の内訳は、男子が22名、女子が28名であった。

測定内容：研究1で用いたのと同様の方法で、好悪感情の測定とパーソナリティ認知の測定 ( $S \rightarrow S'$ ,  $S \rightarrow O'$ ,  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$ ) を行った。なお、パーソナリティ特性には、研究1で使用した特性に加筆修正した16個を用いた<sup>(注6)</sup>。

時間的経過に伴う変容を検討するため、同様の測定を1か月間隔で2度実施した。資料の収集は、学級が編成された5か月後(第1

(注6) 自主的、興奮しやすい、自信がない、親切的、こせこせする、知的な我が強い、依存的、のんきな、消極的、知的でない、自信がある、積極的、意志が弱い、親切でない、冷静な、の16個を使用した。

回測定) と 6 か月後 (第 2 回測定) に行った。  
 測度: 自己一致性の測度は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (0 \rightarrow S')$   
 の一致数、想定類似性の測度は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow 0'$  の  
 一致数とした。したがって、各測度のひとりの  
 他者に関する得点可能範囲は 0 点から 5 点  
 である。

### (b). 結果

まず、好悪感情の測定結果から、上位に順  
 位づけられた 3 名、中位に順位づけられた 3  
 名および下位に順位づけられた 3 名を被験者  
 ごとに抽出し、それぞれ好意感情群・中立感  
 情群・嫌悪感情群とした。分析の対象は、2  
 回の好悪感情測定をとおして上位 3 名・中位  
 3 名・下位 3 名中に含まれた個人に限定した  
 。そして、自己一致性と想定類似性の程度を  
 対人感情別に整理分析した (それぞれ得点  
 可能範囲は 0 点 ~ 5 点)。なお、2 回の測定  
 をとおして、各感情群に同一他者を 1 名以上  
 もった被験者は、好意感情群で 47 名、中位感  
 情群で 30 名、嫌悪感情群で 47 名であった。

表7は自己一致性と好悪感情との関係を継続的に示したもので、表8はそれを分散分析した結果である。

表7. 好悪感情別にかた自己一致性得点の継続的変容

時間	好悪感情			計
	好き	中立	嫌い	
I	2.78 (.81)	2.58 (1.01)	2.18 (.94)	7.54
II	3.04 (.84)	2.97 (.98)	2.67 (.88)	8.68
計	5.82	5.55	4.85	16.22

(注) 表中の数値は平均値、( )内は標準偏差、平均値の範囲は0~5.

表8. 自己一致性得点(表7)の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
好悪感情 (A)	0.251	2	0.125	6.112**
時間 (B)	0.217	1	0.217	10.566**
(A) × (B)	0.013	2	0.007	< 1
誤差	4.968	242	0.021	
全体	5.449	247		

\*\*  $p < .01$

表8より、好悪感情と時間の主効果にいずれも1%水準で有意差が認められた。好悪感情の主効果は、研究1で示された結果を重ね

て確認するものであるが、さらに、他者との間に認知する自己一致性の程度が時間的経過とともに増大するという結果は、注目に値するものである。

表9と表10は、想定類似性についての検討結果である。表10より、好悪感情の主効果は

表9. 好悪感情別にみた想定類似性得点の経時的変容

時間	好悪感情			計
	好き	中立	嫌い	
I	2.29 (.79)	1.47 (.88)	1.21 (.91)	4.97
II	2.28 (1.08)	1.73 (1.00)	1.45 (.87)	5.46
計	4.57	3.20	2.66	10.43

(注) 表中の数値は平均値、( )内は標準偏差、平均値の範囲は0~5。

表10. 想定類似性得点(表9)の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
好悪感情 (A)	0.970	2	0.485	22.444**
時間 (B)	0.040	1	0.040	1.852
(A) × (B)	0.023	2	0.011	< 1
誤差	5.229	242	0.022	
全体	6.262	247		

\*\*p<.01

有意であり研究 1 で得られた結果と一致したが、時間経過に伴う変動は有意でなかった。以上の結果から、自己一致性については、学級の集団活動の進展に伴ってその程度が増大するという意味で、そうした傾向が認められない想定類似性より、対人的適応の機能を強く担うものであるといえよう。

#### (4) 考察

研究 1 と研究 2 で得られた結果は、自己および他者のパーソナリティに関して自己一致性を認知する過程が、対人交渉過程の中で、対人的適応機能を担っていることを示すものであった。すなわち、「個人には、自分が好意をもつ相手からは、好意をもたない相手からの場合よりも、自分で認知しているパーソナリティ内容と一致するようになり、しかもその傾向は、他者との交渉が深まるにつれてさらに強まることが示された。また、自己一致性と想定類似

性の関係を検討して、自己一致性の方が想定類似性より、自分が好意をもつ他者との関係を維持していきこうとする際に、より強く機能している事実が確認された。

自己一致性は、対人交渉過程もしくは社会的文脈における“自己”の要因をとくに強調する過程である。いいかえれば、対人感情との関連から対人関係を適応的な状態に保つとする際に、最も重要な意味をもつ要因は“自己認知”の要因であり、同時に“他者による”といえらる。つまり、自己の要因であるといえる。

しかしながら、本研究の結果をさらに発展させようとする場合に考慮しなければならぬ若干の問題がある。

まず、特性の社会的望ましさに関する検討にわかかわる問題である。好悪感情との関係において、特性の社会的望ましさの影響は、自己および他者のパーソナリティを認知する際、一般に、人間の性格として望ましい特性を自





## 2. 自己一致性の程度が対人感情に及ぼす影響

### (1) 問題の設定

研究1と研究2の結果は、個人がある特定の他者に関して認知する自己一致性の程度と、その他者に対する好悪感情とが密接に関係していることを示すものであった。同様の傾向は、Backman & Secord (1962)の研究や Kajita (1968)、今川・岩渕 (1981)の研究の結果にも示されている。しかし、これらの研究で示された関係はあくまで相関関係であって、因果関係までが吟味されたものではない。

たしかに、さまざまの対人関係が現に進行しつつある対人交渉過程の中では、Backman & Secord (1962)が示唆するように、自己一致性と好悪感情との関係は二方向的な相互依存の関係になる可能性が強いと思われる。しかしながら、対人交渉過程の中における自己一

致性の機能を明確にするためには、個人がある特定の他者について認知する自己一致性の程度が、当該他者に対する好悪感情の規定因として位置づけられるかどうかについて実験的に検討する必要がある。

この問題の検討のためにつぎのような実験計画を立てた。すなわち、個人ごとに、その個人が中立感情をよせる他者についてもつ自己一致性の程度を独立変数とし、実験的に操作される情報によってその程度を増加あるいは減少させ、そうした自己一致性の程度の増減に伴う当該他者に対する好悪感情（従属変数）の変動を分析する。

実験にあたってつぎの仮説を設定した。  
 仮説：パーソナリティ認知の過程において、ある特定の他者についてもつ想定類似性の程度が一定の場合、自己一致性の程度が増加すれば、当該他者に対して好意感情をよせるようになり、逆に、自己一致性の程度が減少すれば、より非好意的に評価するようになるで

ありう。

## (2). 研究 3

### (a). 方法

被験者：実験に参加した被験者は、広島県立広島高等学校の1年生55名である。男女別の内訳は、男子が26名、女子が29名であった。

実験前測定：①好悪感情順位づけ…学級の同性集団内で自分以外の他の全成員を好きな順に順位づけさせた。その際、まず全成員を「好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」の次元で4分割させ、つぎにそれぞれのカテゴリー内で順位づけさせる方法を用いた。②パーソナリティ認知の測定…あらかじめ24個のパーソナリティ特性リストを与え、 $S \rightarrow S'$ 、 $S \rightarrow O'$ 、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ の各側面にあてはまると思う5個を選択させた。その際、 $S \rightarrow O'$ と $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ は自分以外の全成員について求めた。なお、使用した24個の特性は研究1で用いた特性と同じものであった。以

上の測定は、回答する際の混乱を避けるために4回に分けて実施した。

測定：自己一致性の測定は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  の一致数、想定類似性の測定は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow O'$  の一致数とした。したがって、ひとりの他者についての各測定の得点可能範囲は0点から5点である。

実験手続：実験前の測定を行った2週間後に、以下に示すような手順で情報による操作を行った。まず、個々の被験者ごとに、好悪感情順位でほぼ中位に位置づけられた他の成員（男子の場合で11位～17位、女子の場合で11位～18位）のうち、自己一致性の程度が2～3点、想定類似性の程度が1～2点である他者をランダムに3名抽出し、それぞれ1名ずつを上昇操作群 ( $O_1$ )、統制群 ( $O_2$ )、下降操作群 ( $O_3$ ) に割りあてた。つぎに、各被験者に対し、以下のような教示に基づき、他者  $O_1$  および  $O_3$  による被験者に対するパーソナリティ評定 ( $O \rightarrow S'$ ) に関する偽りの情報を与え、それにより、

当該他者についての被験者の  $S \rightarrow (0 \rightarrow S')$  を変化  
 させた。すなわち、上昇操作群 ( $O_1$ ) に関しては  
 自己一致性の程度をさらに 2 点増加させる方  
 向へ上昇操作、下降操作群 ( $O_3$ ) に関してはさら  
 に 2 点減少させる方向へ下降操作した。他者  
 $O_2$  に関しては  $0 \rightarrow S'$  についての情報を与えず、  
 上昇操作群と下降操作群に対する統制群とし  
 た。実験操作を加えるために抽出した他者に  
 ついての自己一致性と想定類似性の程度を等  
 しい値に統制できなかったのは、ほとんどす  
 べての被験者において自己一致性の程度が想  
 定類似性の程度より高かったことによる。  
 実験的情報を与えるための教示は、おおむ  
 ねつぎのとおりであった。

「対人認知能力、すなわち、他の人があ  
 なたをどのように見ているかを見抜く能力  
 は、あなたが健全な人間関係を保つために  
 必要不可欠な能力です。あなたは、どの程  
 度他の人々の気持を推測できるでしょうか  
 。あなたの対人認知能力を知りたいと思

ませんが。この間の調査結果から、その一部を教えますから、それを手がかりにしてあなた自身の能力について検討してみてください。

① あなたは、『O<sub>1</sub>』さんがあなたのことを(a)・(b)・(c)・(d)・(e)とみているだろうと推定しましたが、実は『O<sub>1</sub>』さんは、あなたのことを(b)・(c)・(f)・(g)・(a)とみています。

② あなたは、『O<sub>3</sub>』さんがあなたのことを(b)・(c)・(d)・(e)・(h)とみているだろうと推定しましたが、実は『O<sub>3</sub>』さんは、あなたのことを(h)・(i)・(j)・(d)・(e)とみています。」

以上の情報は、被験者ごとに情報を記入した用紙を配布することにより与えた。記入されたパーソナリティ特性の順序はまったくランダムであった。

実験後測定：実験操作の4エックと仮説の検討のため、情報による操作を施した4日後に、①好悪感情順位づけ、②パーソナリティ認知の測定 ( $S \rightarrow S'$ ,  $S \rightarrow O'$ ,  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ )を行った。こ

これらの測定に関する教示や方法は、実験前測定の場合と同様であった。ただし、 $S \rightarrow O'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の測定は他者  $O_1 \cdot O_2 \cdot O_3$  だけについて求めた。

実験は、学級が編成された8か月後に行った。

### (b). 結果

また、実験操作が成功していったかどうかの検討も、操作前後の自己一致性的変動分析によって行った。表11はその結果である。

表11. 操作前後における自己一致性的変動分析(実験操作の検討)

操作方向	自己一致性的変動方向			計
	増加	不変	減少	
上昇操作	40	11	4	55
統制	19	24	12	55
下降操作	4	6	45	55
計	63	41	61	165

$$\chi^2 = 90.29 \quad df=4 \quad p < .001$$

表11より、自己一致性的の程度が実験的に操作された方向へ期待どおり増加を示した被験

者数は上昇操作群 55 名中 40 名、操作された方向へ期待どおり減少を示した被験者数は下降操作群 55 名中 45 名、統制群で、なんら変動を示さなかった被験者数は 55 名中 24 名となっており、人数に関するかぎり、実験操作は十分に成功していたことがわかる。

そこで、本実験で仮説した自己一致性の程度の増減に伴う好悪感情の変動を分析した。表 12 の結果は、実験操作の成功した自己一致性増加群 40 名、不変群 24 名、減少群 45 名について、実験後の好悪感情順位の変動を分析して得たものである。

表 12. 自己一致性の程度の増減に伴う好悪感情の変動分析  
(実験操作の成功した被験者について)

自己一致性	好悪感情順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
増加群	25	12	3	40
不変群	10	8	6	24
減少群	8	10	27	45
計	43	30	36	109

$\chi^2 = 29.81 \quad df=4 \quad p < .001$

20  
20



好悪感情の変動基準は、実験後測定における当該他者に対する好悪感情順位が、実験前に「上昇変動」または「下降変動」とした。その理由は、情報による実験操作を加えられた上昇操作群および下降操作群に対する好悪感情が、ともに好意的あるいはともに非好意的な方向に変動した場合、実験操作を加えないままであつても、操作群に対する好悪感情の変動に伴つて最大2段階までの順位変動が間接的にひきおこされる可能性があつたからである。

表12より、個人には、特定の他者について自己一致性の程度が増加すれば、その他者に対して好意感情をもつようになり、逆に、自己一致性の程度が減少すれば、より非好意的に評価するようになることがわかる。このことより、自己一致性が好悪感情の規定因としてその機能を果たしていることが明確に理解される。

。実験仮説は支持されたといえる。

### (C) . 考察

本実験の中心的課題は、個人が特定の他者について認知している自己一致性の程度を実験的に増減させ、それに伴う当該他者に対する好悪感情の変動を分析することにより、自己一致性が好悪感情の規定因として機能しているかどうかを検討することであつた。実験の結果は仮説を明確に支持するものであつたが、実験の方法と結果に関して若干の考察をしておこう。

まず、実験方法について検討する。本実験で、実験操作の検討は自己一致性の程度が操縦された方向に増加あるいは減少を示した被験者数について行つた。こうした分析では、操縦された方向へ自己一致性が増加あるいは減少を示していかどうかは検討できても、その増加度あるいは減少度が有意なものであつたかどうか、同時に統制された想定類似性

の程度に変化がなかったかどうかは確認されない。

そこで、このことを吟味するため、実験前と実験後の自己一致性および想定類似性の程度を比較検討して、表13の結果を得た。

表13. 操作前後における自己一致性得点と想定類似性得点の比較  
(実験操作の検討) N=55

操作方向	自己一致性			想定類似性		
	操作前	操作後	差	操作前	操作後	差
上昇操作	2.33	3.20	+0.87**	1.58	1.95	+0.37*
統制	2.38	2.56	+0.16	1.47	1.55	+0.08
下降操作	2.53	1.44	-1.09**	1.31	1.02	-0.29

t検定 ( 両側 ) \* $p < .05$  \*\* $p < .001$

表13から、操作変数である自己一致性は、実験前と実験後を比較すると、実験操作により期待された方向へ0.1%以下の水準で有意に増加および減少している。これより、自己一致性の程度を検討してみても実験操作の成功していることがわかる。しかし、統制変数である想定類似性についてみると、自己一致性の程度を増加させるように上昇操作した際、

わぶかではあるが有意な増加を示した。このことは、上昇操作に関する実験条件が混ざりしことの可能性を示すものである。この両者の効果が分離されなければ、自己一致性の独立変数としての意味がきわめて限られたものになり、従属変数である好悪感情の変動についても明確な結論を得にくくなることになる。

この疑問に対する検討は、他者 O1 についての自己一致性の程度が実験的に上昇操作されて、O1 に対する感情が好意的な方向に変動した 30 名について、その際の自己一致性と想定類似性の変動関係を分析することで行った。表 14 はその結果である。また表 15 には、下降

表 14. 好悪感情順位が実験的に操作された方向に上昇変動した場合の、自己一致性と想定類似性の変動分析

認知過程		想定類似性		
		増加	減少 (不変)	計
自己一致性	増加	15	10	25
	減少 (不変)	1	4	5
	計	16	14	30

CR=2.71 p<.01 (両側)

表 15. 好悪感情順位が実験的に操作された方向に下降変動した場合の、自己一致性と想定類似性の変動分析

認知過程		想定類似性		
		減少	増加 (不変)	計
自己一致性	減少	12	15	27
	増加 (不変)	0	4	4
	計	12	19	31

CR=3.87  $p < .001$  (両側)

操作に伴って感情が非好意的方向に変動した31名についての分析結果を示している。

表 14 より、好悪感情が好意的方向へ変動した場合に関して、自己一致性の程度と想定類似性の程度についてみると、想定類似性の程度が変動しないかまたは減少しているにもかかわらず自己一致性の程度が増加している場合の方が、想定類似性の程度が増加しているにもかかわらず自己一致性の程度が変動しないかまたは減少している場合よりも有意に多かったことがわかる。表 15 の、好悪感情の非好意的変動についても、自己一致性の効果の優位性が明確に認められる。これより、実験操作の検討に際して疑義を

残した実験条件の混こりの可能性はたんにみかけだけのものであり、表12で示されたような好悪感情の規定因としての自己一致性の効果性を少しも減ずるものではないことが明らかである。

つぎに、自己一致性を認知する過程における質的内容の問題について考察する。この実験での自己一致性の程度は、 $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致数により量的に示された。実験に際しては、個々の被験者の  $S \rightarrow S'$  を基準にして、 $O \rightarrow S'$  に関する実験的情報を与えることにより  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を変化させて一致の程度を操作した。そのため、個々の被験者によって、一致度は同じでも内容的に異なった自己一致性が成立してゐた可能性がある。

人は自分のパーソナリティを認知する際、一般的には、暗々に自分を好ましいものと認知しがちであると前提されることが多い (Heider, 1946; Homans, 1950; Festinger, 1957)。しかしながら、人によっては必ずしも自分が望ま

しいと思うパーソナリティ特性のみを自分に認知するとは限らないことを指摘する研究もある ( Deutsch & Solomon, 1959 )。たとえば、きわめて控え目に自己評定した個人を仮定するならば、他者からも自分がそのように評価されていることを実験的情報により認知した場合、その個人は、量的には自己一致性の程度が増加したとしても、その相手に好意感情をもつようになるとは限らない。逆に非好意的に評価するようになるか、あるいは、少なくともその相手に対する感情を変化させないという行動をとるかもしれない。他方、実験操作により自己一致性の程度が量的に減少したとしても、個人はその相手を非好意的に評価するとは限らない。むしろ、好意的に評価するようになるか、あるいは、少なくともその相手に対する感情を変化させないかもしれない。

こうした自己認知内容の問題については、一部には本章の研究1で特性の社会的望まし

さに関して検討されたが、それ以外のさまがまな角度から検討される必要がある。

最後に、自己一貫性が生起する際の内的機制について考察する。すでに述べたように本実験では、 $S \rightarrow S'$  を基準として、 $O \rightarrow S'$  の操作を通して  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  を変化させることによって自己一貫性の程度を増減させた。現実の相互作用事態において自己一貫性が生起する場合、 $S \rightarrow S'$  を  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  に近づけて認知することによる場合と、逆に、 $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  を  $S \rightarrow S'$  に一致するように認知することによる場合の、二つの生起過程を予想することができる。従来の研究にもこれを裏づけるものが多い ( Berger, 1952 ; Harvey, Kelley, & Shapiro, 1957 ; Deutsch & Solomon, 1959 ; Kipnis, 1961 ; Byrne & Blaylock, 1963 )。

本実験でとられた操作は、上に予想された二つの過程のうちの後者の場合にそつたものであった。表 11 で実験操作が成功しなかった被験者の場合、その原因をこつした実験操作



の方向性に求めることも可能であろう。こうして自己一致性の生起過程にかかわる問題については、本論文の第3章でとり上げる。

### 3. 自己認知の質的水準と自己一致性

#### (1). 問題の設定

本研究において、自己一致性はパーソナリティに関する認知者の  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  が一致することとして定義された。これまでの検討において、認知者が特定の他者について認知する自己一致性の程度と当該他者に対する好悪感情との関係が分析された。ここで問題になるのは、自己一致性を構成する  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の内容的側面である。すなわち、認知者が自分自身のパーソナリティとしてどのような内容を認知し、さらに他者からどのようなパーソナリティの持ち主としてみられていると認知するかによって、自己一致性と好悪感情との関係に差異がないかという問題である。

自分のパーソナリティを認知する際、人は一般に自分を暗々のうちに好ましいものに認知するという前提に立った研究は多い (Heider, 1946; Homans, 1950; Festinger, 1957)。しかし、Deutsch & Solomon (1959) によれば、人は必ずしも望ましいと思うパーソナリティ特性を自己に認知し、自分を肯定的に評価するとは限らないことを指摘している。

Deutsch & Solomon (1959) の実験では、埋没図形発見テストの成績に関して肯定的な自己評価あるいは否定的な自己評価をした個人が、他者から肯定的もしくは否定的に評価される際の感情的反応を検討している。そして、他者から否定的な評価をされたときの感情的反応は個人の自己評価のあり方によって異なる。すなわち、肯定的な自己評価をしている個人は他者からの否定的評価に対し非好意的に反応するが、否定的な自己評価をしている個人はむしろ好意的に反応するという結果を得ている。

上述した結果は能力評価に関するものではあるが、直接にパーソナリティ認知を問題とした Harvey, Kelley, & Shapiro (1950)、Harvey (1962) の研究も類似した結果を示している。これらの研究では、自己評価が肯定的か否定的かは当初問題にはされず、自分について認知しているパーソナリティ内容よりも否定的な評価を他者からされたときの  $S \rightarrow S'$  の変化や相手に対する感情的反応が検討されている。そして、他者による評価 ( $O \rightarrow S'$ ) が否定的な内容であってもそれが  $S \rightarrow S'$  とあまり異なっていない場合、被験者は  $O \rightarrow S'$  についての認知 ( $S \rightarrow (O \rightarrow S')$ ) を肯定的な方向へ歪曲認知し、相手に対して好意的に反応したことが示されている。

鈴木 (1971, 1974) は  $S \rightarrow S'$  の受容度 (満足度) を検討している。そして、受容度が肯定的か否定的かに関係なく、好きな友人についての認知する自己一致性の方が嫌いな友人についての場合より大きいという結果を得ている。

以上は、本研究の主題である自己一致性に

がかわる結果であるが、想定類似性についても関連する結果が若干ある。たとえば Kajita (1968) の結果では、自己評価の低い個人の場合、好きな友人についても嫌いな友人についても想定類似性が認知されないことが示され、鈴木 (1974) の結果では、 $S \rightarrow S'$  の受容度が否定的な方向にある個人の場合には相手に対する好悪感情による想定類似性の差が認められないことを示している。

このように、従来の研究では、自己認知内容に関する評価（自己認知内容が肯定的か否定的か）と受容（自己に満足しているか満足していないか）の二つの側面が独立的にとり扱われ、必ずしも統一的な結果が得られていない。そこで本研究では、 $S \rightarrow S'$  の評価水準と受容水準を同時に考慮することによって、自己認知水準のちがう個人が他者について認知する自己一致性や想定類似性と好悪感情との関係を検討する。

## (2). 研究 4

## (a). 方法

被験者：研究の対象となつたのは広島女子大学の学生 150 名である。

パーソナリティ認知尺度：測定用具として、両極性のパーソナリティ測定尺度 25 対（7 段階評定）を使用した。これは、長島・藤原・原野・斎藤・堀（1967）の自己概念測定尺度（*self-differential scale*）大学生用から、向性・強靱性・誠実性・情緒安定性の各因子を代表する特性対をそれぞれ 5 対おつ選び、それに別の 5 対を加えて構成したものである。

認知の側面：パーソナリティの認知はつぎの三つの側面から求めた。①  $S \rightarrow S'$ 、② 最も好きな級友と嫌いな級友に対する  $S \rightarrow O'$ 、③ 最も好きな級友と嫌いな級友についての  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$ 。

なお、被験者の最も好きな級友と嫌いな級友は、測定にさきだつてあらかじめ指名させておいたものである。 $S \rightarrow S'$  に対する受容の程度は、 $S \rightarrow S'$  の測定と同時に、その評定内容に

関して「このことに満足している、このままでよい」から「満足していない、できれば変えたい」までの4段階で特性ごとに評定を求めることによって測定した。

測度：自己一致性の測度は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (0 \rightarrow S')$  の一致度、想定類似性の測度は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow 0'$  の一致度とした。いづれの測度も D スコア ( $D = \sqrt{\sum (x - Y)^2}$ ) で表現し、好きな級友についての場合と嫌いな級友についての場合に区別した。

#### (b). 結果

まづ、自己認知内容に関する質的水準を、評価水準と受容水準の二つの側面を同時に考慮して決定した。

評価水準については、25個のパーソナリティ特性対について求めた  $S \rightarrow S'$  評定 (7段階) に関し、ポジティブな方向からネガティブな方向へ7点から1点までの得点を与え、各個人の平均得点を算出し、その高低によって被験者を三つに分け、それぞれ評価水準高位群・中位群・低位群とした。各群の人数と平均得点

および標準偏差は、高位群で  $N=48$ ,  $M=4.67$ ,  $SD=0.22$ , 中位群で  $N=54$ ,  $M=4.15$ ,  $SD=0.14$ , 低位群で  $N=48$ ,  $M=3.49$ ,  $SD=0.30$  であり、各群間の差は有意であった (全体:  $F=295.45$ ,  $df$  は 2 と 147,  $p<.01$ ; 高位群と中位群の差:  $t=11.09$ ,  $df=147$ ,  $p<.001$ ; 中位群と低位群の差:  $t=14.07$ ,  $df=147$ ,  $p<.001$ )。

受容水準については、 $S \rightarrow S'$  の内容に「満足している」から「満足していない」の方向へ 4 点から 1 点までの得点を与えた。そして、受容得点の平均値を基準に受容水準高位群と低位群に分けた。各群の人数と平均得点および標準偏差は、高位群で  $N=75$ ,  $M=2.99$ ,  $SD=0.22$ , 低位群で  $N=75$ ,  $M=2.34$ ,  $SD=0.32$  であり、群間の差は有意であった ( $t=14.54$ ,  $df=148$ ,  $p<.001$ )。

評価の 3 水準と受容の 2 水準を組み合わせ、被験者を全体的な自己認知水準に関する 6 群に分類した。

そこで、自己認知水準のちがいによる自己一致性得点を好悪感情別に検討した。表 16 は

その結果である。

表 16. 好悪感情別にみた自己認知水準と自己一致性の関係

自己認知水準 評価水準 受容水準	人数	好悪感情		計
		好き	嫌い	
高位 高位	38	4.97 (1.61)	5.61 (1.92)	10.58
高位 低位	10	4.36 (1.60)	4.95 (1.92)	9.31
計	48	9.33	10.56	19.89
中位 高位	26	4.81 (1.44)	5.55 (1.67)	10.36
中位 低位	28	5.06 (1.20)	5.58 (1.32)	10.64
計	54	9.87	11.13	21.00
低位 高位	11	4.10 (0.81)	4.67 (1.30)	8.77
低位 低位	37	5.59 (2.17)	6.07 (2.29)	11.66
計	48	9.69	10.74	20.43
総計	150	28.89	32.43	61.32

(注) 表の数値は平均Dスコア, ( )内は標準偏差。

表 16 の値について分散分析した結果を示す表 17 では、好悪感情の主効果と評価水準 × 受容水準の交互作用に有意差が認められた。好悪感情の主効果については、本論文でこれまでに示された結果と合致するものであるが、それが自己評価の水準や受容の水準となんら



交互作用を示さなかつたことが興味深い。評価水準 × 受容水準の交互作用については、好悪感情の方向をコミにして、評価水準別に受容水準の高低による自己一致性の程度を検討した。その結果、評価水準の高位群と中位群には受容水準の高低による差はないが、低位群で、受容水準の高い個人の方が低い個人よりも自己一致性を高く認知していた（評価水準高位群： $t=1.39$ ,  $df=94$ ,  $ns$ ；中位群： $t=0.50$ ,

表 17. 自己一致性得点(表16)の分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
被験者間	836.55	149		
評価水準 (A)	2.90	2	1.45	< 1
受容水準 (B)	5.67	1	5.67	1.04
A × B	41.64	2	20.82	3.81 *
誤差	786.34	144	5.46	—
被験者内	143.60	150		
好悪感情 (C)	19.68	1	19.68	22.94 **
A × C	.12	2	.06	< 1
B × C	.20	1	.20	< 1
A × B × C	.08	2	.04	< 1
誤差	123.52	144	.86	—
全 体	980.15	299		

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

$df=106, ns$ ; 低位群 :  $t=2.89, df=94, P<.01$  )。

これらの結果から、自己認知の評価水準と受容水準は他者について自己一致性を認知する際に、それぞれ単独の要因としては作用しない。しかし、評価水準の低い場合には、受容水準の高低による影響の現れることがわかった。

表 18 と表 19 は、自己認知水準のちがいに

表 18 . 好悪感情別にみた自己認知水準と想定類似性の関係

自己認知水準		人数	好悪感情		計
評価水準	受容水準		好き	嫌い	
高位	高位	38	7.27 (1.87)	8.99 (2.18)	16.26
高位	低位	10	6.64 (1.76)	9.18 (2.47)	15.82
計		48	13.91	18.17	32.08
中位	高位	26	7.99 (2.04)	9.11 (2.21)	17.10
中位	低位	28	7.94 (2.21)	9.01 (2.24)	16.95
計		54	15.93	18.12	34.02
低位	高位	11	8.13 (2.64)	10.45 (2.75)	18.58
低位	低位	37	10.19 (3.02)	10.69 (3.51)	20.88
計		48	18.32	21.14	39.46
総計		150	48.16	57.43	105.59

(注) 表の数値は平均Dスコア , ( )内は標準偏差。

表19. 想定類似性得点(表18)の分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
被験者間	1448.39	149		
評価水準 (A)	137.57	2	68.79	7.72 **
受容水準 (B)	4.59	1	4.59	< 1
A × B	21.35	2	10.67	1.20
誤 差	1284.88	144	8.91	—
被験者内	754.56	150		
好悪感情 (C)	134.93	1	134.93	32.92 **
A × C	10.61	2	5.30	1.29
B × C	1.73	1	1.73	< 1
A × B × C	17.05	2	8.53	2.08
誤 差	590.24	144	4.10	—
全 体	2202.95	299		

\*\* P < .01

る想定類似性に関する分析結果である。表19から、評価水準の主効果と好悪感情の主効果が有意であり、その他の効果はいずれも有意でないことが示された。好悪感情によるちがいは、従来の研究結果と合致するものである (Fiedler, Warrington, & Blaisdell, 1952; Fiedler, 1954)。

評価水準における真の差は、高位群と中位群の間には認められず、その両群と低位群と

の間に認められた (高位群と中位群 :  $t=1.37$ ,  $df=202$ ,  $ns$  ; 高位群と低位群 :  $t=5.15$ ,  $df=190$ ,  $p<.001$  ; 中位群と低位群 :  $t=4.26$ ,  $df=202$ ,  $p<.001$  )。この結果から、自分に認知するパーソナリティの評価水準が高いほど、個人は、受容水準の高低にかかわらず、他者との間に類似性を想定しやすいことがわかった。

### (C). 考察

認知者の自己認知水準のちがいによるパーソナリティ認知過程への影響を検討した本研究から、つぎの三つの知見が得られた。

第1は、パーソナリティ認知過程における自己一致性や想定類似性の程度が相手に対する好悪感情によって異なるという、従来の結果と合致した結果を重ねて検証したことである。

第2は、自己一致性や想定類似性の程度が、認知者の側で自分のパーソナリティに対してもつ評価水準や受容水準によって異なるという結果を得たことである。

第3は、自己一致性や想定類似性を認知す

る過程で、評価水準と受容水準による効果と相手に対する好悪感情による影響が交互作用効果を示さなかったことである。

第2と第3の結果については、自己一致性と想定類似性とで内容が若干異なるので、そのことについて考察する。

まず自己一致性について検討する。これを認知する過程において受容水準と好悪感情が交互作用を示さなかったという結果は、

Deutsh & Solomon (1959)、Harvey, Kelley, & Shapiro (1957)、Harvey (1962)、鈴木(1971, 1974)らの結果と一致する。しかし、自分のパーソナリティについての評価が低い場合でも、それを受容している個人の方が受容していない個人より、他者について一致性を認知する程度が大きいという結果は新しい知見である。ただし、こうした受容水準によるちがいは、評価水準の他の条件には反んでいない。むしろ、統計的に有意ではないが、評価水準高条件で、受容度の高い個人より低い個人の方が自己一致

性も高く認知していた。このことをあわせて考えると、上に示された結果には、個人の認知内で、評価水準と受容水準がどちらも高いかどちらも低いというように首尾一貫している場合より、一方が高く他方が低いというように非一貫的である場合の方が自己一致性を認知しやすいという傾向が示されているのかもしれない。

本研究の想定類似性に関する結果では、他者に対する想定類似性が個人の評価水準と強く関係していることが示された。これは、Kajita (1968) の結果と部分的に一致するが、鈴木 (1974) の結果とは一致しない。

このような結果の一致・不一致については本研究の資料だけでは説明できない。しかし、一つの可能性として、本研究でとり上げた変数以外の要因による影響が問題になろう。従来の研究においても、Dittes (1959)、Walster (1965)、Jacobs, Berscheid, & Walster (1971)、Hewitt & Goldman (1974) らは、他者による評価から

の影響のうけ方は個人により一義的でなく、自己に対する自己評価もしくは自尊感情 (self-esteem) の高低によって異なることを指摘している。これらの研究結果は、必ずしもパーソナリティの評価だけについて言われたものではなく、また、自己評価と自尊感情を同義に解する考え方にも問題はあつた。しかし、それらは、本研究で問題としたようなパーソナリティ認知の過程においても自尊感情の要因が関与してくる可能性を示唆するものである。

#### 4. 集団内地位と自己一致性

##### (1). 問題の設定

Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) は、想定類似性の概念を、治療的人間関係という限られた場だけでなく、より一般的な対人関係の場に広げて適用できることを示した。この研究の中で、彼らは、個人の集団内地位と集団内の他成員に想定類似性を認知する程度と

の關係について検討している。

ソシオメトリック・テストをとおして測定される集団内の社会測定的地位 (sociometric status) は、集団における個人の人気度を示すものである。操作的には、たとえば、ある集団内で特定の個人に向けられた選択数と排斥数の差で表現される。それは、その個人に対する集団成員の好意的もしくは非好意的態度の表明である。個人の側からいえば、集団内の他の成員たちとの相互作用の過程で、そうした成員たちの側に喚起された当該個人の感情的反応の集合とみなされるものである。したがって、社会測定的地位の高い個人は、集団内における対人關係が好ましい状態にあり、地位の低い個人は、逆に好ましくない状態にあるとみなすことができよう。その意味で、社会測定的地位は、それ自体、その個人の集団における対人的適応状態を示す一つの指標であると考えられる。

とこりて、そうした集団内地位と想定類似



性の程度との関係について検討した Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) は、集団内で人気の高い個人 ( $N=11$ ) と人気の低い個人 ( $N=11$ ) の間で、それぞれ個人の好きな友人や嫌いな友人について認知する想定類似性の程度に差がないという結果を得ている。もともと、この分析は「人気の高い個人と人気の低い個人とは他者についての認知が異なるであろう」という研究仮説のもとで行ったものである。研究仮説が検証されなかったことについて Fiedler らは、①研究の対象とした被験者集団が大学の学生宿舎で共同生活をしている学生であるという点で、非常に限定された集団であったこと、②被験者数が少なく、統計的検定のための被験者群間のマッチングができなかったこと、③使用した測定用具が、他者のパーソナリティ認知を検討するのに適切でなかったかもしれないこと、などの点をあげている。

これらの要因については、もちろん再吟味

して検討されるべきであらう。しかし、仮説が検証されなかった原因は、そうした要因よりも、むしろ、仮説された内容が不明確であったことと、仮説検証のために用いられた分析方法が必ずしも適切でなかったことに求めることができると思われる。

いま、想定類似性を、他者に対する潜在的好意度あるいは心理的近さの指標として位置づけるなら、集団内地位の高い個人ほど他者との間に認知する想定類似性の程度が一般に高いと仮説できよう。その際、かりに他者に対する好悪感情の別によつて当該相手に認知する想定類似性の程度に相違があるとしても、好きな相手に想定する類似性の程度と嫌いな相手に想定する類似性の程度との間のちがいは、集団内地位の高い個人ほど少ないと予想される。

以上の吟味と問題点は想定類似性に関するものであつて、本研究の中心的主題である自己一致性に関するものではない。集団内地位

と自己一致性を認知する過程との関係については、これまでの研究ではまったく検討されていない。しかしながら、本章でとり上げた研究においては、個人が他者との間にパーソナリティの自己一致性を認知する過程に对人的適応機能の存在が想定され、それが確認されてきた。その意味では、集団内地位と想定類似性に関するさきの吟味の中で仮説された内容は、そのまま、あるいは、より積極的に自己一致性についても想定できると思われる。

そこで本研究では、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) の追試的検討を含めて、集団内地位と自己一致性との関係について検討し、その認知過程に含まれる对人的適応機能について吟味する。

## (2). 研究 5

### (A). 方法

被験者：研究の対象となったのは、宮崎市立宮崎西中学校の3年生2学級、男女82名で

ある。

測定内容：① ソシオメトリック・テスト…グループ学習での班構成を規準にして、学級の同性集団の中から、好きな友人と嫌いな友人を3名ずつ選択させ、順位づけさせた。② パーソナリティ認知の測定…測定用具として、両極性のパーソナリティ測定尺度20対（7段階評定）を使用した。これは、青木（1971a, 1971b, 1972）と長島・藤原・原野・斎藤・堀（1967）の結果を参考にし構成したものである。この測定尺度に関して、 $S \rightarrow S'$ 、最も好きな友人と嫌いな友人についての  $S \rightarrow O'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を求めた。

測度：集団内地位（社会測定的地位）は、ソシオメトリック・テストの結果から、個人ごとに、与えられた順位は考慮せず、被選択数－被排斥数で求めた。また、自己一致性の測度は  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致度、想定類似性の測度は  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow O'$  の一致度とした。いずれもDスコア（ $D = \sqrt{\sum (x - y)^2}$ ）で表現し、好き

な友人についての場合と嫌いな友人についての場合を区別した。

なお、資料の収集は、学級が編成された2か月後に行った。

### (b). 結果

まず、集団内地位の水準を社会測定的地位得点に基づいて決定した。2学級男女別4集団のそれぞれにおいて、地位得点が上位25%・中位25%・下位25%に含まれる個人を抽出し、それぞれ集団内地位高位群・中位群・低位群とした。各群に含まれた人数はいずれも17名で、男女はほぼ同数であった。

表20. 社会測定的地位と好悪感情による自己一致性得点(Dスコア)

社会測定的地位	好悪感情				計
	好き		嫌い		
	M	SD	M	SD	
高位群 (N=17)	4.19	1.26	4.88	1.34	9.07
中位群 (N=17)	4.38	2.12	4.84	2.03	9.22
低位群 (N=17)	4.58	1.39	6.11	2.09	10.69
計	13.15		15.83		28.98

そこで、好きな友人と嫌いな友人に関するパーソナリティの自己一致性認知の程度を集団内地位別に検討した。表20はその結果である。表20の値について分散分析した表21にみられるように、自己一致性に関して、好悪感情の主効果と、地位×好悪感情の交互作用に有意差および有意な傾向が認められた。

表21. 自己一致性得点(表20)の分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
被験者間	275.35	50		
社会階級的地位 (A)	13.62	2	6.81	1.25
誤 差	261.73	48	5.45	
被験者内	75.42	51		
好悪感情 (B)	20.30	1	20.30	10.55**
A × B	5.30	2	2.65	2.55 <sup>A</sup>
誤 差	49.83	48	1.04	
全 体	350.77	101		

\*\*p<.01   <sup>A</sup>p<.10

交互作用に有意な傾向が認められたので、表20について下位検定を試みた。集団内地位別に好悪感情差を検討した結果、とくに低位群で、好きな友人と嫌いな友人との間に認知

する自己一致性の程度に有意差が認められた  
(高位群 :  $t=1.97$ ,  $p<.10$  ; 中位群 :  $t=1.31$ ,  
 $ns$  ; 低位群 :  $t=4.37$ ,  $p<.01$ 、 $df$ はいずれも48  
)。また、好悪感情別に集団内地位による差  
を検討した結果、好きな友人について認知す  
る自己一致性の程度には集団内地位のちがい  
による有意な相違は認められなかったが、嫌  
いな友人については、集団内地位高位群・中  
位群と低位群の間に有意差が認められた(高  
位群と中位群 :  $t=0.01$ ,  $ns$  ; 高位群と低位群  
 :  $t=1.99$ ,  $p<.05$  ; 中位群と低位群 :  $t=2.06$ ,  
 $p<.05$ 、 $df$ はいずれも96)。その結果、集団  
内地位高位群と中位群では、低位群よりも、  
好きな友人について認知する自己一致性の程  
度と嫌いな友人について認知する自己一致性  
の程度とのちがいが小さいものとなっていた。  
これは自己一致性のむつ対人的適応機能を  
示すものであり、集団内地位と自己一致性認  
知に関する仮説はおおむね検証されたといえ  
よう。

つぎに、集田内地位と想定類似性認知との関係について分析を行った。表22と表23はその結果を示したものである。

表22. 社会測定的地位と好悪感情による想定類似性得点(Dスコア)

社会測定的地位	好悪感情				計
	好き		嫌い		
	M	SD	M	SD	
高位群(N=17)	6.75	2.03	8.72	3.51	15.47
中位群(N=17)	6.70	2.62	7.27	2.45	13.97
低位群(N=17)	8.85	3.35	10.29	3.14	19.14
計	22.30		26.28		48.58

表23. 想定類似性得点(表22)の分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
被験者間	779.15	50		
社会測定的地位(A)	120.45	2	60.23	4.39*
誤差	658.70	48	13.72	
被験者内	251.94	51		
好悪感情(B)	44.83	1	44.83	10.84**
A × B	8.58	2	4.29	1.04
誤差	198.53	48	4.14	
全 体	1031.09	101		

\*\*p<.01 \*p<.05



表 22 の値について分散分析した表 23 にみられるように、想定類似性に関して集団内地位および好悪感情の主効果が有意であった。好悪感情の別をこみにして集団内地位に関する下位検定を試みた結果、地位間の真の差は高位群・中位群と低位群の間に認められた（高位群と中位群： $t=0.85$ ,  $ns$ ；高位群と低位群： $t=2.04$ ,  $p<.05$ ；中位群と低位群： $t=2.88$ ,  $p<.01$ 、 $df$ はいずれも 48）。これより、集団内地位と想定類似性認知に関する仮説は支持されたことがわかる。

なお、自己一致性と想定類似性の双方ともにおいて、全体的に好悪感情の別による相違が認められたことは、本章で検討したこれまでの研究結果を重ねて確認するものである。

### (C). 考察

本研究の検討課題は、パーソナリティの自己一致性と想定類似性に関して、認知者の集団内地位（社会測定的地位）の観点から検討し、これらの認知過程に含まれる対人的適応機

結果は、明らかになり、仮説された内容をほぼ支持するものであった。しかし、自己一致性を認知する過程で集団内地位×好悪感情の相互作用効果も認められたので、このことについて若干考察しておこう。

自己一致性を認知する過程で認められた集団内地位×好悪感情の相互作用効果は、嫌いな友人に対する認知に原因するものであつた。これは、第1に、集団内地位高位群と中位群では、好きな友人について認知する場合同様に、高位群よりも自己一致性の程度を高く認知するといふ傾向を示した。これに対し、地位低位群では、両者の間に有意な差が示されたこと、第2に、好きな友人内地位のちがいによる差が認められなかつた。

に対し、嫌いな友人については、集団内地位  
 高位群・中位群よりも下位群の方が  $S \rightarrow S'$  と  
 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の間のずれを有意に大きいものと  
 認知していたこと、の二つから明らかである。  
 集団内地位高位群と中位群の結果については  
 は、本章の研究 1・2・4 に示された結果、  
 すなわち、たとえ感情的に嫌いな相手に対す  
 る場合でもかなりの程度の自己一致性が認知  
 されるという傾向が、より一層特徴的に示さ  
 されたものとみるこゝろができる。もちろん、依  
 位群の場合でもその傾向は認められる。しか  
 し、集団での一つの適応の指標と考えられる  
 集団内地位に關して、その地位の依い個人の  
 側面、とくに嫌いな他者について認知する自  
 己一致性の程度が依いとこの結果がみられた  
 ことは、自己一致性を認知する過程に含まれ  
 る対人的適応機能を示すものである。  
 想定類似性については、集団内地位高位群  
 と中位群の間に差はみられず、その両群と依  
 位群との間に有意差が認められた。本研究は

. Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) の仮説をより明確化する方向に修正し、たんに、感情的に好きな相手と嫌いな相手について認知する想定類似性の程度の差を問題にするだけでなく、両者について認知する類似性の程度をあわせて検討の対象とした。それによって、Fiedlerらが検証し得なかつた集団内地位と想定類似性認知との関連性もある程度明らかにすることができたのは、若干の前進であつたと思われる。

なお、本研究における集団内地位は、ソシオメトリック・テストで測定された被選択数と被排斥数の差によって相対的に決定された。結果的に、対象とした2学級男女別の四つの集団をとおして、高地位群ではその差が4以上、中位群は0~1、低位群は-2以下であり、集団間に相違は認められなかつた。しかしながら、もし選択・排斥関係の等質でない集団が検討の対象になる場合を想定するならば、本研究で用いた地位の測度はそのままの

たちでは必ずしも適切な測度にならない可能性がある。そうした吟味と同時に、異なった側面からの集団内地位の指標、たとえば、個人によって認知された集団内地位の導入なども、さらに検討する価値があると思われる。

## 5. まとめ

第2章での課題は、個人が自己と他者のパーソナリティに関して自己一致性を認知する過程に含まれる対人的適応機能について、とくに他者に対する好悪感情との関連から解明することであった。その際、すでにいくらかの検討がされてきている想定類似性についても可能なかぎりあわせに吟味することにより、自己一致性の究明を深めることとした。そこで、この章で検討したいくつかの研究の結果と考察された問題点をまとめながら、全体的に総括しておく。

## (1). 自己一致性と想定類似性の比較

パーソナリティの自己一致性および想定類似性と好悪感情との関係についての比較検討は、本章の研究 1, 2, 4, 5 で行った。これらの研究結果に共通して認められたことの一つに、自己一致性も想定類似性も、好きな相手に対する場合の方が嫌いな相手に対する場合よりも、その認知の程度が大きいのという結果があった。

想定類似性に関するこの結果は、Fiedler, Warrington, & Blaisdell (1952) の研究以来、一貫して指摘されてきたことと合致する内容である。しかも、本研究の中心的概念である自己一致性においてもこれと同様の関係が認められたことは、自己と他者のパーソナリティ認知過程に含まれる心理的意味、すなわち、対人的適応機能を知るうえから、意義深いことであると思われる。

ところで、本章で検討した研究に共通して認められた第 2 の結果は、上述した共通点と

は異なり、むしろ、自己一致性と想定類似性の相違を強調するものであった。すなわち、相手に対する好悪感情の別によつてパーソナリティ認知のあり方が異なるという結果を示しながら、同時に、自己一致性の認知では、感情的に嫌いな相手に対する場合でもかなりの程度の一致性を認知する傾向が示された。このことは、自己一致性を認知する過程自体が、個人が場においてかかわりをもつすべての他者との間で、その一致性を高めるような仕方で行われていゝることを示唆するものである。これは、想定類似性の認知が、好きな他者に対する場合と嫌いな他者に対する場合とで大きく異なり、とくに、嫌いな他者に対してその類似度が低く認知された結果と対照的であった。

このような自己一致性と想定類似性の相違に關係のある結果として、上述した結果の他に、研究1での關係分析に示された結果(表6)、および研究2での繼時的変容に關する

分析結果（表7, 8, 9, 10）がある。これらの結果は、上に指摘した自己一致性にみられる独自の特徴をさらに保証するものである。

## (2). 自己一致性を認知する過程の対人的適応機能

上述した自己一致性と想定類似性との比較から、自己一致性を認知する過程に含まれる対人的適応機能がかなり明確に指摘される。

第1は、他者に対する“好悪感情の規定機能”である。すなわち、特定の他者との間に認知される自己一致性の程度が大きくなれば、その相手に対して好意感情を抱き、自己一致性の程度が小さくなれば、逆に嫌悪感情を抱くようになるという、好悪感情の方向と程度を規定する機能である。

第2は、“調和関係の形成機能”ともいうべき働きである。これは、上に述べたような好悪感情の規定因としこの機能を示しながら、同時に、自分がかわりをもつべからずの他



者についてある程度の一致性を認知し、しかも他者との交渉が進展するにつれて、そうした他者との間に自己一致性の程度を一層高く認知するようになるというかたちで示される機能である。自己一致性にみられるこの機能は、想定類似性が好悪感情の別によって他者間も大きく弁別するということかたちで示されたことと対照的である。このことは、自己一致性を認知する過程が、他者に対する好悪感情との関係性にけでなく、もつと別の機能、たとえば他者との信頼関係の形成などともかかわっていることを暗示するものかもしれない。

上述した自己一致性の二つの対人的適応機能のうち、前者の“好悪感情の規定機能”は研究3で明確に検証された。後者の“調和関係の形成機能”については、研究2と5でそうした機能の存在が示されたものの、前者の場合ほど明確ではなかった。そこで、後者の機能については、つぎの第3章でもひき続き

検討することにしたい。

本章では、パーソナリティの自己一致性を認知する過程の究明に中心的な関心が置かれた。そのため、想定類似性を認知する過程は、自己一致性に関する考え方を明確にするための手段として、あるいは自己一致性に関して得られた結果と比較検討するための補助的な資料としてとり扱った。研究結果に示されたように、これら二つの過程には、たしかに異なる特徴も認められるが、対人的適応機能を担う過程として共通する部分も大きいことが示唆された。さらに重ねて検討される価値のある問題領域であろう。

### 第3章 自己一致性の生起機制

すでに第2章において、人には、特定の他者に関してパーソナリティの自己一致性の程度を高めるように認知する傾向のあることが明らかにされた。こうした自己一致性が生起する際の過程については、方向の異なる二つの一致過程が予想される。一つは、認知者の側で、自分に認知するパーソナリティ ( $S \rightarrow S'$ ) を基準にして、それに合致するように他者からみられていると思う自己のパーソナリティ ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) を認知する過程である。他の一つは、逆に、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を基準にして、それに  $S \rightarrow S'$  を近づけて認知することによって一致に至る過程である。前者は、対人的かかわりの中で自己の側の要因が強調された一致過程であり、後者は、他者の側の要因が強調された一致過程である。

人が他者との間でパーソナリティの自己一致

性を認知する場合、一般にどのような機制によつた過程をとるのであろうか。そうした自己一致性の生起機制の中に、その人の基本的な対人関係のあり方が反映されると思われる。本章では、パーソナリティ認知における自己一致性の生起機制について検討する。

## 1. 自然な事態における自己一致性の生起過程

### (1) 問題の設定

認知的一貫性理論の立場から考えると、パーソナリティ認知過程にみられる自己一致性は相手に対する好悪感情の別によつてその程度が異なる。それと同時に、さらに、個人がかかわりをもつすべての他者に関して、ある程度の一致性を認知する過程としても存在すると思われる。しかも、そうした人々との種々の対人的交渉の進展に伴つて、一層安定した対人的環境を認知するようになつていく。

度が高まると期待できる。Backman & Secord (1962) の結果や本論文の第2章で示した研究2の結果は、こうした考え方が妥当であることを裏づけるものである。

ところで、認知者が他者との間でパーソナリティの自己一致性を高めていく過程には、理論的にも、また従来の研究結果からも、方向の異なる二つの生起過程が考えられる。一つは、認知者が、 $S \rightarrow S'$  を基準にして、それに合致するように  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を認知する過程であり、他者とのかわりの中で認知者の自己の要因が強調された過程である。他の一つは、逆に他者の側の要因が強調された過程であり、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を基準にして、それに合致するように  $S \rightarrow S'$  を認知することによって一致に至る過程である。Backman & Secord (1962) の“認知歪曲過程 (congruency by misperception)”は、前者の方向による一致過程の存在を示唆するものである。また、Gerard (1961) の、自己評価に関する“規範的影響過程 (normative

influence process ) ” の指摘は、後者の一致過程の存在を示唆するものである。これらの研究も含めて、従来の研究結果には、それをれさきに予想した二つの一致過程のいずれか一方の存在が示されている ( Manis, 1955 ; Kipnis, 1961 ; Gerard, 1961 ; Backman & Secord, 1962 ; Backman, Secord, & Peirce, 1963 ) 。

しかしながら、これらの研究にはいくつかの問題がある。まず、方法論的に、これらの研究が、自己の要因 ( $S \rightarrow S'$ ) を強調するか、あるいは他者に関する認知の要因 ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) を強調するか、のどちらか一方の側からだけの検討であったことである。そうした方法では、 $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の一致過程における原因-結果関係について、全体的な結論を得ることは期待できない。

つぎに、時間の関数としての継時的検討がされていない点を指摘できる。パーソナリティの自己一致性が対人的交渉の進展に伴ってその一致の程度を高めるような過程であるのな

り、つぎのように期待できる。すなわち、ある時点で  $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  が不一致の状態であっても、その相手との交流の進展に応じ  $S \rightarrow S'$  が  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  のどちらかもしくは双方の内容を変容させることによつて、一致の状態へ向かうであろうということである。

そこで本研究では、まず学級集団の自然な過程の中で、ある時点でパーソナリティの自己一致性が不成立であるような関係に注目し、それが時間的経過に従つてどのような変動過程をたどるか进行分析する。それにより、自己一致性の生起機制について究明する。

## (2). 研究 6

### (a). 方法

被験者：研究の対象となつたのは、広島県立広島高等学校の1年生49名である。男女別の内訳は、男子が21名、女子が28名であつた。

パーソナリティ認知の測定：研究2で用いたと同じ16個のパーソナリティ特性を与え、それ

より5個選択する方法で、 $S \rightarrow s'$ と $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ を求めた。その際、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ は自分以外の他の同性成員のひとりひとりについて測定した。時間的経過に伴う自然の変動過程を分析するために、同様の測定を1か月後に再び実施した。

資料の収集は、学級が編成された7か月後(第1回測定)と8か月後(第2回測定)に行った。

#### (b). 結果

まず、認知者の $S \rightarrow s'$ と相手について認知する $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ の変動過程について分析を行った。

そのため、第1回の測定結果に基づいて、同性集団内におけるすべての他者との間で、自己一致性が成立していない組合せ、すなわち、選択された5個のパーソナリティ特性が $S \rightarrow s'$ に含まれてゐるが $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ には含まれていない組合せ、および、 $S \rightarrow s'$ に含まれていないが $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ には含まれてゐる組合せ、合計6066対(男子2752対; 女子3314対)を抽出し



に。そして、個々の不一致対について、なん  
 り実験的な操作が加えられない自然の状態  
 1 か月後にたどる変動過程の分析を行った。  
 分析方法は、 $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  の不一致であ  
 ったものが、1 か月後に以前と同じ不一致の  
 ままにとどまり変動しなかったか、あるいは  
 、いおれの方にせよ一致的な方向へ変動し  
 たかの二分法によった。そして、二つの認知  
 過程間における「一致的方向への変動」と「  
 10 不変」の度数を不一致の組合せパターンごと  
 に算出した。両者の間の差の有意性は臨界比

表 24. 自己一致性の不一致パターン別による変動過程分析

被験者	不一致パターン ( $S \rightarrow S'$ ; $S \rightarrow (O \rightarrow S')$ )	度数	変動過程		CR
			一致	不一致	
男子 (N=21)	( + - )	1376	751	625	3.40**
	( - + )	1376	857	519	9.12**
女子 (N=28)	( + - )	1657	920	737	4.55**
	( - + )	1657	986	671	7.80**
全体 (N=49)	( + - )	3033	1671	1362	5.62**
	( - + )	3033	1843	1190	11.87**

\*\*p<.001(両側)

(注). (+)は、5個選択するパーソナリティ特性の内に含まれることを示し、(-)は含まれないことを示す。

20  
×  
20

( critical ratio : CR ) を算出することによって検討した。表 24 はその結果を示している。

表 24 より明らかのように、いずれの不一致の組合せパターンにおいても 0.1% 以下の危険率で一致的方向へ変動していった。すなわち、 $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の不一致の状態は、対人関係の発展に伴い、つねに一致の状態へと移行していく傾向にあることが確かめられた。

そこで、つぎに、一致過程そのものの機制について検討を行った。ここで、一致機制に關して、認知者が  $S \rightarrow S'$  の要因を強調し、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の認知をする際に、 $S \rightarrow S'$  をそれに投射するようなかたちで一一致の状態に至る過程を“*projective congruency process*”、逆に、認知者が  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の要因を強調し、 $S \rightarrow S'$  をそれに投入するようなかたちで一一致の状態に至る過程を“*introjective congruency process*”と分類する。

すると、不一致の組合せパターンによって、*projective congruency process* と *introjective congruency process* の生起パ

ターンは異なつたものになる。すなわち、ある特性が  $S \rightarrow s'$  や  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  に含まれる場合を「+」、含まれない場合を「-」と表示すると、不一致の組合せパターンは、 $[S \rightarrow s' \cdot S \leftarrow (O \rightarrow s')]$  が  $[+ \cdot -]$  のパターンと  $[- \cdot +]$  のパターンとに區別できる。 $[+ \cdot -]$  の組合せパターンが  $[+ \cdot +]$  となれば、認知者が自分に認知している特性を相手も認知していると思う一致の方向をたどつたことになり、投射的一致過程、 $[- \cdot -]$  となる場合は、相手から認知されていないと思うので自分も認知しなくなる方向をたどつたことになり、投入的一致過程と考えられる。同様に、 $[- \cdot +]$  の組合せパターンが  $[- \cdot -]$  となれば投射的一致過程、 $[+ \cdot +]$  となる場合が投入的一致過程をたどつたことになる。

表 25 は、 $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  の不一致の状態が、1 か月後に一致の状態へと変動した 3514 対についての分析結果である。分析は、不一致の組合せパターンごとに、どちらの一致過程をたどつたかについて、実測度数と確率的な

期待度数との差から検討したものである。

表 25. 自己一致性の生起過程における一致過程分析

被験者	不一致パターン ( $S \rightarrow S'$ ; $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ )	度数	一致過程				$\chi^2$
			投射的一致		投入的一致		
			$F_o$	$F_e$	$F_o$	$F_e$	
男子 (N=21)	(+.-)	751	335	234.7	416	516.3	62.35**
	(-.-)	857	580	589.2	277	267.8	0.49
女子 (N=28)	(+.-)	920	408	287.5	512	632.5	62.79**
	(-.-)	986	658	677.9	328	308.1	1.87
全体 (N=49)	(+.-)	1671	743	522.2	928	1148.8	135.80**
	(-.-)	1843	1238	1267.1	605	575.9	2.14

\*\* $p < .001$

(注). (+.-)が偶然に(+.-)または(-.-)の一致過程をとれば、前者は  $5/16$ 、後者は  $1/16$  の割合で生じると期待され、同様に、(-.-)が(-.-)または(+.-)の一致過程をとる場合、前者は  $1/16$ 、後者は  $5/16$  の割合で生じると期待できる。

表 25 より明らかかなように、( $S \rightarrow S'$ ;  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) が (+.-) のパターンで不一致である場合の一致過程は、一貫して  $S \rightarrow S'$  が  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を規定する投射的一致の方向をたどる。しかし、不一致パターンが (-.-) である場合の一致過程には、投射的一致の方向をたどる過程と投入的一致の方向をたどる過程がほぼ同程度に存在することがわかる。

パーソナリティの自己一致性が不成立である状態、すなわち、 $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  の不一致状態が一致の状態に変動する場合に、投射的一致の方向をたどる過程と投入的一致の方向をたどる過程が併存することは、当初予想したことと全般的に合致する結果であった。しかしながら、不一致状態の二つのパターン、 $[+ \cdot -]$  および  $[- \cdot +]$  でその一致過程に相違があったことについては、この二つの不一致パターンに対する認知者の側の認知内容が質的に異なるものであつた可能性も考えられる。

### (C). 考察

$S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  の不一致状態について、一定期間後にたどる変動過程を分析した本研究の結果から、つぎのことが明らかになった。まず、二つの認知内容が一致する方向、すなわち、パーソナリティの自己一致性を成立させる方向へ有意に変動するということである。つぎに、その一致過程には、当初予想したよ

うに投射的一致過程と投入的一致過程という方向性の異なる二つの過程が認められるということがある。しかし、これらの結果が、方法的に条件統制の困難な自然の変動過程分析から得られたものであることなど、なお検討すべきいくつかの問題が考えられる。

まず第1に、 $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の不一致パターンの相違に対する個人の認知内容に関する問題がある。表25で、不一致パターンが〔+-〕の場合と〔-+〕の場合とでは、その一致過程に明らかに相違が認められた。パーソナリティの自己一致性は、対人的相互作用の行われる場において、他者との関連における自己の要因をとくに強調する過程である。強調される要因は、ときには直接的な  $S \rightarrow S'$  の要因であり、また間接的な  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の要因である。認知者の側に、 $S \rightarrow S'$  を重視する個人と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を重視する個人が存在するとすれば、そうした重視要因の異なる個人が、〔+-〕または〔-+〕の不一致パターンに対するとき、形式

的にはどちらも不一致な状態であっても、明らかにその認知内容において異なり、それが一致過程における相違をもたらした可能性も考えられる。

しかしながら、本研究結果の分析において、 $S \rightarrow S'$  を例にとれば、 $[+]$  は自己を表現するのに最も適切だと認知する特性を示し、 $[-]$  はそれ以外のすべての特性を示した。厳密に言えば、 $[-]$  は自己にひつたりしない特性（本来の意味での $[-]$ と表現すべき特性）と、 $[+]$  でも $[-]$  でもないと認知する特性（本来の意味での $[0]$ と表現すべき特性）とに區別されるべきである。こうしてはじめて、正しい意味で $[+ \cdot -]$  および $[- \cdot +]$  の不一致パターンが $[+ \cdot +]$  あるいは $[- \cdot -]$  の一致状態へと至る過程の分析が可能になったと思われる。このことについては、本研究の資料では検討できない。残された課題である。

第2に、認知者と被認知者の社会的・感情的関係と一致過程に関する問題がある。本研

究での変動過程と一致過程の分析は、同性のすべての他者に関して行った。しかし、本論文の第2章で明らかにしたように、自己一致性が他者に対する好悪感情と深く関連する現象であることを考えれば、 $S \rightarrow S'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の不一致状態が一致の方向に変動する過程にも、認知者と被認知者の社会的・感情的関係いかによる一致過程の相違が当然予想されよう。Deutsch & Solomon (1959) は、自己のパーソナリティに関し否定的な認知像をもつ個人でも、他者によって肯定的な見方をされていると認知すると、その他者に対し好意感情を抱くようになるという“肯定効果 (positivity effect)” の存在を指摘している。このことを考慮するならば、不一致パターンの変動過程を究明する際においても、認知者と被認知者の社会的・感情的関係を条件に含めた分析を進めることが必要になると思われる。



## 2. 自己一致性の生起機制に関する実験的検討

### (1). 問題の設定

5 本章の研究6の結果で、パーソナリティに関する自己一致性の生起過程には、認知者が自己の側の要因 ( $S \rightarrow s'$ ) を強調する“投射的一致過程 (projective congruency process)”と、逆に他者の側の要因 ( $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ ) を強調する“投入的一致過程 (introjective congruency process)”  
10 という二つの過程が存在することを示した。これらの過程について、研究6のように、自然な事態で検討することは、研究のための操作がいつさえい加えられていないありのままの  
15 状況での資料収集という点で有意義な方法である。しかし、得られた結果の中に、未統制の変数や予期しなかった要因による影響が含まれる可能性のあることは否定できない。そうした可能性を避けるには、できるだけ条件  
20 を統制した実験的事態で資料を収集する必要

がある。

自己一致性の生起機制に関連した従来の実験では、パーソナリティや欲求もしくは能力評定に関する他者による評価 ( $O \rightarrow s'$ ) が与えられ、それによって認知者の自己評価 ( $S \rightarrow s'$ ) あるいは他者に対する感情的反応の受ける影響が分析されてきている (Manis, 1955; Kipnis, 1961; Gerard, 1961)。

こうした従来の実験には、方法的に、つぎの二つのことが問題になるとと思われる。一つは、実験条件あるいは実験操作の確認がなされていないことである。すなわち、認知者に対して他者による評価が与えられた際に、認知者の側で、実験者が意図したように、与えられた情報とおりにそれを受け入れたかどうかを検討されていない。操作された変数は  $O \rightarrow s'$  であって、必ずしも  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  ではなかったことが方法上の不十分さとして指摘できる。

つぎに、 $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  が一致する際の原因-結果関係を説明しようとする場合、従来の

の実験方法では、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  の変化（原因）に伴う  $S \rightarrow s'$  の変化（結果）という投入的一致の方向からの検討しかできないという問題がある。わづかに Backman, Secord, & Peirce (1963) の研究において、 $S \rightarrow s'$  の変化に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  の変化の分析が試みられている。こうして投射的一致の方向からの分析が同時に検討されて、はじめの二つの認知過程間の原因-結果関係が明らかになると考えられる。

そこで本研究では、パーソナリティ認知過程における自己一致性の生起機制を解明するために、まず、 $S \rightarrow s'$  を独立変数、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  を従属変数とした実験を計画し、投射的機制に基づく一致過程を検討する。つぎに、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  を独立変数、 $S \rightarrow s'$  を従属変数とした実験によって、投入的機制に基づく一致過程を検討する。そして、両者の結果を総合的に吟味することによって、自己一致性の生起機制の解明を行う。その際、特性の社会的望ましさの要因および認知者と被認知者の好悪感情関係を

統制して実験を行うことにする。

## (2). 研究 7-a

### (a). 方法

被験者：この実験の被験者となったのは、  
 広島県立広島高等学校の1年生49名である。男  
 女別の内訳は、男子が22名、女子が27名であ  
 った。

実験前測定：①パーソナリティ認知の測定…  
 16個のパーソナリティ特性リストを与え、 $S \rightarrow S'$   
 、 $S \rightarrow O'$ 、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ の各認知側面に関し、該  
 当すると思う順に1位から16位まで順位づけ  
 させた。その際、 $S \rightarrow O'$ と $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ は、同性集  
 団内で被験者の最も好きな他者について求め  
 た。なお、使用した16個の特性は、研究6で  
 用いた特性と同じものであった。②特性の社  
 会的望ましさの測定…16個のパーソナリティ特  
 性に関し、人間の性格として社会的に望まし  
 いと思う順に1位から16位まで順位づけさせ  
 た。③CAS不安測定テスト (Cattell's anxiety

scale)。

以上の測定のうち、 $S \rightarrow O'$  と CAS 不安測定テストは、ひき続いて与える実験操作をもつとむらしくするために行はしにもので、本実験の結果資料としては用いていない。

実験操作手続：実験前測定の実施後4日目に、つぎのような手順で実験操作を施した。まず、個々の被験者ごとに、 $S \rightarrow S'$  順位で順位づけの中位すなわち7位・8位・9位に順位づけられに特性3個を抽出した。抽出した3個のおのおのに関し、それぞれを  $S \rightarrow S'$  順位に、さらに  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  順位でその特性に与えられた順位および社会的望ましさ順位づけで与えられた順位を加算した。そして、合計順位最大の特性を上昇操作特性、合計順位最小の特性を下降操作特性とした。つぎに、各被験者に対し、以下のような教示に基づき、その個人のパーソナリティ ( $S'$ ) に関する偽りの情報を与え、それにより、被験者の  $S \rightarrow S'$  順位を變動させた。すなわち、上昇操作特性に関して

は  $S \rightarrow S'$  順位の第 2 位へ上昇操作、下降操作特性に関しては第 15 位へ下降操作した。合計順位中位の特性については、なんら  $S \rightarrow S'$  順位についての実験操作を加えず、上昇操作特性と下降操作特性に対する統制特性とした。

$S \rightarrow S'$  順位・ $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位・社会的望ましき順位の、三つの測定の合計順位によって特性の操作方向を決定したのは、問題の特性がもつ社会的望ましきの要因による影響を比較的に統制しようとして試みたものである。すなわち、パーソナリティ認知において、人間の性格として社会的に望ましい特性ほど、直接それを測定する社会的望ましき順位づけにおいてはいうまでもなく、さらに  $S \rightarrow S'$  順位や  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位においても、その特性に与えられる順位が上位、つまり小さくなる可能性を考慮したものである。したがって、実験操作によって  $S \rightarrow S'$  順位の第 2 位へ上昇操作された特性は、抽出された三つの特性のうちでは  $S \rightarrow S'$  順位 +  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位 + 社会的望ましき順位の和が最

大であつて、比較的に望ましくない特性、第15位へ下降操作された特性は三つの合計順位が最小で、比較的に望ましい特性となつてゐる。なお、情報による操作特性の位置を  $S \rightarrow S'$  順位の第1位・第16位とせず、第2位・第15位としたのは、情報の極端さによつて実験操作のもつともらしさが失われるかもしれないという危険性を避けたためである。

実験的情報を与えるための教示はつぎのとおりであつた。

「自分の性格を客観的に知ることは、あなたが健全な人間関係を保つためにきつめて重要なことです。あなたは、自分のことをどのくらい理解してゐるでしょうか。先日、CAS性格検査をもとに科学的に分析した結果、あなたの性格は、つぎのようであることがわかりました。」

1) 親切的な 2) 意志が弱い …… 15) 自信がない 16) 親切でない

以上の情報は、被験者ごとに情報を記入した用紙を配布し、さらに口頭で説明することにより与えた。記入した特性の順位は、上昇操作特性と下降操作特性の順位のみが変化し、他は実験前の  $S \rightarrow S'$  順位におけるそれと相対的に同じであった。

実験後測定：実験操作のチェックと結果の分析を行うため、実験操作を施した約15分後に、ハートナリティ認知の測定 ( $S \rightarrow S'$  順位と  $S \leftarrow O \rightarrow S'$  順位) と特性の社会的望ましさの測定を実験前測定と同様の方法で実施した。なおその際、実験操作で用いた情報用紙は机の上に伏せさせてあった。また、被認知者 (O) は、実験前測定で各被験者が最も好きな他者として指名した者と同一人であり、測定に先立ち実験者によってあらかじめ記入されていた。

実験は学級が編成された2か月後に行った。

#### (b). 結果

まず、実験操作が成功していたかどうかの検討をした。それは、個々の被験者ごとに、



上昇および下降操作が加えられた特性に関する実験前後の  $S \rightarrow S'$  順位を比較することにより行った。この場合、 $S \rightarrow S'$  順位における変動基準は、実験後測定での当該特性の  $S \rightarrow S'$  順位が実験前測定の順位より3段階以上の変動を示した場合に、 $S \rightarrow S'$  順位における「上昇変動」または「下降変動」とした。その理由は、直接に操作を加えた上昇操作特性と下降操作特性に関する  $S \rightarrow S'$  順位が、ともに上昇方向あるいはともに下降方向に変動するような場合、なんら実験操作を加えなかった統制特性の  $S \rightarrow S'$  順位が変わらないままであっても、操作特性に関する  $S \rightarrow S'$  順位の変動に伴って、そこに

 表 26 . 操作前後における  $S \rightarrow S'$  順位の変動分析(実験操作の検討)

操作特性	$S \rightarrow S'$ 順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇操作群	35	10	4	49
統制群	6	35	8	49
下降操作群	2	13	34	49
計	43	48	46	147

$$\chi^2=105.26 \quad df=4 \quad p<.001$$

最大 2 段階までの順位変動が間接的に生じる可能性があったからである。

表 26 より、操作特性群に関する実験操作は十分成功していたことがわかる。

そこでつぎに、 $S \rightarrow S'$  の変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の変動を分析した。この分析は、操作特性群を単位とした分析と個人を単位とした分析の二つの側面から行った。

まず、操作特性群を単位とした分析から述べる。実験操作の成功した上昇操作特性群 35 個、下降操作特性群 34 個、統制特性群 35 個に関し、 $S \rightarrow S'$  順位の上昇および下降変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動を分析した。表 27 はその

表 27.  $S \rightarrow S'$  順位の上昇変動・下降変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動分析 (実験操作の成功した特性について)

S → S' 順位	S ← (O → S') 順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	23	11	1	35
不変群	11	14	10	35
下降変動群	2	11	21	34
計	36	36	32	104

$\chi^2=37.98 \quad df=4 \quad p<.001$

20  
20

結果である。S←(O→S') 順位の變動基準も、すでに述べた理由から、実験後測定における当該特性の S←(O→S') 順位が実験前測定の順位より3段階以上の變動を示すものとした。

表 27 より、個人には、S→S' 順位におけるある特性の実験操作に基づく上昇變動が、その特性に関する S←(O→S') 順位を上昇變動させ、逆に、S→S' 順位における下降變動が S←(O→S') 順位を下降變動させる傾向のあることがわかる。これより、パーソナリティの自己一致性が生起する過程には、S←(O→S') を S→S' に近づけることによつて二つの認知内容が一致する投射的一致の機制が作用していることを理解することができるといえる。

つぎに、個人を単位とした分析について述べる。表 28 は、実験後の S→S' 順位の検討で、特性の上昇操作と下降操作が同時に成功していた被験者(49名中26名)について、その後 S←(O→S') 順位における当該特性の順位變動を分析した結果である。ここでは、S→S' 順位

での変動に対応して当該特性の  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位を上昇変動および下降変動させた被験者数、上昇変動か下降変動のどちらかに期待どおりの変動を示した被験者数、そして  $S \rightarrow S'$  順位での変動にもかかわらず  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動を示さなかった被験者数を検討している。

表 28.  $S \rightarrow S'$  順位における上昇・下降変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動分析 (個々の被験者を単位とした分析)

$S \rightarrow S'$ 順位で操作どおり上昇変動と下降変動を同時に示した被験者.	$S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位の変動方向		
	上昇 および 下降	上昇 または 下降	変動なし
26	13	8	5

$$\chi^2=3.77 \quad df=2 \quad .10 < p < .20$$

実験条件に合致した被験者が比較的少数であったこともあり統計的には有意ではないが、表 28 に示された傾向は明らかに表 27 の結果と一致する方向にあり、投射的一致機制の存在を重ねて保証するものであった。

つぎに、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を独立変数、 $S \rightarrow S'$  を従属変数とした実験によって、投入的機制に基づく一致過程の検討を行う。

## (3). 研究 7-b

## (a) 方法

被験者：この実験の被験者になったのは、石川県立羽咋高等学校の1年生46名である。男女別の内訳は、男子が23名、女子が23名であった。

実験前測定：研究7-aと同じ方法で、パーソナリティ認知の測定 ( $S \rightarrow s'$  順位、 $S \rightarrow o'$  順位、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位)、特性の社会的望ましさの測定、CAS不安測定テストを行った。被認知者(O)は、同性集団内で被験者の最も好きな他者とした。

実験操作手続：実験前測定の実施後4日目に、つぎのような実験操作を施した。まず、被験者ごとに、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位で順位づけの中位(7位・8位・9位)に順位づけられた特性3個を抽出した。その3個の特性のおのおのの  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位に、さらに  $S \rightarrow s'$  順位と社会的望ましさ順位づけでその特性に与えられた順位を加算し、合計順位最大の特性を上昇操

作特性、合計順位最小の特性を下降操作特性とした。

$S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位・ $S \rightarrow S'$  順位・社会的望ましさ  
 5 順位の合計順位によって上昇操作特性と下降  
 操作特性を決定した理由は、研究 7-a で述べ  
 たとおりである。すなわち、当該特性がもつ  
 社会的望ましさの実験結果への影響を比較的  
 に統制するためである。

つぎに、以下のような教示に基づき、被験  
 10 者が最も好きな他者のその被験者に対するパ  
 ーソナリティ評定 ( $O \rightarrow S'$ ) に関する偽りの情報を  
 与え、被験者の  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位を変動させた。  
 すなわち、上昇操作特性に関しては  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$   
 15 順位の第 2 位へ上昇操作し、下降操作特性に  
 関しては第 15 位へ下降操作した。合計順位中  
 位の特性についてはなんら実験操作を加えず  
 、統制特性とした。

実験的情報を与えるための教示はつぎのと  
 おりであった。

「自分の性格を他の人がどうみているか

を知ることは、あなたが健全な人間関係を保つためにきわめて重要なことです。あなたには、どのくらい他の人の気持ちを予測できるでしょうか。先日テストの結果、[O]さんは、あなたのことを、つぎのような性格だとみていました。」

1) 親切的な 2) 意志が弱い …… 15) 自信がない 16) 親切でない

以上の情報は、研究 7-a と同様、被験者ごとに情報を記入した用紙を配布し、さらに口頭で説明することにより与えた。記入した特性の順位は、上昇操作特性と下降操作特性の順位のみが変化し、他は実験前の  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位と相対的に同じであった。

実験後測定：実験操作を施した約 15 分後に、パーソナリティ認知の測定 ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位、 $S \rightarrow S'$  順位) と特性の社会的望ましさの測定を実験前測定と同様の方法で実施した。

実験は、学級が編成された 3 か月後に行っ

た。

(b). 結果

実験操作の検討は、個々の被験者ごとに、上昇および下降操作を加えた特性に関する実験前後の  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位を比較して行った。 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位における変動基準は、間接的に引き起こされる順位変動の範囲を考慮し、3段階以上の変動を示すものをもって  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位における「上昇変動」または「下降変動」とした。表29の結果から、操作特性群に関する実験操作に十分成功していったといえる。

表29. 操作前後における  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動分析(実験操作の検討)

操作特性	$S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇操作群	34	9	3	46
統制群	6	32	8	46
下降操作群	3	11	32	46
計	43	52	43	138

$$\chi^2=93.08 \quad df=4 \quad p<.001$$

そこで、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の変動に伴う  $S \rightarrow S'$  の変動を、操作特性群を単位とした場合と個人を単



位とした場合の二つの側面から検討した。

まず、操作特性群を単位とした分析のため、実験操作の成功した上昇操作特性 34 個、下降操作特性 32 個、統制特性 32 個に関し、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の上昇変動および下降変動に伴う  $S \rightarrow S'$  順位の変動分析を行った (表 30)。

表 30.  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の昇変動・降変動に伴う  $S \rightarrow S'$  順位の  
変動分析 (実験操作の成功した特性について)

$S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位	$S \rightarrow S'$ 順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	17	16	1	34
不変群	5	21	6	32
下降変動群	0	5	27	32
計	22	42	34	98

$$\chi^2=63.90 \quad df=4 \quad p<.001$$

表 30 に示された結果より、個人には、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位におけるある特性の実験操作による上昇変動が、その特性の  $S \rightarrow S'$  順位を上昇変動させ、逆に、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の下降変動が  $S \rightarrow S'$  順位を下降変動させる傾向のあることがわかる。このことより、自己一致性の生起過

程には、 $S \rightarrow S'$  を  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  に近づけることにより一致する投入的機制の存在が明らかである。

個人を単位とした分析は、実験後の  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位で、特性の上昇操作と下降操作が同時に成功していった被験者（46名中26名）について、 $S \rightarrow S'$  順位における当該特性の実験前後の順位変動を検討することにより行った（表31）。

表31.  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位における上昇・下降変動に伴う  $S \rightarrow S'$  順位の変動分析（個々の被験者を単位とした分析）

$S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位で操作どおり上昇変動と下降変動を同時に示した被験者	$S \rightarrow S'$ 順位の変動方向		
	上昇 および 下降	上昇 または 下降	変動なし
26	12	10	4

$$\chi^2=4.00 \quad df=2 \quad .10 < p < .20$$

表31の結果は、被験者が少数のためもあって統計的に有意ではないが、その傾向は明らかに操作特性群に関する表30の分析結果と合致したものであった。

#### (4). 研究7-a と 7-b についての考察

研究7-a と 7-b は、個人が最も好きな他者

との間でパーソナリティの自己一致性を認知する場合の機制について、実験的に検討したものである。この二つの実験結果から、自己一致性が生起する過程には、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  を  $S \rightarrow s'$  に近づけて認知することによって二つの認知内容が一致する投射的一致機制と、逆に  $S \rightarrow s'$  を  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  に近づけて認知することによって両者が一致する投入的一致機制の併存することが示された。とくに、前者の投射的一致機制は、Backman & Secord (1962) の研究で調査的に示唆されてはいたものの、これまでの研究では検証されていなかった機制である。

Backman & Secord (1962) による示唆とは、感情的に好きな相手や相互作用頻度の高い相手との間で、 $S \rightarrow s'$  と  $O \rightarrow s'$  の一致度よりも  $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  の一致度の方が大きいというかたちで示されたものである。これは  $S \rightarrow s'$  の要因を強調した結果ではあるが、両者の原因-結果関係を明らかにしたのではない。

ところで、研究 7-a と 7-b では、特性の社

会的望ましさの要因による影響をあらかじめ  
 統制するよう配慮をしていた。しかしなが  
 ら、このような配慮によつて、実験操作それ  
 自体への特性の社会的望ましさの要因による  
 影響は統制し得たとしても、なお若干の問題  
 が残る。すなわち、実験操作による特性の  
 $S \rightarrow S'$  順位の変動（研究 7-a の場合）や  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$   
 順位の変動（研究 7-b の場合）が原因となつ  
 て、当該特性に対する社会的望ましさの評価  
 が操作前と異なつたものになり、それが実験  
 後の  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位（研究 7-a）や  $S \rightarrow S'$  順位（  
 研究 7-b）に影響を及ぼすという可能性であ  
 る。

この問題の検討のために、研究 7-a と 7-b  
 で、それぞれ実験操作の成功した上昇操作特  
 性・下降操作特性・統制特性に関して、研究  
 7-a では  $S \rightarrow S'$  順位の変動に伴う当該特性の社  
 会的望ましさ順位の変動分析、研究 7-b では  
 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動に伴う社会的望ましさ順  
 位の変動分析を行った。

表 32. S→S' 順位の上昇・下降変動に伴う社会的望ましき順位の変動分析(研究7-a)

S→S' 順位	社会的望ましき順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	3	28	4	35
不変群	4	26	5	35
下降変動群	1	26	7	34
	8	80	16	104

$$\chi^2=0.33 \quad df=2 \quad n.s.$$

表 33. S&lt;(O→S') 順位の上昇・下降変動に伴う社会的望ましき順位の変動分析(研究7-b)

S<(O→S') 順位	社会的望ましき順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	8	23	3	34
不変群	2	26	4	32
下降変動群	0	24	8	32
	10	73	15	98

$$\chi^2=1.61 \quad df=2 \quad n.s.$$

表 32 と表 33 のいずれにおいても、特性の社会的望ましき順位に関する有意な変動は認められていない。この結果は、本研究で示されに投射的機制に基づく一致過程や投入的機制に基づく一致過程に、特性の社会的望ましき

の要因による影響が介入していなかつたことを保証するものである。

研究7-aと7-bは、自己一致性が最も顕著に認められやすいと予想される「認知者が最も好く他者」に関して、その生起機制を検討した。本章の研究の結果からも明らかによろしく、自己一致性が認知される程度は相手に対する好悪感情によつて異なる。それと同時に、個人がかかわりをもつすべての他者に対して、ある程度の一致度が認知される傾向を示した。そこで、自己一致性の生起機制をより一般的な相手に広げて検討するため、パーソナリティの自己一致性が最も生起しにくいと予想される「認知者が最も嫌う他者」について、その機制の実験的検討を行う計画を立てた。

つぎに述べる研究8-aでは、 $S \rightarrow s'$ を独立変数、 $S \rightarrow (O \rightarrow s')$ を従属変数として、投射的機制に基づく一致過程について検討を行う。研究8-bでは、 $S \rightarrow (O \rightarrow s')$ を独立変数、 $S \rightarrow s'$ を従属

変数として、投入的機制に基づく一致過程を実験的に究明する。どちらの研究でも、特性の社会的望ましさの要因による影響をあらかじめ統制して実験を行うことにする。

### (5). 研究 8-a

#### (a). 方法

被験者：この実験の被験者になったのは、広島県立広島商業高等学校の1年生女子44名である。

実験前測定：研究 7-a と同じ内容と方法で、パーソナリティ認知の測定 ( $S \rightarrow S'$  順位づけ・ $S \rightarrow O'$  順位づけ・ $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位づけ)、特性の社会的望ましさの測定、CAS 不安測定テストを実施した。その際、 $S \rightarrow O'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  は被験者が最も嫌う他者について求めた。

実験操作手続：実験前測定を行った4日後に、つぎのような実験操作を施した。まず、被験者ごとに  $S \rightarrow S'$  順位の中位 (7位・8位・9位) にあたる特性3個を抽出した。そして

相対的に望ましくないと評定された特性を  $S \rightarrow S'$  順位の第2位へ、相対的に望ましいと評定された特性を第15位へ実験的情報を与えらることによって操作した。操作の具体的な方法や情報を与えるための教示は、研究7-aの場合と同様であった。

実験後測定：実験操作のチェックと結果の分析のために、実験操作を施した約10分後に、パーソナリティ認知の測定 ( $S \rightarrow S'$  順位づけ・ $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位づけ) と特性の社会的望ましさの測定を行った。測定の内容と方法は実験前測定と同様であった。

実験は、学級が編成された約3か月後に行った。

### (b) 結果

実験操作の検討は、被験者ごとに、上昇操作および下降操作を施した特性について実験前後の  $S \rightarrow S'$  順位を比較することによって行った。変動基準は3段階以上の変動とした。

表34に示した結果から、操作特性群に關す



る実験操作は十分成功していったことがわかる。

表 34. 操作前後における  $S \rightarrow S'$  順位の変動分析 (実験操作の検討)

操作特性	$S \rightarrow S'$ 順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇操作群	30	10	4	44
統制群	1	37	6	44
下降操作群	5	9	30	44
計	36	56	40	132

$$\chi^2=99.60 \quad df=4 \quad p<.001$$

そこで、研究 7-a と同じく、 $S \rightarrow S'$  の変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の変動について、操作特性群を単位とした場合と個人を単位とした場合の二つの側面から検討を行った。

まず、操作特性群を単位とした分析は、実験操作の成功した特性群に関して、 $S \rightarrow S'$  順位の変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動を検討することにより行った。表 35 に示したのはその結果である。

これより、個人には、 $S \rightarrow S'$  順位におけるある特性の上昇変動が、その特性に関する  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位を上昇変動させ、 $S \rightarrow S'$  順位の下降

表 35.  $S \rightarrow S'$  順位の上昇変動・下降変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の変動分析(実験操作の成功した特性について)

$S \rightarrow S'$ 順位	$S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位の変動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	16	12	2	30
不変群	12	14	11	37
下降変動群	3	10	17	30
計	31	36	30	97

$$\chi^2=21.16 \quad df=4 \quad p<.001$$

変動が  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位を下降変動させる傾向のあることがわかる。このことから明らかによ  
 うに、他者(O)が認知者にとって嫌いな相手  
 の場合でも、 $S \rightarrow S'$ を基準にして、それに  $S \leftarrow$   
 $(O \rightarrow S')$ を近づけて認知する投射的機制に基づ  
 く自己一致性の生起過程が存在するといえる。  
 つぎに個人を単位とした分析について述べ  
 る。この検討のため、実験後の  $S \rightarrow S'$  順位にお  
 いて特性の上昇操作と下降操作が同時に成功  
 していた被験者(44名中22名)について、  
 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位における当該特性の実験前後の  
 順位変動を分析した。表36に示したのはその  
 結果である。

表 36. S→s' 順位における上昇・下降変動に伴う S←(O→s') 順位の  
変動分析 (個々の被験者を単位とした分析)

S→s' 順位で、操作どおり上昇変動 と下降変動を同時に示した被験者	S←(O→s') 順位の 変動方向		
	上昇 および 下降	上昇 または 下降	変動なし
22	11	7	4

$$\chi^2=3.36 \quad df=2 \quad .10 < p < .20$$

実験条件に合致した被験者が比較的少数であつたため、統計的には有意でないが、表 36 に示された傾向は明らかに自己一貫性が認知される過程に投射的一致機制が存在することを裏づけるものである。

附加的に、操作特性に関する S→s' 順位に変動が誘導されたことで、これらの特性の社会

表 37. S→s' 順位の上昇・下降変動に伴う社会的望ましき順位の變動分析

S→s' 順位	社会的望ましき順位の變動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	7	19	4	30
不変群	5	28	4	37
下降変動群	2	23	5	30
計	14	70	13	97

$$\chi^2=1.69 \quad df=2 \quad n.s.$$

的望ましさ評価が変化していなかったかどうかの検討を行った。

表 37 に示した結果より、特性の  $S \rightarrow S'$  順位の変動と社会的望ましさ順位の変動は独立であったことが明らかである。すなわち、投射的機制によって自己一致性が生起する過程は、特性の社会的望ましさの要因の影響によるものではないと結論される。

つぎに、被験者が最も嫌う他者について、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  を独立変数、 $S \rightarrow S'$  を従属変数とした実験によって、投入的機制に基づく一致過程を検討する。

## (6) 研究 8-b

### (a) 方法

被験者：この実験の被験者は、広島県立広島商業高等学校の1年生女子 38 名である。

実験前測定：研究 7-b と同じ内容と方法で、パーソナリティ認知の測定（ $S \rightarrow S'$  順位づけ・ $S \rightarrow O'$  順位づけ・ $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位づけ）、特性の

社会的望ましさの測定、CAS不安測定テストを実施した。その際、被認知者(O)は、集団内で被験者が最も嫌う他者とした。

実験操作手続：実験は実験前測定を実施した4日後に行った。まず、被験者ごとに、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位の中位(7位・8位・9位)にあたる特性3個を抽出した。そして、相対的に望ましくないと評定された特性を $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位の第2位へ、相対的に望ましいとされた特性を第15位へ実験的情報を与えることにより操作した。操作の方法や教示は、研究7-bと同様であった。

実験後測定：実験操作を施した約10分後にパーソナリティ認知の測定( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位づけ・ $S \rightarrow S'$ 順位づけ)と特性の社会的望ましさの測定を行った。

#### (b). 結果

表38は、実験操作についての検討結果である。これは、個々の被験者ごとに、操作を施した実験前後の $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ 順位の比較を行った

ものである。変動基準は研究ワ-ドと同じく3段階以上としている。表38の結果から、操作特性群に関する実験操作は成功したといえる。

また表39の分析から、S<(O→s')順位の実験的変動に伴う特性の社会的望ましさの変化もなかったことが確認された。

表 38 . 操作前後における S<(O→s')順位の變動分析 (実験操作の検討)

操 作 特 性	S<(O→s')順位の變動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇操作群	20	11	7	38
統 制 群	9	26	3	38
下降操作群	6	9	23	38
計	35	46	33	114

$\chi^2=40.94$   $df=4$   $p<.001$

表 39 . S<(O→s')順位の 上昇・下降変動に伴う社会的望ましさ順位の變動分析

S<(O→s') 順位	社会的望ましさ順位の變動方向			計
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	1	16	3	20
不 変 群	2	21	3	26
下降変動群	3	17	3	23
計	6	54	9	69

$\chi^2=0.39$   $df=2$   $n.s.$

そこで、研究 7-b と同じく、 $S \prec (O \rightarrow s')$  の変動に伴う  $S \rightarrow s'$  の変動を分析した。表 40 は、操作特性群を単位とした分析結果を示す。

これより、個人には、 $S \prec (O \rightarrow s')$  順位におけるある特性の上昇変動がその特性の  $S \rightarrow s'$  順位を上昇変動させ、 $S \prec (O \rightarrow s')$  順位の下降変動が  $S \rightarrow s'$  順位を不変もしくは下降変動させる傾向のあることがわかる。すなわち、他者 (O) が認知者にとって嫌いな相手である場合でも、 $S \prec (O \rightarrow s')$  を基準にして、それに  $S \rightarrow s'$  をあわせて認知する投入的機制による一致過程の存在が示唆された。また、 $S \rightarrow s'$  順位の下降変動については、必ずしも明確な結果が得られたと

表 40.  $S \prec (O \rightarrow s')$  順位の上昇変動・下降変動に伴う  $S \rightarrow s'$  順位の変動分析 (実験操作の成功した特性について)

$S \prec (O \rightarrow s')$ 順位	$S \rightarrow s'$ 順位の変動方向			
	上昇	不変	下降	
上昇変動群	11	9	0	20
不変群	6	12	8	26
下降変動群	1	12	10	23
計	18	33	18	69

$$\chi^2=18.91 \quad df=4 \quad p<.001$$

はいえない。

表 41 は、個人を単位とした分析結果である。

表 41 .  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位の上昇・下降変動に伴う  $S \rightarrow s'$  順位の変動分析  
(個々の被験者を単位とした分析)

$S \leftarrow (O \rightarrow s')$ 順位で操作どおり上昇変動 と下降変動を同時に示した被験者	$S \rightarrow s'$ 順位の変動方向		
	上昇 および 下降	上昇 または 下降	変動なし
16	4	7	5
	$\chi^2=0.88$	df=2	n.s.

表 41 の結果から明らかのように、ここでは  
、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  が変動しても、 $S \rightarrow s'$  においてそれ  
に対応した変動の生じにくいことが示されて  
いる。

自己一貫性は、本来、個人を単位として考  
えるべき現象である。そのことと表 40 の結果  
とをあわせて検討するなら、認知者にとって  
他者 (O) が感情的に嫌いである場合、他者の  
側の要因を強調するような投入的機制による  
一致過程は、いくらか生起しにくいといえよ  
う。



## (7). 研究 8-a と 8-b についての考察

研究 8-a と 8-b は、個人が最も嫌う他者との間でパーソナリティの自己一致性を認知する際の機制について、実験的に検討を行ったものである。この実験の結果から、つぎの二つの点が注目されよう。

第 1 は、感情的に最も嫌う他者に対する場合でも、パーソナリティの自己一致性が認知されたという事実である。このことは、前章の研究 2 の結果などから予想されたことではあるが、実験的に明確に確認されたことは注目に値すると思われる。自己一致性を認知する過程に含まれる対人的適応機能を重ねて示すものと考えられる。

しかしながら、そうした事実にもかかわらず、嫌いな他者に対する場合は好きな他者に対する場合に比べて、自己一致性を認知する傾向がやや弱いものであった。嫌いな他者について、自己の側の要因を強調する投射的機制に基づく一致過程は明確に認められたが

、他者の側の要因が強調される投入的機制に基づく一致過程が生じにくかったことが第2の注目すべき結果である。これは、嫌いな他者に対する場合、自己の側の要因を強調し、他者に投射することは比較的容易でも、他者の側の要因を強調してそれに自己を投入しにくいことによると思われる。

ところで、このような自己一致性を認知する際の機制の相違について解釈する場合、つぎのことを検討する必要がある。すなわち、個々の認知者を超えた一般的な機制として考えるのが妥当か、あるいは、個々の認知者の側に、投射的機制か投入的機制かのどちらかの機制による一致過程をたどりやすい傾向が存在することによると考えるのが妥当かという問題である。

本研究では、自己一致性の生起機制を検討するのに、操作特性群を単位とした分析と個人を単位とした分析による究明を行った。この二つの観点からの分析結果を比較すると、

操作特性群を単位とした分析では、ここでもとり扱ったすべての場合において従属変数に予想された方向への変動が認められた。しかし、個人を単位とした分析では、操作特性群を単位とした分析結果を支持する傾向にはあったものの、有意な結果は得られなかった。自己一致性を個人の対人的適応過程の中で理解しようという立場からすれば、その生起機制も個人を単位とした分析から究明することが妥当であると思われる。本研究における個人単位の変動分析で有意な結果が得られなかったことについて、すでに結果のところでも述べたように、実験条件に合致した被験者数が少なかつたことに原因を求めるとも可能である。しかし同時に、研究 8-a または 8-b で検証しようとした生起機制をとりない被験者が相当数存在したと考えることも可能であろう。

仮説的な考えであるが、パーソナリティの自己一致性は“社会的動機づけ (social motivation)

)”の観点からの解釈が可能であると思われる。  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  の二つの認知内容が、投射的一致の方向をたどるにせよ、投入的一致の方向をたどるにせよ、一致の状態に至るということは、他者との関連において認知的に安定した環境を保とうとすることの結果である。その意味から、社会的動機における親和動機 (*affiliation motivation*) との関連が強く予想される (Murray, 1938; Schachter, 1959)。さらにこの場合、投射的機制による一致過程をたどる型の個人と投入的機制による一致過程をたどる型の個人の存在を想定するならば、前者は、他者とのかかわり合いの中で自己を際立たせようとする型の個人であり、後者は、他者とのかかわり合いの中に自己を埋没ないし融合させようとする型の個人であろうということも容易に理解できる。

本研究の結果から上の考察に関する手がかりを得るため、表 36 で同時変動を示した 11 名 (投射的一致機制によると思われる個人) と

表41で同時変動を示した4名(投入的一致機制によると思われる個人)に注目した。そして、副次的に求められていたCAS不安測定テストの結果を比較することによって、両群の差異を検討した。その結果、とくに有意差の認められた性格因子は、疑い深さまたはパラノイ德的傾向であった(投射的一致機制による型:  $N=11$ ,  $\bar{x}=4.81$ ; 投入的一致機制による型:  $N=4$ ,  $\bar{x}=7.00$ ; Mann-WhitneyのUテストで  $Z=1.85$ ,  $p=0.06$ , 両側検定)。すなわち、投入的機制による一致過程をたどると思われる型の個人は、投射的機制によると思われる型の個人よりも、自分がかかわりをもつ他者の認知内容に関して、より強い関心を抱く傾向のあることが示された。このことは、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ を優位において  $S \rightarrow S'$ をそれに合致するように認知することによって一致状態に至るという投入的一致機制による型の個人には、それを裏づける性格特徴が認められることを示している。自己一致性の生起機制の相違という

観点から、個人の類型化が可能であることを示唆するものといえよう。

### 3. まとめ

第3章での検討課題は、パーソナリティの自己一致性が生起する際の生起機制を解明することであった。その際、理論的・経験的に二つの機制の存在が予想された。一つは、対人的かかわりの中で自己の側の要因が強調された投射的一致機制であり、他の一つは、他者の側の要因が強調された投入的一致機制である。五つの調査的・実験的研究をとおして得た結果と考察された問題を略述し、全体的にまとめておく。

研究らでは、学級集団の自然な過程の中で、ある時点でパーソナリティの自己一致性が不成立であるような関係に注目し、それが時間的経過に従ってたどる変動過程の分析を行った。そして、 $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  が不一致な状態

すなわち、自己一致性の不成立な状態は一致の状態へ変動すること、さらにその一致過程には、当初予想されたように、投射的機制に基づく過程と投入的機制に基づく過程の併存することが明らかになった。

研究 7-a と 7-b では、被験者の最も好きな他者を認知対象として、また、研究 8-a と 8-b では、パーソナリティの自己一致性が比較的に生起しにくいと予想される嫌いな他者に関して、自己一致性の生起機制を実験的に究明した。そして、研究 7-a と 8-a では、 $S \rightarrow S'$  の実験的変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の変動を検討し、投射的一致機制の存在を示す結果を得た。また、研究 7-b と 8-b では、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の実験的変動に伴う  $S \rightarrow S'$  の変動を検討し、投入的一致機制もまた存在する結果を得た。

以上の結果のうち、研究 6 と 8-a および 8-b に示された結果は、前章で指摘した自己一致性の対人的適応機能の一つである“調和関係形成機能”を重ねて確証するものであった。

ところで、研究 7-a から 8-b までの四つの実験結果は、操作された特性群を単位とした分析で得られたものである。これら四つの実験では、別に被験者個人を単位とした変動分析が行われた。個人単位の分析結果はつぎのようである。すなわち、感情的に好きな他者については、投射的機制に基づく一致過程も投入的機制に基づく一致過程も存在することが示された。しかし、嫌いな他者については、投射的機制に基づく一致過程の存在は示されたものの、投入的機制に基づく一致過程は存在しにくいことが示唆された。

#### (1) 一致機制の検討方法

すでに述べたように、本章の四つの実験的研究では、操作特性を単位とした検討と被験者個人を単位とした検討の二つの分析を行った。二つの観点からの検討結果は、矛盾する方向ではないにせよ、必ずしも完全に合致したものではなかった。しかしながら、個人を



単位とした分析結果は、操作特性を単位とした分析結果の価値を必ずしも依めるものではないと考えられる。このことについて、従来の関連する実験研究で用いられた検討方法に触れながら説明する。

Gerard (1961) の実験では、被験者の空間把握能力に関して他者による評価 ( $0 \rightarrow s'$ ) を受けた被験者の、その後の自己評価 ( $S \rightarrow s'$ ) が検討された。また、Backman, Secord, & Peirce (1963) の実験では、自分の欲求に関する専門家の評価 ( $s'$ ) を示された被験者の、 $S \leftarrow (0 \rightarrow s')$  が検討された。どちらの実験の場合も、被験者に与えられた他者による評価は、被験者自身が当初自分に認知していた  $S \rightarrow s'$  より肯定的か否定的かのどちらか一方の情報であった。したがって、これらの研究で用いられた結果の検討方法は、本研究の四つの実験で操作特性群を単位とした検討を行う際にとられた方法とまったく同じ方法であったことが指摘される。

本研究の実験では、ひとりの被験者の  $S \rightarrow s'$

もしくは  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  に、上昇変動と下降変動が同時に操作された。これによつて、上昇操作と下降操作が同時に成功した被験者に関するその後の  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  もしくは  $S \rightarrow s'$  の変動分析が可能になつたのである。研究  $\eta$ - $b$  を例にとつてみると、実験操作の検討を行つた表 29 と表 31 を比較すれば、明らかに個人を単位とした実験条件の方が厳しいものであつたことがわかる。同様に、表 31 で、従属的に生じた  $S \rightarrow s'$  順位の変動分析において「上昇変動または下降変動」と分類された被験者が、表 30 では、投入的機制による一致過程を支える資料になつてゐたことも容易に理解されることである。Gerard (1961) や Backman, Secord, & Peirce (1963) の研究では、すでに指摘したように特性または能力評価の操作が一方向からだけの操作であつたため、操作された特性に関する分析がそのまま個人に関する分析と同義に処理される結果となつてゐる。

以上の理由から、個人を単位とした本研究

での分析結果は、操作特性を単位とした分析結果をむしろ厳しく修正し深化させるものであったといえよう。

## (2) . 一致過程における個人差

個人を単位とした分析結果について考察すると、パーソナリティの自己一致性の生起機制に関して、投射的一致機制あるいは投入的一致機制が一般的に存在するのかが問題をしに究明を行うよりも、むしろ、つぎの考え方をとるのが妥当のようと思われる。すなわち、個人の側に、投射的一致機制を示す個人や投入的一致機制を示す個人、さらに両方向とも的一致機制を示す個人などが存在するという考え方である。

すでに研究 8-a と 8-b の結果について考察したように、自己一致性を、個人の対人的適応過程の中で理解しようという立場からすれば、その生起機制も個人個人を単位として全体的に検討することが妥当であろう。どのよ

うな個人が投射的機制に基づく一致過程をたどり、また、投入的機制に基づく一致過程をたどるのであろうか。こうした問題については、つぎの第4章でとり上げる。

## 第4章 自己一致性の生起過程に おける個人差要因

パーソナリティ認知を含めた対人認知の過程はきわめて主観的な判断過程である。したがって、その過程は、認知者のパーソナリティや能力、欲求、態度、動機づけなどの内部的要因もしくは個人差要因に大きく影響されると思われる。

パーソナリティ認知の正確さを検討課題とした初期の研究でも、個人差要因を問題にしなから、一貫した結果が示されていない。従来、パーソナリティ認知の過程にかかわる個人差要因として、自尊感情 (self-esteem)、外罰性 (extrapunitive)、権威主義的パーソナリティ (authoritarian personality)、依存性 (dependency) など、多くの変数が検討されてきている。しかしながら、概念の多義性、影響変数としての論理性、あるいは測定上の問

題もあって、個々の要因の影響に関する結果は必ずしも一貫したものではない。

Bieri ( 1955, 1966 ) によって体系づけられた“認知的複雑性 ( cognitive complexity ) ”が、対人認知過程に影響する個人差要因として、近年、有力視されてきている。対人認知の過程が一種の判断過程である以上、このような認知構造的観点からのアプローチは適切であり、さらにその検討を重ねる必要があると思われる。また、パーソナリティの自己一致性を認知的一貫性理論の枠組の中で理解しようとするれば、個人差変数として動機的要因の検討が重要になると思われる。

そこで第4章では、自己一致性の生起過程を中心としたパーソナリティ認知過程に及ぼす個人差要因の影響について、認知的要因と動機的要因の二つの観点から究明する。

## 1. パーソナリティ認知過程における認知的複雑性の影響

## (1). 問題の設定

Kelly (1955) は、個人が社会の中でより安定した適応をするために、自己の環境を解釈し、そこで生じる事象を予測しようとする際に用いる個々人特有の次元を“人の構成体 (personal construct)” と呼んだ。そして、人はこうした構成体のいくつかが相互に関係しあった“構成体の体系 (constructs system)” をもつとしている。Bieri (1955, 1966) は、この構成体の体系が社会的な場における人の認知過程を有効に説明する概念になり得ると考え、人が対人認知事態で利用し得る構成体の体系化の程度を、“認知的複雑性 (cognitive complexity)” の概念によって表現しようとして試みた。すなわち、環境をいかに正確に解釈し予測するかという問題は、個人のもつ構成体の体系がどの程度分化しているかに依存する。他者を認知する際、分化した構成体の体系をもつ個人は、そうでない個人にくらべ、よ

り多次元的な弁別が可能であると予測した。より多くの観点から他者を弁別できる構成体の体系をもつ個人は認知的に複雑であり、逆に、弁別できない個人は認知的に単純であると考えた。したがって、認知的複雑性は、他者を多次元的に弁別し解釈する個人の能力であり、操作的には、一定の刺激に対して示される反応の多様性として定義される。それは、具体的には、役割構成体領域テスト (Role construct repertory test : 以下、Rep test と略記) により測定される。

Kelly (1955) により理論的枠組が呈示され、Bieri (1955) によって概念化された認知的複雑性に関する研究は、その後二つの方向で続けられてきている。一つは、いかにして認知構造における個々人の差異を測定するかという測定技法にかかわる領域である (Bieri, 1955 ; Bieri & Blacker, 1956 ; Bieri & Messerley, 1957 ; Leventhal, 1957 ; Lundy & Berkowitz, 1957 ; Sechrest & Jackson, 1961 ; Scott, 1962, 1963 ;



Allard & Carlson, 1963 ; Tripodi & Bieri, 1963 ; Leventhal & Singer, 1964 ; Mayo & Crockett, 1964 ) 。 他 の 一 つ は 、 社 会 的 お よ び 臨 床 的 判 断 に 際 し て 個 人 の 認 知 構 造 が い か に 機 能 す る か を 究 明 し よ う と す る 方 向 で あ る ( Bieri, 1955 ; Leventhal & Singer, 1964 ; Mayo & Crockett, 1964 ; Crockett, 1965 ; Adams - Webber, 1969 ; 高 橋 , 1968 ) 。

さ て 、 種 々 の 場 面 に お け る 他 者 の 行 動 予 測 と 認 知 的 複 雑 性 と の 関 係 に つ い て は 、 Bieri ( 1955 ) 、 Leventhal ( 1957 ) 、 Adams - Webber ( 1967 ) 、 さ ら に 浜 名 ・ 小 川 ・ 市 河 ・ 高 橋 ( 1970 ) な ど に よ っ て 検 討 が 行 わ れ て い る 。 そ し て 、 認 知 的 に 単 純 な 個 人 ほ と 自 分 の 反 応 と 他 者 の 反 応 と の 間 に 類 似 性 を 想 定 す る 傾 向 が 認 め ら れ る け れ ど も 、 そ の 関 係 は 比 較 的 弱 く 、 統 計 的 検 定 で は 有 意 差 が 確 認 さ れ て い な い 。 ま た 、 他 者 の 行 動 を 予 測 す る 際 の 正 確 さ に つ い て も 、 認 知 的 複 雑 性 の 程 度 と の 間 に 一 貫 し た 傾 向 が 認 め ら れ て い な い 。 こ こ に と り 上 げ た 諸 研 究 で

は、いずれも、被験者に対して、ある社会的場面とそこで行われ得るいくつかの行動選択肢が提示され、その選択肢に關して他者の反応を予測する手法がとられてゐる。つまり、本論文で問題としてきたようなパーソナリティ認知の過程を直接的に検討したわけではない。

認知的複雑性が、社会的な場における人の認知過程を説明する有効な概念になり得るかどうかを検討するためには、対人認知の中心的過程であるパーソナリティ認知の過程でどのように機能し、また、どのようにその過程に影響を及ぼしてゐるかを究明する必要があると思われぬ。

そこで本研究では、パーソナリティ認知過程における認知的複雑性の影響について検討を行ふ。その際、本論文の主題であるパーソナリティの自己一致性認知を中心において、認知者の認知的複雑性を独立変数、他者への好悪感情を媒介変数として、それがパーソナリティ認知の過程で果たす機能の解明を検討課題と

した。副次的に、認知の正確さと想定類似性を認知する過程についてもあわせて検討を行う。

研究の実施にあたって、下に記すような研究仮説をたてた。この仮説は、認知的複雑性と他者の行動予測に関して従来の研究で得られた結果、すなわち、認知的複雑性の程度と予測の正確さは関係しないという結果および認知的に単純な個人ほど自他の反応間に類似性を想定しやすい傾向 (Bieri, 1955; Leventhal, 1957; Adams-Webber, 1967; 洪名他, 1970) に、本論文第2章で明らかにした自己一致性と好悪感情の関係、すなわち、自己一致性を認知する程度は嫌いな他者よりも好きな他者についての方が大きいという結果を組み合わせ得たものである。

仮説1: 個人の認知的複雑性のちがいは、他者に関して認知するパーソナリティ内容の正確度に差異をもたらさない。他者に対する好悪感情も正確度と関係しないであろう。

仮説 2 : パーソナリティの自己一致性を認知する程度は、認知的に単純な個人ほど大きく、同時に、好意をもつ他者に対するほど大きい。想定類似性についても同様であろう。

## (2). 研究 9

### (a). 方法

被験者 : 研究の対象となったのは、呉市立警固屋中学校の1年生男女83名である。

測定内容 : 測定は、認知的複雑性の測定、好悪感情の測定、パーソナリティ認知の測定の三つについて行った。

① 認知的複雑性の測定 … 小川・浜名・市河・高橋 ( 1966, 1967a, 1967b ) によって開発された Rep test を用いた。測定の手順を略記するところのようである。

②. Rep test の実施手順 : ① 家庭・交友・学校の3生活領域から選ばれた10個の役割 ( 好きな友人・尊敬する先生など ) を記述しておき、回答者に、過去および現在の知人の中か

ら各役割記述に該当する人物名をあげさせる。  
 ⑱ 記述された10名の各役割人物を最も適切に表現すると思う性格特性とその反対の特性を、おのおの異なる形容詞対により記させる。  
 ㉓ 求められた性格特性の対を、その個人が他者を弁別する際に用いる個人特有の認知次元としてとらえ、これをもとにして、個人ごとに10組の評定尺度(9段階)を編成する。  
 ⑳ 10組の評定尺度の各次元に関して、さきに指名させた10名の役割人物のそれぞれを評定させる。

① 認知的複雑性得点 (cognitive complexity score : CCS) の算出 : ① 10名の役割人物に対する評定結果を、各特性次元ごとに、9段階のいずれの極に近いかにより三分して (+)・(0)・(-) の符号で表示し、各個人ごとに、10性格特性次元 × 10役割人物のマトリックスを作成する。② マトリックスの各性格特性次元ごとに、10名の各役割人物に関して評定されたその特性の所有性(符号)の一致・不一致を検

討する。そして、役割人物間が同符号の評定をされている場合、すなわち (+)・(+)、(-)・(-)、(0)・(0) には +1 点、異符号、すなわち (+)・(-)、(-)・(+) には -1 点、零と他の符号の組合せの場合、すなわち (0)・(+)、(0)・(-) には 0 点を与え、その和を算出する。いま、ある性格特性次元に関して、10 名の役割人物に対する評定で、(+) が  $l$  個、(0) が  $m$  個、(-) が  $n$  個であったとすれば、得点は  $lC_2 + mC_2 + nC_2 - l \cdot n$  (ただし、 $l + m + n = 10$ ) で算出できる。したがって、一つの性格特性次元に関して理論的に求められる得点は 45 点から -5 点までとなる。45 点は、当該性格特性次元において 10 名の役割人物がすべて同符号の評定をされる場合、すなわち、その特性次元の弁別度が低い場合である。また、-5 点は、10 名の役割人物のうち 5 名には (+)、他の 5 名には (-) の評定がされるというように、その特性次元の弁別度が高い場合である。この得点分布は連続的でなく、全体で 20 通りの得点の

現れ方となる。③そこで得点の高い方から順に0~19の段階値を与え、得点を段階値に置き換える。この得点を10個の性格特性次元にわたって合計し、当該個人のCCSとする。これより、CCSの得点可能範囲は0から190に及ぶ。得点が高いほど他者を多次元的に弁別し得る、すなわち認知的に複雑であり、得点が高いほど認知的に単純な個人を表すことになる。

②好悪感情の測定…修学旅行での班編成を選択規準とし、同性集団内で好きな友人と嫌いな友人を各3名選択させた。

③パーソナリティ認知の測定…22個のパーソナリティ特性から該当する5個を選択する形式で、 $S \rightarrow S'$ 、 $S \rightarrow O'$ 、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ の各側面に関して測定を行った。なお、 $S \rightarrow O'$ と $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ の対象となった他者(O)は、好悪感情の測定で各被験者があげた好きな友人3名と嫌いな友人3名の計6名とした。

測度：認知の正確度は $S \rightarrow O'$ と $O \rightarrow O'$ の一致数

、自己一致性の程度は  $S \rightarrow s'$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  の一致数、想定類似性の程度は  $S \rightarrow s'$  と  $S \rightarrow o'$  の一致数とした。三つの測度とも、被験者ごとに好悪感情別（各3名）に算出した。したがって、得点可能範囲は0点から15点となっている。

なお、資料の収集は学級が編成された約6か月後に行った。各成員は互いに熟知した関係になっていた。

### (b). 結果

三つの測定をとおして資料が整った55名（男子29名・女子26名）を分析の対象とした。55名は、CCSの程度により、認知的複雑性高位群（ $N=18$ 、CCS 128以上、 $\bar{x}=140.11$ ）、中位群（ $N=19$ 、CCS 98~127、 $\bar{x}=114.26$ ）、低位群（ $N=18$ 、CCS 97以下、 $\bar{x}=79.50$ ）に三分された。性差についてはCCSにまったく差が認められなかったのので、両者をこみにして群分けがされた（男子： $\bar{x}=111.35$ ， $SD=28.37$ ；女子： $\bar{x}=111.41$ ， $SD=27.35$ ）。

また、認知の正確さと認知的複雑性の関係



について検討を行った。図2はその結果である。

図2の結果を、認知的複雑性(個体間変数)と好悪感情(個体内変数)およびその交互作用に関して分散分析したが、いずれの変数の効果も有意ではなかった(認知的複雑性:

$F < 1$ ,  $df$ は2と52;

好悪感情:  $F = 1.79$ ,  $df$ は1と52; 交互作用:

$F = 1.19$ ,  $df$ は2と52, いずれも  $ns$ )。このことから、認知の正確さに関する仮説1は支持されたことがわかる。

つぎに、仮説2について検討した。図3は、認知的複雑性と好悪感情別にみた自己一致性に関する結果である。図3に示された値に関して分散分析した結果が表42である。

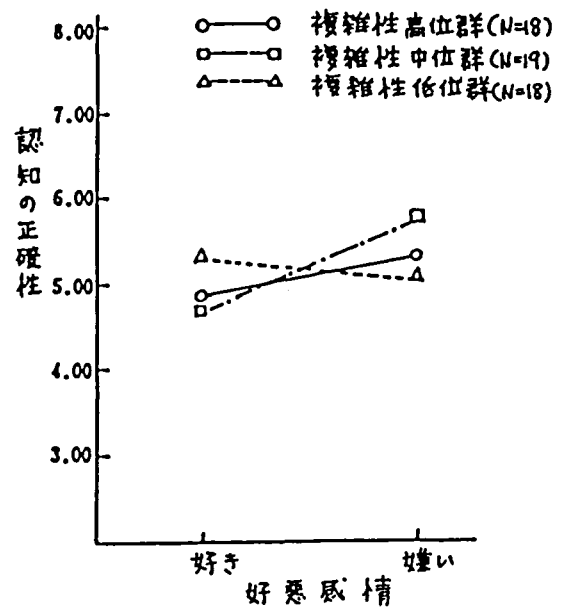


図2. 認知的複雑性と好悪感情別にみた認知の正確性得点

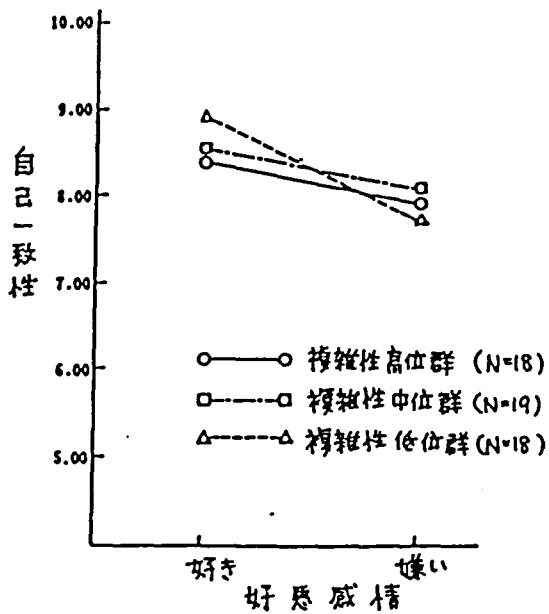


図3. 認知的複雑性と好悪感情別  
に自己一致性得点

図3と表42より明らかのように、相手に対する好悪感情によって自己一致性を認知する程度が異なるという、本論文第2章で得られた結果を重ねて確認する結果が示された。しかし、認知的複雑性の方がいによる自己一

表42. 自己一致性得点(図3)の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
被験者間	535.69	54		
認知的複雑性(A)	1.43	2	0.72	<1
誤差	534.26	52	10.27	
被験者内	223.00	55		
好悪感情(B)	14.55	1	14.55	3.66*
A × B	1.97	2	0.99	<1
誤差	206.48	52	3.97	
全体	758.69	109		

\* $p < .10$

致性を認知する過程への有意な影響は認められなかった。自己一致性に関して仮説2は部分的に支持されたといえよう。

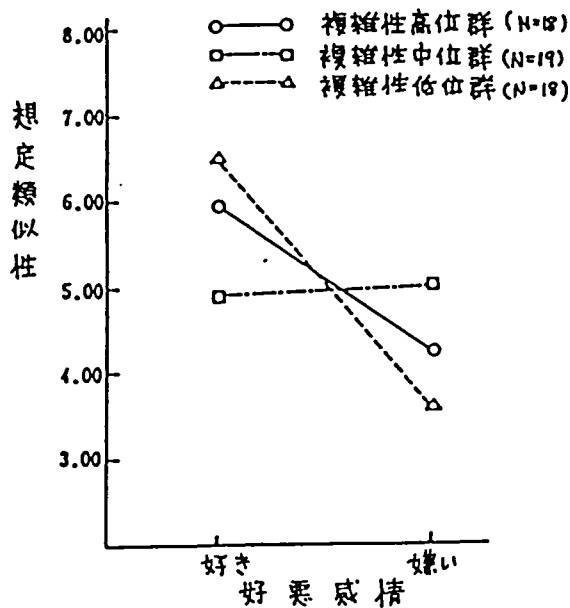


図4. 認知的複雑性と好悪感情別  
みた想定類似性得点

図4は、認知的複雑性と好悪感情別に検討した想定類似性の程度を示したものである。これを分析した表43から、好悪感情の主効果と、認知的複雑性×好悪感情の交互作用に有意差が認められた。

交互作用に有意な傾向が認められたことより、想定類似性を認知する程度に関して個人の認知的複雑性のちがいが機能する仕方は、他者に対する好悪感情の別によって異なることがわかる。すなわち、これまでの、Bieri (1955)、Leventhal (1957)、Adams-Webber (1967)

表 43. 想定類似性得点(図4)の分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
被験者間	358.49	54		
認知的複雑性 (A)	2.22	2	1.11	<1
誤 差	356.27	52	6.85	
被験者内	490.50	55		
好悪感情 (B)	56.74	1	56.74	7.53**
A × B	41.57	2	20.79	2.76*
誤 差	392.19	52	7.54	
全 体	848.99	109		

\*\*p&lt;.01 \*p&lt;.10

)、浜名他(1970)の研究で認められてきたような、認知的に単純な個人の方が複雑な個人よりも自己および他者の反応に類似性を想定しやすい傾向は図4でも認められた。しかし、それは、個人が好意をもつ他者に関していえることであり、嫌いな他者に関しては有意な傾向がみられていない(好意群に関して、複雑性中位群： $\bar{x}=4.79$ ， $SD=2.84$ ；低位群： $\bar{x}=6.61$ ， $SD=3.20$ 、 $p<.05$ ；嫌悪群に関して、複雑性中位群： $\bar{x}=4.82$ ， $SD=2.18$ ；低位群： $\bar{x}=3.67$ ， $SD=2.00$ 、 $ns$ )。また、好悪感情に

よる差異を認知的複雑性の各群ごと検討した結果から、認知的に単純な個人において、自分の好きな友人に対する方が嫌いな友人に対する場合より、想定類似性を高く認知しやすいことが認められた（複雑性低位群で、好意群： $\bar{x}=6.61$ ， $SD=3.20$ ；嫌悪群： $\bar{x}=3.67$ ， $SD=2.00$ ， $P<.01$ ）。想定類似性に関して、仮説2は若干修正されたがたちで支持されたといえよう。

仮説2に関連して検討を行った二つの測度について、認知的複雑性と好悪感情の別とからまとめるとつぎのようになれる。すなわち、個人には、自分が好意をもつ他者に関してパーソナリティの自己一致性や想定類似性を高く認知する傾向があり、しかも、この傾向は認知的に単純な個人において顕著に認められやすい。

### (C). 考察

この研究の検討課題は、認知者の個人差変数である認知的複雑性の程度のちがいが、ハ

パーソナリティ認知過程、とくに自己一致性を認知する過程にどのように影響するかを分析することであつた。そして、認知的に複雑か単純かという観点からだけでは、自己一致性や想定類似性を認知する過程に相違は認められないという結果が得られた。想定類似性の認知には認知的複雑性と好悪感情との交互作用が示されたが、自己一致性の認知については同様の得点傾向が示されたものの、その交互作用は有意でなかつた。

このような結果が得られた原因の一つに、認知者の他者に認知する自己一致性の程度が、相手に対する好悪感情の別によるちがいを示しつつ、同時に、嫌いな相手についても高かつたことが指摘できよう。図3と4を比較すると明らかのように、嫌いな相手について認知された自己一致性の程度が、好きな相手に認知された想定類似性の程度より高いという結果が示されてゐる。このことは、パーソナリティの自己一致性がすべての他者に関して

ある程度高く認知されるといふ本論文の第2章で示した結果を重ねて裏づける結果である。しかし、同時に、このことが認知者の認知的複雑性による影響を抑制してしまつたと考へることゝもできよう。

つぎに、他者の反応を予測する際の正確さについて考へてみたい。本研究の結果は、個人の認知的複雑性のちがいが他者に関して認知するパーソナリティ内容の正確度に差異をもたらさないことを示すものであつた。しかしながら、認知の正確さに対する認知的複雑性の関係は、もともと両者に積極的な相関を想定して検討されてきたものである。この問題を最初に検討した Bieri (1955) の研究では、個人の認知構造がより複雑に分化していれば、それだけ、その個人が他者の行動を解釈するのに利用できる次元ないし角度が増加すると仮定された。そして、12の問題場面における他者の行動に対する予測の正確さと認知的複雑性の間に  $r = .29$  ( $N = 34$ ,  $p = .05$ ) の相関値を

得ている。この相関値は有意な関係を示す水準に達しているとはいっても、値そのものは低いものであった。

逆に、浜名・小川・市河・高橋(1970)による Bieri の研究と類似した行動場面での予測や、サー斯顿型 の態度尺度に関する他者の反応予測に関する研究においては、認知的に複雑な個人と単純な個人との間で他者の反応についての認知の正確さに差を認めることができなかった。ただ、比較的交流の浅い他者に関し、その他者の構成体を予測させた

Adams - Webber (1969) の研究では、認知的に複雑な個人の方が予測の正確さにおいて高いことを示す結果が得られている。たんに、認知的複雑性と予測の正確さとの関係を問題にするだけであれば、以上の諸研究の結果は互いに矛盾するものであるが、認知対象である他者に関する情報量の多少が、この矛盾を解く鍵であるように考えられる。

認知的複雑性と予測ないし認知の正確さの



間に積極的な関係を示した Adams - Webber (1969) の結果は、実験のために特別に構成された比較的未知の他者に関して得られたものである。一方、両要因間に比較的弱い関係かまたは関係がないとの結果を示した Bieri (1955) や 浜名・小川・市河・高橋 (1970) の結果は、互いに十分交流のある学級集団内での他者に関して得られたものである。これから、つぎのように解釈することができよう。すなわち、認知的に単純な個人は、他者の行動を解釈するのに利用可能な次元ないし角度が少ないので、他者に関する情報量が比較的少ない段階では他者に対する認知が不正確である。そして、情報量が増加するにつれて他者を適切に認知できるようになる。一方、認知的に複雑な個人は、他者の行動を解釈するための次元ないし角度を多く利用できるので、情報量の多少にかかわらず他者を適切に認知することができるといえる。認知の正確さについていえば、他者に関する情報量の少ない段階では

、認知的に複雑な個人の方が単純な個人よりも他者の反応を正確に認知する。しかし、情報量が増すにつれて両者の差異はなくなってくる。と予測できる。これはあくまで仮説的な解釈であるが、この検討は興味ある問題である。

## 2. パーソナリティ認知過程における社会的望ましきへの反応傾向の影響

### (1) 問題の設定

社会心理学において提唱されてきている Heider (1946, 1958)、Newcomb (1953)、Osgood & Tannenbaum (1955)、Festinger (1957) らの諸理論は、認知的一貫性理論 (theories of cognitive consistency) と総称して呼ばれる。これらの諸理論は、現象的には、自己および他者に関する認知過程間の内的一貫性あるいは調和を問題としながら、その基本的前提として、なんらかの動機的要因がその基底にあることを

仮定してきている。しかしながら、どのような動機的要因がこれに関係するのかという具体的な対応関係については、これまで、必ずしも明確に究明されてはいない。これは、おそらく、これらの諸理論が適用される行動領域がきわめて広範なものであることによつて、それに対応する適切な動機的要因が同定されにくかつたことによると思われる。さらに、個人内で認知的な一貫性に欠ける状態を解消あるいは回避しようとすること自体が、一つの動機的要因であるという考え方が一般に強くなされ、それ以外の動機的要因に注目が払われなかつたことにも原因してゐると考えられる。

かりに、認知的に一貫した状態を求めるといふ動機的状态を前提にするとしても、対人的なかかわりの中で、一貫性に欠ける状態を解消もしくは回避しようとする仕方により、具体的な動機的要因の存在を想定することができると思われる。

ところで、自己のパーソナリティや能力的側面の評価に關係する動機的要因としてしばしば注目されるものに、認知者の自尊心あるいは自尊感情がある。Dittes (1959) や Walster (1965) の自尊理論 (self-esteem theory) では、人は自らの評価を高めようとする欲求をもっていることが仮定され、その欲求を充足する主要な源として“他者による承認 (approval motivation)”の存在を前提にしている。この他者による承認欲求は、誰にでもある一般的なものであるが、とくに自尊心の低い者においてより強いと仮定されている。

この考え方からすれば、自分自身に自信を欠き、自分の価値について不安定さを感じている者は、他者からの支持や承認をより多く求めることになり、自尊心の低い者は高い者よりも、他者からの肯定的評価によって満足し、また、他者からの否定的評価によって、より不満足な状態にさらされることになること予想できる。

本論文では、認知的一貫性理論の立場から  
 パーソナリティの自己一貫性が認知される過程  
 について検討してきている。自尊理論と認知的  
 一貫性理論とは、自尊心もしくは自己評  
 価の低い場合には、他者からの評価に対する反  
 5 応予測が異なったものになる。すなわち、自  
 尊理論では、すでに述べたような理由から、  
 自尊心の低い者が他者から肯定的評価を受け  
 ると、その他者に対して好意的に反応し、他  
 10 者からの否定的評価には非好意的に反応する  
 と予測される。これに対して、認知的一貫性  
 理論では、自尊心もしくは自己評価の低い者  
 が他者から肯定的評価を受けるとは  $S \rightarrow S'$  と  
 $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  が一致しないことであり、当該他  
 者に対して非好意的に反応すると予測される  
 。逆に、 $S \rightarrow S'$  と合致するような他者からの否  
 定的評価に対しては、むしろ好意的に反応す  
 ると予測される。こうした自己一貫性の程度  
 と好悪感情との因果的關係や、認知者の自己  
 認知水準と自己一貫性の関係については、す

で、第2章の研究3と4でも検討し、認知者の個人差要因、とくに自尊心などの要因を考慮した検討の必要性が考察されていっている。

以上のような問題について、Jones (1973) は、従来の研究を展望して、認知者が他者からの評価をどのような手段によって認知するかによりどちらの理論による予測が適合するかが異なると考察している。すなわち、認知者が他者からの評価を自ら推測するとき ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) は一貫性理論による予測が適合し、実験者がそれを情報として知らせるとき ( $O \rightarrow S'$ ) は自尊理論による予測が適合するといっている。また、Jones & Ratner (1967) は、何か重大な決定を前にして、認知者が自己の水準を的確にとらえる必要があるときは一貫性理論による予測が適合し、決定後では自尊理論による予測が適合することを実験的に明らかにしている。これらの研究結果は、二つの理論の適用される局面がそれぞれ異なる

ることを示唆するものである。

ところで、こうした動機的要因の影響を検討しようとする場合、Dittes (1959) や Walster (1965)、さらに Jones (1973)、Jones & Ratner (1967) らの研究で、認知者の自尊心と自己評価が同義に考えられている点は検討されるべきであろう。また、自尊心の低い者が他者による承認欲求傾向において強いと前提される点も検討されるべき問題である。

Crowne & Marlowe (1964) は、人の社会的承認欲求は「社会的望ましさへの反応傾向 (social desirability response tendency)」によって測定されるとして、MMPI をもとに作成した SD 尺度を提出している。そこで本研究では、Crowne & Marlowe の方法に準拠して SD 反応傾向測定尺度を作成し、ハースナリティ認知の過程における SD 反応傾向の影響について究明を行う。なお、SD 反応傾向は「社会的に望ましい方向で行動しようとする傾向」と定義されるが、Crowne & Marlowe は、そこ

に「たとえ大部分の人々の行動傾向と合致しなくても」という条件を付している。そして、そうした条件下でも社会的に望ましい反応をしようとする中に、他の人々による承認・是認を得たいという動機、すなわち社会的承認を求めぬ動機が反映されると考えている。

## (2). 研究 10

### (a). 方法

被験者：この研究の被験者になったのは広島女子大学の学生 142 名である。

SD 反応傾向測定尺度の作成と測定：SD 反応傾向はつぎの 15 項目の陳述に対する自己評定（6 段階）によって求めた。

- ① 投票するまえに、すべての候補者に関することを十分調べる。
- ② 困っている人を助けるのに決してちゅうちよししない。
- ③ 誰かをひどく嫌うようなことは決してない。
- ④ 自分の思いどおりにいかないとき腹立たし



- く思う。
- ⑤ ときどき噂話をすることをお好む。
  - ⑥ 言うことと行うことはいつも一致している。
  - ⑦ 自分とひどく異なった考えを他人から出されても、いやな思いをしたことがない。
  - ⑧ 誰かを叱りつけたい衝動に駆られることはほとんどない。
  - ⑨ その日のうちにすべきことを翌日にのばすことがよくある。
  - ⑩ 変ることのない強い信念をもっている。
  - ⑪ ときどき口に出して言えないような良くないことを考える。
  - ⑫ めったに感情を害さない方である。
  - ⑬ 周りの人々の習慣に左右されていることが多い。
  - ⑭ 非常に嫌いな人達が何かをしでかしたり、叱られたり、罰を受けたりすると、内心ではいい気味だと思ふ。
  - ⑮ 冷静でめったにあわてない。

この測定尺度の作成過程を略記しておく。  
まず、Crowne & Marlowe (1964) の SD 尺度 (33  
項目) と根本 (1971) の尺度 (28 項目) から、  
51 項目の暫定尺度を作成し、本研究の被験者  
142 名に、下記の観点からの評定を求めた。①  
自己評定 (6 段階) … それぞれの項目に記述  
された行動内容が自分に該当する程度、② 社  
会的望ましさの評定 (7 段階) … 記述された  
行動に対して、自分と同世代の人々が社会的  
に望ましいと考えていると思う程度、③ 該当  
人数割合の評定 (7 段階) … 記述された行動  
が、自分と同世代の人々に該当すると思う割  
合の推定。

社会的望ましさの評定結果と該当する人数  
割合の推定結果とを組み合わせると、「社会的に  
望ましい行動であるが大部分の人に該当しな  
い」と判断された 9 項目と、「社会的に望ま  
しくない行動であるが大部分の人に該当する  
」と判断された 6 項目がさきに示した 15 項目  
である。

測定尺度として採用された15項目について、尺度としての信頼性と妥当性の検討を行った。まず、142名の自己評定結果について得点の正規性を検討し、正規分布への適合度の高いことが確認された ( $\chi^2 = 0.33$ ,  $df = 6$ ,  $ns$ )。また、Kuder-Richardson公式20による信頼性係数は  $r = .806$  であった。さらに、自己評定得点の  $\bar{x} \pm 0.6SD$  を基準に、SD反応傾向上位群 ( $N = 27$ ) と下位群 ( $N = 33$ ) を抽出し、項目分析を行った結果、15項目のすべてにおいて期待される方向での有意差が示された。SD反応傾向得点が大(上位)ということは、社会的に望ましい行動であるが大部分の人に該当しない項目に「自分は該当する」と反応し、同時に、社会的に望ましくない行動であるが大部分の人に該当する項目に「自分は該当しない」と反応したことを示している。妥当性の検討のために実施したCPI (California psychological inventory) との相関結果では、SD反応傾向は、自己顕示性 (good impression) と  $r = .59$

、自己統制力 (self-control) と  $r=.44$ 、幸福感 (sense of well being) と  $r=.41$ 、責任感 (responsibility) と  $r=.37$ 、などの有意な関係が示された。

パーソナリティ認知の測定：測定尺度には、青木 (1971a, 1971b, 1972) と長島・藤原・原野・青藤・堀 (1967) の研究結果を参考に、社会的望ましさの方向が明確であるように配慮した両極性形容詞 20 対 (7 段階評定) を用いた。この測定尺度に関して、現実自己 ( $S \rightarrow s'$ )、理想自己 ( $S \rightarrow Is'$ )、 $S \rightarrow s'$  についての満足度 (4 段階評定)、同性の好きな友人と嫌いな友人についての  $S \rightarrow O'$  および  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  を測定した。

測度： $S \rightarrow s'$ 、 $S \rightarrow Is'$  および  $S \rightarrow s'$  の満足度については、20 項目に対する平均評定値を求めた。 $S \rightarrow s'$  と  $S \rightarrow Is'$  の類似度、好きな友人と嫌いな友人についての自己一致性および想定類似性の程度は D スコアで求めた。

#### (b). 結果

表 44 は、SD 反応傾向上位群 ( $N=27$ ) と下位群 ( $N=33$ ) に中位群 ( $N=29$ ) を加えた 3 群別に、パーソナリティ認知の各測度を整理した結果である。また、その値に関して分散分析し、さらにその下位検定を行った結果を表 44 の右端に示した。

表 44 から明らかのように、SD 反応傾向とパーソナリティ認知の諸過程との関係には、かなり一貫した傾向が認められた。自己評定の三つの過程のうち、理想とする自己に関しては SD 反応傾向との対応関係は認められなかった。しかし、現実の  $S \rightarrow s'$  と、それに対する満足度において、SD 反応傾向の高い個人の方が低い個人よりも、その程度を高く評定していた。また、D スコアで表現された  $S \rightarrow s'$  と  $S \rightarrow Is'$  の一致度では、SD 反応傾向上位群と中位群の方が下位群よりも、両認知内容の一致度を大きく認知していた。自己一貫性と想定類似性についても同様の傾向が示された。すなわち、両測度とも、これまでの研究結果

表 44. 社会的望ましへの反応傾向別にかたハローソナリテ認知過程分析

測 度	側 面	社会的望ましへの反応傾向			検 定
		高位群 (N=27)	中位群 (N=29)	低位群 (N=33)	
自 己 認 知	理想自己	4.67 (.52)	4.30 (.51)	3.92 (.50)	15.79** H>M>L
	満足度	2.77 (.35)	2.55 (.37)	2.38 (.46)	6.99** H>M=L
	理想自己	6.04 (.47)	5.84 (.38)	5.94 (.51)	1.31
理想自己と理想自己のずれ (Dスコア)		8.45(2.34)	9.06(2.39)	11.58(3.37)	10.17** H=M<L
自己-致性 (Dスコア)	好き	4.57(1.90)	4.35(1.65)	5.58(2.02)	S: 4.99** H=M<L
	嫌い	5.30(1.63)	5.17(1.68)	6.58(2.38)	P:28.04**
想定類似性 (Dスコア)	好き	7.68(2.56)	7.53(2.40)	10.12(2.79)	S: 9.98** H=M<L
	嫌い	9.63(2.58)	8.65(2.42)	11.01(2.95)	P:19.21**

(注) 検定種類の S は社会的望ましへの反応傾向、P は好感感情を示す。また「>」は下位検定において有意差の認められた方向、「=」は有意差が認められなかったことを示す。  
\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

と同様に、相手に対する好悪感情による有意な差が認められた。同時に、SD 反応傾向上位群と中位群の方が下位群よりもその一致度を高く認知する傾向が有意であった。

### (C). 考察

本研究の結果は、認知者の SD 反応傾向のちがいによって、自己および他者に関するパーソナリティ認知の過程が異なることを示すものであった。

ところで、本研究では、Crowne & Marlowe (1960, 1964) の研究によつて、認知者の社会的承認欲求が SD 反応傾向によつて示されると仮定した。しかし、結果に示された SD 反応傾向と  $S \rightarrow s'$  の関係から考えると、上の仮定が必ずしも妥当なものではなかったのではないかという疑問が生じてくる。

Edwards, Diers, & Walker (1962) の研究では、Crowne-Marlowe の SD 尺度も含めた 61 尺度について、大学生から得られたデータが因子分析されている。そして、抽出された三つの

因子のうち、Crowne-MarloweのSD尺度が高く負荷した因子は、その因子に負荷した他の諸尺度との関連から、偽装傾向 (tendency to falsify answers) の反映として解釈されている。Crowne-MarloweのSD尺度で測定された得点傾向が社会的承認欲求の測定として考えられるのは、「たとえ大部分の人々の行動傾向と合致しなくても、社会的に望ましい方向で行動しようとする傾向」の背後に、偽装的態度の存在が仮定されるからであると思われる。しかしながら、そうした仮定が適切であるか否かは本研究で得られた資料からは判断できない。すなわち、Crowne-MarloweのSD尺度や本研究で使用した測定尺度では、そこに測定された傾向が、あらかじめ仮定されたような偽装的態度に基づく承認欲求の反映なのか、あるいは、真に認知者の自己評定の表明なのかを区別できない。結果において、パーソナリティの自己認知 ( $S \rightarrow S'$ ) とSD反応傾向の方向性が同じであったことから判断すれば



、前者よりもむしろ後者の解釈が妥当であつた可能性が高いと思われる。

自尊理論の立場には、自尊心もしくは自己評価の低い者は他者による承認を求めらる欲求傾向の強いことが想定されてゐる。かりに、本研究で得られたSD反応傾向が承認欲求の反映であるとするれば、結果に示された $S \rightarrow S'$ の得点傾向とSD反応傾向の関係は、自尊理論から予測される立場とまったく相反するものである。このことについては、さきに考察したようなSD反応傾向そのものの問題点も関連してゐると思われる。同時に、自己評価と承認欲求との関係についての前提も疑問視される。たんに前提とするだけでなく、適切な承認欲求測定尺度が開発されて、自己評価との関係性が明確に吟味される必要がある。以上のような理論上の前提にかかわる問題とは別に、本研究で測定した $S \rightarrow S'$ と $S \rightarrow Is'$ の一致度は、従来の研究の中でしばしば自尊心の高低を示す測度として用いられてきてゐる

測度である (Kajita, 1968)。本研究の結果からみると、この測度とパーソナリティの自己一致性および想定類似性との間に強い関係のあることが予想できる。Kajita (1968) の結果でも、これらの測度間に強い関係が示されている。パーソナリティ認知の過程において、個人差要因としての自尊心の影響を検討しようとする場合の一つの可能性が示唆されたと解される。

### 3. 自己一致性生起過程の類型的差異と社会的動機づけ

#### (1) 問題の設定

本論文の第3章では自己一致性の生起機制について検討を行った。その際、この過程の生起機制については、投射的一致機制あるいは投入的一致機制が一般的に存在するかどうかを問題にするよりも、むしろ、個人の側に、投射的一致機制による個人と投入的一致機

制による個人などの個人差が存在するという  
観点から理解することが適切ではないかとの  
考え方を示した。たしかに、自己一致性を個  
人の対人的適応過程の中で理解しようという  
立場からすれば、その生起機制も個人を単位  
として考えることが妥当であろう。

本研究では、投射的機制による一致過程を  
たどる型の個人と投入的機制による一致過程  
をたどる型の個人の存在を想定する。そして  
、こうした自己一致性生起過程の類型的差異  
を、社会的動機づけ (social motivation) の側  
面から究明することを検討課題とする。

まず、自己一致性の生起過程を類型化する  
ことについて検討する。第3章の研究7-aで  
は投射的一致機制についての実験的検討、研  
究7-bでは投入的一致機制についての実験的  
検討を行った。もしも研究7-aで用いた実験  
手続と研究7-bで用いた実験手続が同一の被  
験者に対して施されるならば、その結果を分  
析することによって、自己一致性の生起過程

の類型化が可能になると思われる。説明を簡単にするため、 $S \rightarrow s'$  順位あるいは  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位に関する情報による実験的操作を順位づけでの上昇操作に限って考えれば、類型化のモデルは表 45 のように表すことができる。

表 45 .. 自己一致性の生起過程に関する類型化のモデル

類 型	投射的一致過程		投入的一致過程	
	$S \rightarrow s'$ 順位に誘導された変動	$S \leftarrow (O \rightarrow s')$ 順位での結果としての変動	$S \leftarrow (O \rightarrow s')$ 順位に誘導された変動	$S \rightarrow s'$ 順位での結果としての変動
類型 1 (PI)	+	+	+	+
類型 2 (I)	+	-	+	+
類型 3 (P)	+	+	+	-
類型 4 (N)	+	-	+	-

(注) 「+」は順位づけにおける上昇変動、「-」は変動なしあるいは下降変動を示す。

表 45 に関していえば、類型 1 は投射的方向でも投入的方向でも自己一致性を生起する型 (projective - introjective congruency type : PI 型)、類型 2 は、投入的方向でなら自己一致性が生起するが、投射的方向では生起しない型 (introjective congruency type : I 型)、類型 3 は、逆に投射的方向でなら生起するが、投入

的方向では生起しない型 (projective congruency type : P型)、そして類型4は、いずれの方向でも自己一致性を生起しない型 (non-congruency type : N型)である。

PI型, I型, P型に類型化される個人については、たとえそれぞれの機制が異なるにしても、他者とのかかわり合いの中で、安定した対人的状態を得ようとして自己一致性を成立させる個人であると理解するならば、そこに社会的動機の一つである親和動機 (affiliation motivation) との関連を予想することができると (Murray, 1938 ; Schachter, 1959)。さらにこの場合、投射型 (P型) の個人と投入型 (I型) の個人については、その機制の特徴からつきのように期待できる。すなわち、前者は、他者とのかかわり合いの中で自己を際立たせようとする型の個人であり、後者は、他者とのかかわり合いの中に自己を埋没ないし融合させようとする型の個人であろう。

そこで本研究では、自己一致性の生起機制

に關して個人を類型化し、その類型的差異を親和動機や基本的対人関係志向性を含む社会的動機づけの側面から究明する。

## (2). 研究 11-a

### (a). 方法

被験者：この実験に参加した被験者は、呉市立警固屋中学校1年生2学級の男女60名である。

測定：パーソナリティ認知、親和動機、基本的対人関係志向性の三つの測定を、後述する実験操作の中で実施した。①パーソナリティ認知の測定…与えられた10個のパーソナリティ特性に關して該当すると思う順に順位づける仕方で、 $S \rightarrow s'$ 、 $S \rightarrow o'$ 、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$ を求めた。その際、他者(O)は同性集団内で最も好きな友人とした。②親和動機の測定(TAT方式)…TAT日本版カードのうち、No.2(汽車の中の少年)、No.4(お人形をもつ少女)、No.7(公園の風景)、No.10(年寄りと若者の顔)の4枚

を選び、そのおのおののカードについて、(i) いまどんなことが起っているのか、この人たちは誰なのか、(ii) この話のまえにはどんなことがあったのか、(iii) 誰がどんなことを考え、どんなことを望んでいるか、(iv) このあとでどんなことが起こるか、の観点から物語りを作成させた。③ 基本的対人関係志向性テスト (

FIRO-B) … Schutz (1958) の FIRO-B (Fundamental interpersonal relationships orientation-behavior) を中学生用に表現を修正した54問について「はい」「いいえ」の二件法で反応させた。

以上の測定のうち、S→O'順位づけは実験操作のためにだけ求めたもので、分析資料としては用いていない。なお、使用したパーソナリティ特性は、意志の強い・情熱的・活発ななどの10個であり、塗師(1969)の対人形容語構造を参考に構成した。いずれも価値的に正の属性である。

実験操作手続：同じ被験者が、投射的一致方向と投入的一致方向の双方またはいずれか

の一致過程をとり得るような実験事態を設定した。被験者を学級単位で2群（A群とB群）に分け、操作手続の上でカウンターバランスをとるように配慮した。A群とB群は、つぎに述べる第1操作と第2操作の実施順序が時間的に逆転しているだけであり、それ以外の操作内容は同じであった。以下、A群について、実験操作手続の手順を述べる。

① 第1操作前測定 … (i)  $S \rightarrow s'$  順位づけ、(ii)  $S \rightarrow o'$  順位づけ、(iii)  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位づけ、(iv) FIRO-Bテスト。

② 第1操作（ $S \rightarrow s'$  順位の操作）… この操作は、第1操作前測定を行った1週間後に実施した。まず、被験者ごとに、第1操作前測定の $S \rightarrow s'$  順位で第9位に順位づけられた特性を抽出し、上昇操作特性とした。つぎに、以下に記すような実験的教示に基づきその被験者のパーソナリティ（ $s'$ ）に関する偽りの情報を与え、それによって被験者の $S \rightarrow s'$  順位を変動させた。実験的情報では、上昇操作特性のみを



S→S' 順位の第2位へ上昇変動させ、他は操作前の S→S' 順位と相対的に同じとした。なお、操作した特性の位置を S→S' 順位の第1位とせよ第2位としたのは、情報の極端さによって実験操作が被験者に見破られる危険を避けたためである。

実験的情報を与えるための教示はおおむねつぎのとおりであった。

「自分の性格を客観的に知ることは、あなたが健全な人間関係を保つためにきわめて重要なことです。あなたはどのくらい自分のことを正しく理解しているのでしょうか。先日実施した FIRO-B 性格テストをもとに科学的に分析した結果、あなたの性格は、つぎのようであることがわかりました。」

1) 意志の強い. 2) ひかえめな …… 9) 融通がきく. 10) 冷静な

以上の教示は、被験者ごとに、情報を記入した用紙を配布し、さらに口頭で説明するこ

とにより行った。なお、統制特性として第1操作前の  $S \rightarrow s'$  順位第8位の特性をとった。

③ 第1操作後測定（第2操作前測定）… 第1操作の4エックと結果の分析、さらに第2操作のために、第1操作にひき続きつぎの測定を実施した。(i) TAT (カード No. 2)、(ii)  $S \rightarrow s'$  順位づけ、(iii) TAT (カード No. 4)、(iv)  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位づけ、(v)  $S \rightarrow o'$  順位づけ。

④ 第2操作（ $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位の操作）… この操作は、第2操作前測定を行った1週間後に実施した。まず、被験者ごとに、第2操作前測定の  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位で第9位に順位づけられた特性を抽出し、これを上昇操作特性とした。つぎに、以下に記すような教示に基づいて、被験者の最も好きな友人がその被験者に対して行ったパーソナリティ評定（ $O \rightarrow s'$ ）に関する偽りの情報を与えて、被験者の  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位を変動させた。実験的情報では、上昇操作特性のみを  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位の第2位へ上昇変動させ、他は操作前の  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位と相対的に同

じとした。

実験的情報を与えるための教示はおおむねつぎのとおりであった。

「自分の性格を他の人がどのようにみているかを知ることは、あなたが健全な人間関係を保つためにきわめて重要なことです。あなたはどのくらい他の人の気持を推測できるでしょうか。先日実施したテストの結果、『O』さんはあなたのことを、つぎのような性格だとみていました。」

1) 意志の強い 2) ひかめめな …… 9) 融通がきく 10) 冷静な

以上の教示の与え方は第1操作の場合と同様であった。なお、第2操作前のS-(O→s')順位で第8位の特性を統制特性とした。

⑤ 第2操作後測定…第2操作のチェックと結果の分析のため、第2操作にひき続いてつぎの測定を行った。(i) TAT (カード No. 7)、(ii) S-(O→s')順位づけ、(iii) TAT (カード No. 10)。

(iv)  $S \rightarrow s'$  順位づけ、(v)  $S \rightarrow o'$  順位づけ。

B 群についての実験操作は、① → ④ → ⑤ → ② → ③ の手順で行った。なお、被験者の最も好きな友人 (O) の氏名は、第 1 操作前測定に基づいて、実験者により被験者ごとの測定用紙にあらかじめ記入されていた。

実験が行われたのは学級が編成された 6 か月後であった。

#### (b) 結果

まず、実験操作の検討を個々の被験者単位で行った。

統制特性における実験操作前後の順位が変動せず、しかも、 $S \rightarrow s'$  順位の操作と  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位の操作において操作された特性がともに期待された方向に上昇変動を示した被験者を「成功群」、 $S \rightarrow s'$  順位または  $S \rightarrow (O \rightarrow s')$  順位のいずれか一方のみに期待された変動が示された被験者を「一部成功群」、いずれの順位づけでも期待されたような変動を示さなかった被験者を「不成功群」として整理したのが表

46 である。この場合、 $S \rightarrow S'$  順位および  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位での変動基準は、操作後測定におけるその特性の順位が、操作前の順位より 2 段階以上の変動を示すものとした。その理由は、操作された上昇操作特性の順位が上昇方向に変動する場合、実験操作が加えられなかった統制特性の順位に変動がなくても、操作特性の順位変動に伴って、少なくとも 1 段階の順位変動が間接的に起る可能性があったからである。

表 46. 実験操作の検討

被験者	実験操作			計	検定
	成功	一部成功	不成功		
A 群	17	8	5	30	$\chi^2=7.80$ $df=2$ $p<.02$
B 群	24	5	1	30	$\chi^2=30.20$ $df=2$ $p<.01$
全体	41	13	6	60	$\chi^2=34.30$ $df=2$ $p<.01$

表 46 より、実験操作手続の上で  $S \rightarrow S'$  順位の操作と  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  順位の操作のいづれを手順的に先行させても、そのことにかかわらず、A 群と B 群ともに実験操作は成功していった。

とがわかる。

そこで、実験操作が成功していた A 群 17 名と B 群 24 名の合計 41 名について、操作特性に関する  $S \rightarrow s'$  順位の上昇変動に伴う  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位の変動、および  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  順位の上昇変動に伴う  $S \rightarrow s'$  順位の変動分析を行った。なお、変動分析は表 45 に示したモデルに従って行った。

その結果、41 名の被験者は、自己一致性の生起機制に関してつぎの四つの類型に分けられた。すなわち、類型 1 (PI 型) 17 名、類型 2 (I 型) 8 名、類型 3 (P 型) 10 名、類型 4 (N 型) 6 名、である。類型 1 から類型 3 までは分類された被験者は、一致機制のちがいを示したにせよ自己一致性を生起させたわけであり、すでに述べた研究 7-a と 7-b の結果をあわせて考えると、自己一致性を認知する過程が一般的に存在することを伺わせるものである。

つぎに、こうして得られた四つの類型群の差異を親和動機に関して検討した。その際、

TAT方式による親和動機傾向の測定結果は、Atkinson, Heyns, & Veroff (1954)の判定基準によつて、四つの物語りの個々について、親和動機にかかわりのある内容の出現度数の側面から分析した(一つの物語りについての得点可能範囲は0点~7点、したがつて全体では0点~28点の得点を与えられた。41名の被験者の親和動機得点に対する評定者2名の一致度は $r=.78$ 、 $p<.001$ であつた)。

親和動機得点に応じて、41名の被験者を、高位群( $N=14$ )、中位群( $N=14$ )、低位群( $N=13$ )

表 47. 四つの類型別に於て親和動機得点

類型	親和動機			計
	高位	中位	低位	
類型 1 (PI)	9	6	2	17
類型 2 (I)	4	3	1	8
類型 3 (P)	0	4	6	10
類型 4 (N)	1	1	4	6
計	14	14	13	41

類型 1 対 類型 4 :  $p=.0012$   
 類型 2 対 類型 3 :  $p=.0350$   
 類型 1 対 類型 3 :  $p=.0042$

(直接確率計算による検定)

) に三分し、四つの類型との対応を示したのが表47である。

分析対象とされた被験者数が少ないため、結果についてこの言及に若干の制約は残る。しかし、表47に示された親和動機傾向に関するPI型とN型の間の相違について、つぎのよう  
 に考えることができる。すなわち、PI型の個人は、投射的一致方向と投入的一致方向のい  
 おれもの一致過程をたどって、他者とのかか  
 わり合いの中で認知的に安定した関係を得よ  
 うとして  $S \rightarrow S'$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  の一致の状態を求め  
 る型の個人である。また、N型の個人は、い  
 おれの方角においても一致の状態を求めない  
 型の個人である。このことを考えれば、表47  
 の結果は、自己一致性の生起機制に基づく類  
 型間のちがいが、社会的動機の一つである親  
 和動機の側面より説明できることを示唆する  
 ものである。しかしながら、表47についてさ  
 らに詳細に検討すると、PI型とP型、I型と  
 P型との間に親和動機傾向に関する有意差が



認められている。この結果は、自己一致性を生起させるという意味でこれらの類型がいずれも親和動機傾向において強いと予想されたことと合致しない。I型、すなわち投入的一致過程をたどる型の個人と、P型、すなわち投射的一致過程をたどる型の個人との間には、たんに親和動機傾向の強弱だけでは説明できない別の要因による相違が存在するのかもしれない。この点はさらに検討する必要があると思われる。

分類された四つの類型と FIRO-B テストで測定した基本的対人関係志向性との関係を示した結果が表48である。FIRO-B テストでは、情愛 (affection) ・ 包括 (inclusion) ・ 統制 (control) の三つの次元に関して、それぞれ能動的側面 (expressed behavior) と受動的側面 (wanted behavior) の二つの側面から、個人の対人関係志向にかかわる基本的欲求が測定される (Schutz, 1958)。

表48の数値に関して、それぞれの次元ごと

表 48 . 四つの類型と基本的対人関係志向性得点

類型	人数	基本的対人関係志向性の次元					
		情 變		包 括		統 制	
		能動的 側面	受動的 側面	能動的 側面	受動的 側面	能動的 側面	受動的 側面
類型 1 (PI)	17	7.00 (1.97)	6.18 (2.41)	4.82 (1.85)	4.71 (3.19)	2.76 (1.31)	1.82 (2.43)
類型 2 (I)	8	7.38 (2.23)	6.25 (2.63)	4.88 (1.54)	7.75 (1.56)	2.75 (1.79)	1.63 (2.12)
類型 3 (P)	10	8.10 (0.94)	7.10 (1.92)	5.00 (1.10)	6.00 (2.56)	4.20 (0.98)	2.20 (1.83)
類型 4 (N)	6	7.67 (1.60)	7.83 (2.19)	4.50 (1.71)	4.83 (2.11)	3.00 (2.45)	1.50 (1.71)

(注) 表の数値は平均値, ( ) 内は標準偏差.

に、類型 (4) × 側面 (2) の分散分析を行った。その結果、三つの対人関係志向性のいずれにおいても類型間の主効果は有意ではなかった (情變:  $F=1.33$ ,  $df=3/37$ ,  $ns$ ; 包括:  $F=1.50$ ,  $df=3/37$ ,  $ns$ ; 統制:  $F=1.56$ ,  $df=3/37$ ,  $ns$ )。しかし、側面間の主効果にはいずれも有意差もしくは有意な傾向が認められた (情變:  $F=3.12$ ,  $df=1/37$ ,  $p<.10$ ; 包括:  $F=3.56$ ,  $df=1/37$ ,  $p<.10$ ; 統制:  $F=7.29$ ,  $df=1/37$ ,  $p<.05$ )。また、包括次元では、類型 × 側面の交互作用に有意な傾向が認めら

れた ( $F=2.26$ ,  $df=3/37$ ,  $p<.10$ )。

包括次元の有意な交互作用に関して下位検定を行った結果、真の差は類型2 (I型) において認められた。すなわち、I型に類型化された個人は、対人関係において他者を能動的に包括するよりも、むしろ他者によって受動的に包括されたいという欲求志向をもつことが示された。また、副次的に試みた統制次元での下位検定では、類型3 (P型) に分類された個人に、他者から受動的に支配・統制されるよりもむしろ他者を能動的に支配・統制したいという欲求志向をもつことが示された。

以上の結果は、実験的に分類された自己一致性の生起機制に基づく四つの類型に関して、TAT方式で測定した親和動機とFIRO-Bテストで測定した基本的対人関係志向性の二つの側面からその類型差を検討したものである。得られた結果は、全体的には、四つの類型間に、他者とのかかわり方に関係した社会的

動機づけにおける差異が存在することを示すものであつたが、一つ一つの類型を明確に特徴づけて説明するには未だ十分なものではなかつた。

そこで、さらに、そうした類型差を社会的動機づけの側面から特徴づけるため、つぎの研究11-bを計画した。研究11-bを行うに際して、類型化のための方法を調査的に実施すること、その際、ある程度の被験者数を確保すること、そして社会的動機づけの各側面の意味が明確であることの三点に配慮した。

### (3) 研究 11-b

#### (a) 方法

被験者：この研究の被験者になつたのは、広島女子大学の学生 134名である。

社会的動機づけの測定：被験者の社会的動機づけは、大学・一般用日本版 EPPS (

Edwards personal preference schedule : 肥田野・岩原・岩脇・杉村・福原, 1970) により、達

成・追従・秩序・顕示・自律・親和・他者認知・求護・支配・内罰・養護・変化・持久・異性愛・攻撃、の15動機側面にわたって測定した。

類型化の手続：パーソナリティの自己一致性生起機制に基づいて被験者を類型化するため、30名～40名の単位に被験者を分け、つぎの二つのパーソナリティ認知評定を行った。

① 認知評定A（投射的一致過程の検討）…被験者の $S \rightarrow S'$ の内容を仮想的に変動させ、それに伴う $S \rightarrow (O \rightarrow S')$ の内容の変動を評定させた。  $S \rightarrow S'$ に変動を想定させるための教示はおおむねつぎのとおりであった。

「人には、それぞれ自分なりに画いている自分のイメージがあります。そのイメージは、科学的・客観的にみて、非常に正しい場合もあれば、案外そうでない場合もあります。

とこ力で、いま、あなた自身が画いていたあなたのイメージが、科学的な測定をヒ

おして示されたあなた自身と、くい違ったものであったことに気づいたとします。

そのとき、あなたの好きな友人は、あなたをどのようにみていると思いますか。」

② 認知評定 B ( 投入的一致過程の検討 ) …

被験者の  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  の内容を仮想的に変動させ、それに伴う  $S \rightarrow S'$  の内容の変動を評定させた。  $S \rightarrow (O \rightarrow S')$  に変動を想定させるための教示はおおむねつぎのとおりであった。

「人には、それかれ自分が他の人からどのようにみられているかについてのイメージがあります。そのイメージは、その人が実際にみているあなたと非常に一致している場合もあれば、案外そうでない場合もあります。

ところで、いま、あなたの好きな友人について、あなたがその友人からみられていると予想しているイメージとは異なるイメージをあなたに対してもつていたことに気

づいたとします。

そのとき、あなたは、あなた自身をどう思うでしょうか。」

以上の教示は、その趣旨を記した用紙を配布し、さらに口頭で説明することにより行った。判断の対象とした他者は、認知評定 A でも認知評定 B でも、被験者の最も好きな同性の友人についてである。認知評定 A での評定は、 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の内容を「 $S \rightarrow S'$  の仮想的変動以前の内容に近い」と認知するか、あるいは「仮想した変動方向に近い」と認知するかについて求めた。認知評定 B では、 $S \rightarrow S'$  の内容を「 $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の仮想的変動以前の内容に近い」と認知するか、あるいは「仮想した変動方向に近い」と認知するかについて求めた。どちらの場合も、評定は 5 段階で行った。

#### (b). 結果

類型化のためのパーソナリティ認知評定の結果に基づき、PI 型 17 名・I 型 26 名・P 型 30 名

・ N型 35名を分類し、分析の対象とした。この場合、PI型は、認知評定 A で  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の内容を  $S \rightarrow S'$  の仮想した変動方向に近いと認知し、さらに認知評定 B で  $S \rightarrow S'$  の内容を  $S \leftarrow (O \rightarrow S')$  の仮想した変動方向に近いと認知した被験者である。また、I型は、認知評定 B においてのみ、P型は、認知評定 A においてのみ、それぞれ従属する変数の認知内容を実験的に想定した変数の変動方向に近いと認知した被験者である。なお、N型は、認知評定 A でも認知評定 B でも、従属する変数の認知内容が実験的に仮想した変数の変動方向に近づくという認知を示さなかった被験者である。類型化に際して、認知評定 A か認知評定 B のどちらかで、評定値 3 「どちらともいえない」の反応を示した被験者 26名は、類型を厳密にするため除外された。

さて、EPPS の測定結果を、15側面にわたる社会的動機づけ反応がより特徴的なかたちにまとまることを期待して主軸法により因子



分析し、さらにバリマックス回転を行って単純構造を求めた。表49に示したのがその結果である。

表49. EPPS 15側面についてのバリマックス回転後因子行列(N=134)

側面	因子						共通性
	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	F <sub>3</sub>	F <sub>4</sub>	F <sub>5</sub>	F <sub>6</sub>	
自律	.581	-.173	.158	-.492	.169	-.269	.7352
攻撃	.573	-.410	-.081	.082	-.169	.057	.5414
親和	-.854	-.135	-.134	.034	.089	-.022	.7754
養護	-.718	.063	-.008	.148	-.011	-.124	.5596
従順	.156	.772	.060	.195	-.150	-.153	.7083
秩序	.041	.682	.221	-.119	-.001	.436	.7199
抑圧	-.337	.463	.030	.316	.116	-.080	.4491
顕示	.070	-.581	-.098	-.062	-.382	.278	.5793
持久	.001	.106	.831	.056	.158	.049	.7324
達成	.337	.026	.692	-.025	.012	.150	.6163
異性愛	.280	-.226	-.608	.003	.410	.338	.7811
求護	-.210	.178	-.338	.597	.328	.002	.6535
変化	.023	-.281	-.208	-.824	.125	.112	.8294
支配	.051	-.065	-.073	-.009	-.894	-.033	.8124
他者認知	-.078	.120	-.054	.042	-.003	-.889	.8161
寄与率	15.333	13.510	12.117	9.788	9.082	8.881	.6871

そこで、さきに分類した自己一致性の生起機制に関する類型別に社会的動機づけ得点を整理して表50に示す結果を得た。表51はそれを分散分析によって検討した結果である。

表50の因子別社会的動機づけ得点は、それからの因子に高く負荷したEPPSの諸側面をまとめたものである。たとえば第1因子(F<sub>1</sub>)に

おける得点は、被験者の自律・攻撃・非親和・非養護の得点（偏差値）を平均して得たものである。

表 51 から、動機側面の主効果と、類型 × 動機側面の交互作用に有意な傾向が認められた。

表 50. 四つの類型別にみた 因子側面ごとの社会的動様づけ得点

類型	人数	因子側面					
		F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	F <sub>3</sub>	F <sub>4</sub>	F <sub>5</sub>	F <sub>6</sub>
PI	17	50.14 (5.47)	50.88 (4.41)	48.59 (6.44)	52.97 (4.37)	53.24 (10.63)	46.06 (9.58)
I	26	45.99 (6.32)	52.25 (6.88)	46.50 (8.02)	53.96 (6.81)	51.46 (11.52)	50.92 (12.68)
P	30	48.74 (7.31)	50.54 (5.76)	45.97 (6.57)	50.13 (7.85)	53.67 (8.10)	51.60 (11.01)
N	35	50.35 (7.27)	48.21 (7.52)	46.69 (7.03)	49.21 (7.48)	50.14 (11.90)	51.26 (10.76)

(注) 表の数値は平均標準得点、( )内は標準偏差。

表 51. 社会的動様づけ得点(表50)の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
被験者間	8226.53	107		
類型 (A)	110.27	3	36.76	<1
誤差	8116.26	104	78.04	
被験者内	41339.43	540		
動機側面 (B)	1872.78	5	374.56	5.14 **
A × B	1602.66	15	106.84	1.47 *
誤差	37863.99	520	72.82	
全 体	49565.96	647		

\*\* $p < .01$

\* $p = .10$

類型ごとの下位検定の結果、N型以外のすべての類型で動機側面の差が有意であった（PI型： $F=2.25$ ， $df=5/80$ ， $p<.10$ ；I型： $F=2.98$ ， $df=5/125$ ， $p<.05$ ；P型： $F=3.25$ ， $df=5/145$ ， $p<.01$ ）。また、因子別の下位検定の結果、攻撃動機で代表される $F_1$ と求護動機で代表される $F_4$ で類型間に有意差が認められた（ $F_1$ の場合： $F=2.22$ ， $df=3/104$ ， $p<.10$ ； $F_4$ の場合： $F=2.76$ ， $df=3/104$ ， $p<.05$ ）。

以上の結果から、PI型は求護動機と支配動機において高く、I型は求護動機が高く、攻撃動機が低い、さらにP型は支配動機において高い傾向をもつことが明らかになった。

#### (4) 考察

本研究の検討課題は、自己一致性の生起過程にみられる個人差を典型的にとらえ、その類型間の差異を社会的動機づけの側面から解明することであった。研究11-aでは、実験的に分類した四つの類型間の差異について、

TAT方式で測定した親和動機傾向と、FIRO-Bテストで測定した基本的対人関係志向性の側面から検討を行った。また研究11-bでは、調査的に分類した類型間の差異を、EPPSで測定した種々の社会的動機づけの側面から検討した。二つの研究で得られた結果をあわせると、自己一致性の生起機制に対応した個人差要因がかなりの程度まで明確化していることがわかる。

四つの類型のうち、I型の個人は、親和動機傾向が高く、対人的に他者に包括されたいという欲求志向を示した。この型の個人は、受動的に他者からの愛情や同情を求め、求護動機傾向が顕著であるという点を特徴的である。また、P型の個人は、他者を支配・統制するという支配動機傾向が高いという特徴を示した。PI型の個人の場合、P型の特徴である支配動機とI型の特徴である求護動機がともに顕著であるという動機傾向を示した。N型の個人の場合、統計的にはとくに有意な特

徴は認められなかったが、他の類型に比較し  
て、親和的でなく、内罰傾向の低いことを示  
唆する結果が示された(表50)。当初予想さ  
れたように、投射的機制による一致過程をた  
どるP型の個人は、他者とのかかわり合いの  
中で自己を際立たせようとする型の個人であ  
り、投入的機制による一致過程をたどるI型  
の個人は、他者とのかかわり合いの中に自己  
を埋没ないし融合させようとする型の個人で  
あることが、社会的動機づけの面から確認さ  
れたといえよう。

しかしながら、本研究の結果に示された類  
型差は、上述したような特徴を示したとはい  
え、必ずしも十分なものではなかった。とく  
にEPPSへの反応結果については、そこで測  
定される種々の社会的動機側面が、他者との  
かかわり合いの中で自己を強調する動機的側  
面と、逆に他者を強調する動機的側面の二つ  
に大別されることを期待した。因子分析の結  
果から、 $F_1$ と $F_3$ と $F_5$ が前者の側面に該当し、

F<sub>2</sub> と F<sub>4</sub> と F<sub>6</sub> が後者の側面に該当する動機内容であることが伺われた。しかし、そこに示された類型との対応関係は、部分的には意味ある傾向を示しつつも、必ずしも明確なものとはいえないものであった。この問題に関連して、本研究では、さらに TAT 方式による親和動機傾向と FIRO-B テストによる基本的対人関係志向性の面からの検討をも行った。多様な社会的動機づけの諸側面から、パーソナリティ認知過程に深くかかわってくる特定の動機的側面をいかに適切にとり出すかの検討が、さらに必要であろう。

最後に、本研究で用いた方法について言及しておこう。研究 11-a では、自己一致性の生起過程に関する類型化が実験的に行われ、研究 11-b では調査的に行われた。すでに考察したように、二つの異なった方法で分類された類型間には、社会的動機づけとの対応関係においてかなりの類似傾向を認めることができた。このことは、社会的動機づけの差異からと

らえられる個人差要因が、かなり一般的な要因として機能していることを示すものと考えられる。

#### 4. 類型差の一般性の検討

##### (1) 問題の設定

これまでの検討で、自己一致性の生起過程を中心としたパーソナリティ認知に影響する個人差要因が明確にされてきた。こうして個人差について、パーソナリティ認知という問題領域だけに限定されず、それとまったく次元の異なる問題領域にもその機能が一般化される要因であることがわかれば、人間理解にとってきわめて有意義なことであると思われる。

そこで、本研究では、自己一致性の生起過程にみられる類型的差異を、対人的事態とは異なった知覚判断事態における“場依存性-独立性 (field dependency - independency)”に関して検討する。それによって、類型差にみ

られる個人差要因の一般性について吟味することとを検討課題とする。

ところで、場依存性 - 独立性の概念は、

Witkin と彼の共同研究者によって行われた垂直・水平知覚における視覚的枠組の役割に関する一連の研究の中で明らかにされたものである (Asch & Witkin, 1948a, 1948b; Witkin & Asch, 1948a, 1948b; Witkin, 1949; Witkin, Lewis, Hertzman, Machover, Meissner, & Wapner, 1954; Witkin, Dyk, Faterson, Goodenough, & Karp, 1962; Witkin, Goodenough, & Karp, 1967)。Witkin らは、主としてロッド・フレーム・テスト (rod and frame test: RFT) に関する結果から、被験者の知覚する垂直または水平位置と真の垂直または水平位置の間にはかなりの誤差があり、しかも誤差の程度には明確な個人差があることを確認した (Asch & Witkin, 1948a, 1948b; Witkin & Asch, 1948a, 1948b)。さらに Witkin らは、こうした知覚における個人差が、その個人の知覚様式



を反映するものであると考え、誤差の大きい個人を場依存型 (field dependent)、誤差の小さい個人を場独立型 (field independent) と定義した。場依存型 - 場独立型は、当初、環境に対して受動的 (passive) であるか能動的 (active) であるかという心理機能に対応すると考えられたが、のちに、心理機能の分化 (differentiation) の程度に対応すると修正された。結局、場依存型は、分化が十分でなく、周囲の状況を比較的全体的に知覚し、優勢な場の条件や文脈に影響されやすい。一方、場独立型は、周囲の状況をより分析的に知覚し、対象を背景から分離して認知する型としてまとめられる (Witkin, 1949; Witkin et al., 1954, 1962)。

自己一致性の生起機制に関して分類される四つの類型と、場依存型 - 場独立型との対応については、類型化の際の現象的特徴や、それらの類型差の基底にみられる社会的動機づけの特徴から、つぎのような予想ができよう

。すなわち、PI型は、相対的にみて、場依存型に近い個人であり、N型は場独立型に近い個人である。I型とP型は場依存型と場独立型の中間に位置するが、どちらかといえば、I型は場依存型の側に近く、P型は場独立型の側に近い個人であろうと考えられる。

Witkinらの場依存性-場独立性については、概念の再吟味や明確化 ( Bone & Eysenck, 1972 ; Evans, 1967 ; Fine, 1972, 1973 ; Gaines & Miller, 1973 ; Mayo & Bell, 1972 ; Sell & Duckworth, 1974 ; Vernon, 1972 ; Wachtel, 1972 )、測定に関する方法論上の問題 ( Arbuthnot, 1972 ; Dana & Goocher, 1959 ; Dargel & Kirk, 1971, 1973 ; Hellkamp, 1968 ; Lester, 1968 ; Long, 1973 ; Vaught, 1970 ) などを中心にきわめて多くの研究が行われてきている。しかし、本研究で問題にするような、直接に、社会的な対人的かかわりとの関係から場依存性-場独立性にみられる差異を究明しようとした研究は比較的少ない ( Alexander & Gudeman, 1965 ;

Busch & Deridder, 1973 ; Linton, 1955 ; League & Jackson, 1961 ; Rosner, 1957 ; Wolitzky, 1973 ) 。

## (2). 研究 12

### (a). 方法

被験者：この研究に参加した被験者は、広島女子大学の学生 75 名である。彼女たちは、実験に先立って、あらかじめ、研究 11-b で用いた方法と同様の調査的手続により、自己一致性の生起機制に関して、PI 型 (13 名)、I 型 (22 名)、P 型 (19 名)、N 型 (21 名) の各類型に分類された。

場依存性 - 場独立性の測定：

① 装置 … TKK 製 ロッド・フレーム・テスト装置を使用した。これは、縦 26 cm × 横 36 cm × 奥行 65 cm の暗箱内に、11 cm × 0.5 cm の夜光塗料を塗ったロッドと、同じく夜光塗料を塗った 1 辺 15 cm × 0.5 cm の正方形のフレームがとり付けられている。ロッドとフレームは同一平面上にあり、ロッドはフレームの中央に位

置し、それぞれ独立に回転可能となつてゐる。被験者は、暗箱に付置されてゐる顔面固定器で頭部を固定し、観察窓から暗箱内のロッドとフレームを観察するが、暗箱それぞれ自体も左右に傾斜が可能となつてゐる。観察窓からロッドとフレームまでの距離は65 cmである。

② 手続…被験者は、頭部とフレームが独立に一定の角度に傾斜した条件下で、床面に対して垂直と知覚するロッドの位置を実験者調整法により報告するよう求められた。

③ 実験条件…頭部とフレームの傾斜方向および傾斜角度に応じて、つぎの三つの条件を設けた。ただし条件3では、頭部は傾斜されず、フレームが傾斜するだけの統制条件としてゐる。

条件 1 : フレーム 右方向 30 度

- 頭部 右方向 30 度 10 試行
- 頭部 左方向 30 度 10 試行

条件 2 : フレーム左方向 30 度  $\left\{ \begin{array}{l} \text{頭部右方向 30} \\ \text{度 10 試行} \\ \text{頭部左方向 30} \\ \text{度 10 試行} \end{array} \right.$

条件 3 (統制) :  $\left\{ \begin{array}{l} \text{フレーム右方向 30 度 10 試行} \\ \text{フレーム左方向 30 度 10 試行} \end{array} \right.$

なお、各 10 試行のうち 5 試行についてはロッドは右回り、他の 5 試行は左回りとし、全体の 60 試行はランダムな順で行った。被験者には各試行間では軽く閉眼するよう教示した。

④ 測度…被験者の知覚したロッドの垂直位置と、真の垂直位置とのずれ(誤差角度)について、一致した場合を零とし、知覚位置が時計方向にずれている場合を正、逆時計方向にずれている場合を負として、各垂直位置判断における誤差角度を記録した。さらに、被験者ごとに条件別の平均誤差角度値を算出した。その際、測定値の分布を正規分布に近づけて整理するため、各測定値はその絶対値を開平方変換 ( $X' = \sqrt{|X + 0.5|}$ ) して処理した。

## (b). 結果

自己一致性の生起機制に関してあらかじめ分類された四つのタイプの被験者について、RFTで測定された場依存性一場独立性の程度（誤差角度：開平変換値）を整理した。表52に示したのはその結果である。

表52. 類型別にみた誤差角度の程度（開平変換値）

類型 (人数)	実験条件		
	条件 1	条件 2	条件 3
PI (13)	2.81(1.00)	2.68(.95)	1.28(.22)
I (22)	2.34(.52)	2.24(.39)	1.37(.22)
P (19)	2.54(.68)	2.35(.62)	1.36(.24)
N (21)	2.09(.45)	2.20(.42)	1.36(.22)

(注) 表の数値は平均値，( )内は標準偏差。

表52の値について類型×実験条件の観点から分散分析した結果が表53である。表53より、全体としての類型差と条件差の主効果およびその交互作用に有意差ならびに有意な傾向が認められた。交互作用が有意なので、真の差を検討するため、まず、四つの類型別に誤

表 53. 誤差角度の程度(表52)の分散分析表

変動因	SS	df	MS	F
被験者間	36.990	74		
類型 (A)	3.674	3	1.225	2.612 <sup>A</sup>
誤差	33.316	71	.469	
被験者内	83.556	150		
実験条件 (B)	51.882	2	25.941	129.060**
A × B	3.152	6	.525	2.612*
誤差	28.522	142	.201	
全体	120.546	224		

<sup>A</sup>p<.10    \*p<.05    \*\*p<.01

表 54. 類型別にみた誤差角度における条件差の分析

類型	F 検定					t 検定
	変動因	SS	df	MS	F	
PI	条件	18.62	2	9.31	22.17**	条件 1 対 条件 2: t= .83 ns
	個人	15.50	12	1.29	---	条件 1 対 条件 3: t=5.34***
	誤差	9.99	24	.42		条件 2 対 条件 3: t=4.79***
I	条件	12.44	2	6.22	47.85**	条件 1 対 条件 2: t= .93 ns
	個人	4.80	21	.23	---	条件 1 対 条件 3: t=7.91***
	誤差	5.49	42	.13		条件 2 対 条件 3: t=9.20***
P	条件	15.15	2	7.58	30.32**	条件 1 対 条件 2: t=1.04 ns
	個人	8.06	18	.45	---	条件 1 対 条件 3: t=7.36***
	誤差	8.99	36	.25		条件 2 対 条件 3: t=6.59***
N	条件	8.83	2	4.42	44.20**	条件 1 対 条件 2: t=1.35 ns
	個人	4.97	20	.25	---	条件 1 対 条件 3: t=7.25***
	誤差	4.06	40	.10		条件 2 対 条件 3: t=7.85***

\*\*p<.01    \*\*\*p<.001

差角度の条件差を分析した。表54はその結果である。

表54より明らかのように、PI型・I型・P型・N型のすべてに共通して条件差は有意であった。誤差角度の真の差は、条件1と条件2の間にはみられず、条件1と条件3、条件2と条件3との間に認められた。条件1および条件2と条件3とは、フレームが右方向あるいは左方向に30度傾斜している点ではこの条件も同じであるが、条件1および条件2はさらに頭部の傾斜条件が加わる点で条件3と異なる。結局、すべての類型に共通して、フレームの傾斜条件に頭部の傾斜条件が加わった場合の方が、フレームの傾斜条件だけの場合より垂直位置判断の誤差が大きかった。しかし、前者の場合でも、フレームが右方向傾斜のときと左方向傾斜のときとの間に差は生じていなかった。

表55は、条件別に誤差角度の類型間の差を分析した結果である。これより明らかよう



表 55 . 条件別にみた誤差角度における類型差の分析

条件	F 検定					t 検定					
	変動因	SS	df	MS	F						
条件 1	類型	4.64	3	1.55	3.52*	PI 対 I: t=2.03*	I 対 P: t=.96	PI 対 P: t=1.13	I 対 N: t=1.24	PI 対 N: t=3.08**	P 対 N: t=2.14*
	誤差	31.78	71	.44							
条件 2	類型	2.12	3	.71	1.97 <sup>Δ</sup>	PI 対 I: t=2.20*	I 対 P: t=.59	PI 対 P: t=1.51	I 対 N: t=.22	PI 対 N: t=2.26*	P 対 N: t=.79
	誤差	25.97	71	.36							
条件 3	類型	.07	3	.02	< 1						
	誤差	3.97	71	.06							

<sup>Δ</sup>p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01

に、条件 3 ( 統制条件 ) では類型間の差はみられないが、条件 1 および条件 2 で有意差あるいは有意な傾向が認められた。

誤差角度に關して、各類型間における真の差を検討した結果から、条件 1 と条件 2 はきわめて類似した傾向を示していることがわかる。すなわち、両条件とも、PI型はN型より垂直位置判断における誤差が有意に大きく、PI型は場依存型に近い個人であり、N型は場独立型に近い個人であろうという仮説を裏づける結果が示された。I型とP型は、条件 1

および条件2のいずれの条件でもPI型とN型の中間にあり、この点においても仮説と合致した傾向が示された。しかし、有意な差は認められていないけれども、P型の方がI型より垂直位置判断における誤差が大きい方向にあったことは、必ずしも仮説と合致しない結果であった。

### (C) 考察

本研究の検討課題は、RFTにおけるロッドの垂直位置判断をとおして測定される場依存性—場独立性の側面から、パーソナリティ認知の過程にみられる四つの類型差の一般性を検討することであった。大学生女子を被験者とした実験結果から、PI型は場依存型に近い個人であり、N型は場独立型に近い個人であること、さらに、I型とP型は場依存型と場独立型の中間に位置することなどが明らかになった。これは、社会的動機づけのちがいによって説明された類型差（研究11-aと11-b）が、ロッドの垂直位置判断のような知覚事態に

においても存在することを示すものである。

しかも、場依存的か場独立的かという垂直位置判断結果の方向は、各類型にみられた類型化の際の認知様式の特徴とおおむね合致しており、類型の一般性を保証するものと理解されよう。

社会的動機づけと場依存型—場独立型との関係を直接検討した従来の諸研究についてみると、両者の間には有意な関係がほとんど見出されていらない。わすかに、*Wertheim & Mednik (1958)* と *Honigfeld & Spiegel (1960)* は、TAT方式で測定した達成動機と場独立性との間に有意な正の関係を報告している。しかし、EPPSを用いた *Marlowe (1958)* や *Dana & Goocher (1959)* の結果ではそれすら検証されていない。本研究の目的が、直接に社会的動機づけと場依存性—場独立性の関係を検討することではなかったにしても、その間に積極的な関係を強く想定しており、得られた結果は、従来の研究結果と必ずしも合致したもので

はなかつた。

このような結果の不一致については、二つのことが原因として考えられる。一つは、場依存性一場独立性の測定手法のちがいである。さきにあげた Dana & Goocher, Honigfeld & Spiegel, Marlowe, Wertheim & Mednik の諸研究では、場依存性一場独立性はすべて EFT (embedded-figures test: Witkin, 1950) か、またはその簡略法 (Jackson, 1956) を用いて決定しており、本研究では RFT を用いた。EFT と RFT は場依存性一場独立性の測定手法として高い相関を示すことが Witkin, Dyk, Faterson, Goodenough, & Karp (1962) によって確認されているが、少なくとも RFT は重力に対する身体位置感覚を含めた三次元の知覚様式の反映であり、EFT は二次元のそれである。このことから、RFT は EFT にくらべて、より全体的な知覚様式を反映する手段であるということができよう。こうした測定手法のちがいが、場依存性一場独立性と他の変数とのかわりを

検討する際に反映されてくる可能性がある。

つきに、社会的動機づけの測度に関することが指摘される。場依存性—場独立性と達成動機の間には有意な関係を示した *Wertheim & Mednik* および *Honigfeld & Spiegel* の結果は、TAT方式で測定した達成動機との関係であり、達成動機を含めたほとんどの社会的動機の諸側面と有意な相関が示されなかった *Dana & Goocher* や *Marlowe* の結果は、EPPS 15側面の一つ一つの側面との関係についてであった。本論文の研究 11-b では、上の研究と同様に EPPS を社会的動機づけの測度としたが、他者とのかかわりの中で自己を強調するような動機と、他者とのかかわりの中に自己を埋没ないし融合させてしまうような動機を際立たせることを予想して、あらかじめ因子分析に基づいて15側面を六つにグループングした全体的な測度を使用した。 *Witkin, Lewis, Hertzman, Machover, Meissner, & Wapner (1954)* が、場依存性—場独立性とパーソナリティとの

関係を、被験者との面接や質問紙調査、さらに被験者の生育歴などを総合した全体的・臨床的な測度で論じていることなどからみても、Dana & Goocher や Marlowe の使用しにように、あまりにも分析的な社会的動機づけの測度は、場依存型 - 場独立型の差異を反映しにくいのではないかと考えられる。

以上の考察とも関連するが、本研究では、場依存性 - 場独立性の測度は RFT によって求めた。Wachtel (1972) は、こうして測度に関する検討の結果に基づいて、場依存性 - 場独立性の測度はただ一つのテスト結果だけからではなく、数種のテストバッテリーによる結果を総合するしかたで求めるべきであると主張している。同様の考察が Arbutnot (1972) や Vernon (1972) によっても行われている。本研究で得られた結果は、すでに示したように、全体的にはおおむね仮説を支持するものであったが、細部で、P型とI型の位置関係が予想と合致しない方向にあった。本研究で、

場依存性一場独立性の測度を RFT だけに求め  
ていたことが、このような結果に影響して  
いた可能性も考えられる。複数の、総合的なテ  
ストバッテリーによる測度を使用しておれば、  
より明確な結果が期待できたかもしれない。

## 5. まとめ

第4章での検討課題は、自己一致性生起過  
程を中心としたパーソナリティ認知の過程に及  
ぼす個人差要因の影響について、認知的要因  
と動機的要因の二つの観点から究明すること  
であった。この目的のために、本章では五つ  
の研究を行った。そこで、これらの研究の結  
果と考察された問題点をまとめながら、全体  
的に総括しておく。

### (1) 個人差要因としての認知的要因

本章の研究9では、パーソナリティ認知過程  
における個人差要因として、認知的複雑性の

影響を検討した。パーソナリティ認知を含む対人認知の過程が、自己および他者に対する概念化の過程であり、一種の判断過程である以上、認知的複雑性のような認知構造的観点からのアプローチが不可欠であると考えたからである。

研究9の結果に示されたように、認知的に複雑か単純かという観点からだけでは、パーソナリティの自己一致性や想定類似性を認知する過程に相違は認められなかった。そして、相手に対する好悪感情といった動機的不いし感情的要因を考慮して、はじめに認知的複雑性の影響性を明確にすることができた。とくに、認知的に単純な個人ほど、パーソナリティの自己一致性や想定類似性を認知する程度において、好悪感情による影響を受けやすいことを示す結果が得られた。

Bieri (1955) によって、認知的複雑性の概念が社会的な場に適用されて以来、この概念が多くの研究者の関心を集めたのはつぎのよう



な理由によると思われる。第1には、それまで、社会的な場で機能する有効な個人差要因が検出されていなかったこと、そして第2に、この変数を測定し、数量化する方法が論理的であり、しかも容易であったことである。しかしながら、今日までのところ、直接にパーソナリティ認知の過程で認知的複雑性の機能を究明しようとする研究はほとんど行われていない。ただ、概念化の対象である他者についての情報が非常に限定された印象形成過程の問題領域において、とくに情報提示順序効果 (order effect) に及ぼすこの変数の影響の検討が比較的多くなされている。Mayo & Crockett (1964)、Nidorf & Crockett (1965)、Meltzer, Crockett, & Rosenkrantz (1966) らは、認知的に単純な個人の方が複雑な個人よりも、他者についての矛盾した情報の統合が困難で、初頭効果 (primacy effect) あるいは新近効果 (recency effect) などの順序効果を示しやすいことを示唆する結果を報告している。

このような従来の研究で得られた知見と、本研究で得られた結果を総合すると、認知的に単純な個人ほど、他者に関する弁別的な認知ができにくく、それゆえ、好悪感情や順序効果などの状況的要因の影響を受けやすいと考えることができよう。

なお、認知者の認知構造の諸側面にかかわる変数としては、本研究で検討した認知的複雑性のほかに、Tajonc (1960) の分化性 (differentiation)、複雑性 (complexity)、統一性 (unity) などの変数があげられる。これらの変数については、現在までのところ、測定方法が確立されていないことなどの理由で、パーソナリティ認知の過程との関連についてはまったく検討されてきていない。今後、それらの変数による影響も吟味されるならば、パーソナリティ認知を含む対人認知の過程における認知的要因の機能が、より一層明確になるものと思われる。

## (2). 対人関係と動機的要因

社会心理学の中で提唱されてきた認知的一貫性理論は、個人の側に、認知要素間の非一貫的な状態を解消し、内的に一貫した状態を求めようとする動機的要因が存在することを前提としている。そこで仮定された要因は、あくまで均衡 (balance) を求める動機 (Heider, 1946, 1958) であり、シンメトリーへ向かう緊張 (strain toward symmetry : Newcomb, 1959)、協和 (consonance) への動機 (Festinger, 1957) などである。それらは、認知的に一貫した状態を求めること自体が一つの内的適応状態を求める動機的要因であるという考え方をとる点で共通している。本研究は、全体的な枠組としては、そうした認知的一貫性理論の立場に立つものであるが、個人内適応というよりは、むしろ対人的適応を求める過程で認知者が他者との間でパーソナリティの自己一致性を認知するという考え方をとるものである。したがって、そうした過程に動機的要因が関与

してくるとすれば、それは、より対人的なかわりの強い要因であることを想定した。

研究 11-a と 11-b では、自己一致性の生起機制に關して被験者を PI 型・I 型・P 型・N 型の四つに類型化し、その類型差を、TAT 方式で測定した親和動機、FIRO-B テストで測定した基本的対人關係志向性、さらに EPPS で測定した種々の社会的動機側面に關して検討した。そして、当初予想したように、投射的機制による一致過程をたどる P 型の個人は、他者とのかわり合いの中で自己を強調し、自己を際立たせようとする動機的傾向を示す。投入的機制による一致過程をたどる I 型の個人は、他者とのかわり合いの中に自己を埋没あるいは融合させようとする動機的傾向を示す結果を得た。さらに、PI 型の個人は、その動機的傾向において、P 型の特徴と I 型の特徴をあわせもつことも示唆された。研究 12 では、こうした類型間の動機的特徴が、純粹な知覚判断事態にも一般化されることを確認

することができた。

こうした研究結果を総合的に考察すると、対人関係事態にかかわる動機的要因は、かりにその背後に種々の側面が存在するにしても、たとえば、自己の側を強調する要因であるか、他者の側を強調する要因であるか、といった全体的なかたちで理解するのが妥当であるように思われる。研究10で検討した自尊心の要因も、こうした枠組の中で理解することができると思われる。数多くの動機的要因を、こうした枠組の中へどのように概念化し、どのように測定可能にするかなどの問題が引き続き検討されるべきであろう。

## 第5章 総括

本研究の中心的課題は、対人関係の側面からパーソナリティ認知の過程を検討し、そうした認知過程の中に含まれる対人的適応の機能を明らかにすることであった。研究にあたって、認知者が、自分自身について認知するパーソナリティ ( $S \rightarrow S'$ ) と他者からみられていると思う自己のパーソナリティ ( $S \leftarrow (O \rightarrow S')$ ) と二つの認知過程が一致することを“自己一致性”と定義した。そして、特定の他者との間に自己一致性を認知する過程に、認知者の対人的適応のあり方が示されると考えた。本研究では、こうした問題を大きく三つの側面から検討した。まず、第2章では、認知者が特定の他者について認知する自己一致性の程度と、その他者との関係、とくに好悪感情との関係を分析した。そして、自己一致性を認知する過程には、他者に対する“好悪感

情の規定機能”と、他者との間における“認知関係の形成機能”という、二つの対人的適応機能が認められることを明らかにした。

つぎに、第3章では、特定の他者との間にパーソナリティの自己一致性が認知される際の一致過程について、 $S \rightarrow s'$  と  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  の因果的機制に関する検討を行った。そして、自己一致性の生起過程には、 $S \rightarrow s'$  が  $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  を規定する“投射的一致機制”と、 $S \leftarrow (O \rightarrow s')$  が  $S \rightarrow s'$  を規定する“投入的一致機制”という、方向の異なる二つの機制による一致過程が併存することを明らかにした。同時に、いおれの機制に基づく一致過程をたどるかには、認知者の個人差による可能性が大きいことを示した。

そこで、第4章では、自己一致性の生起過程を中心としたパーソナリティ認知の過程における個人差要因の影響を、認知的要因と動機的要因の二つの側面から究明した。

第2章から第4章までに論じた問題を総括すると、本研究の成果としてつぎの二つをあ

げることができる。

まお第1に、本研究の中心概念である自己  
 一緻性が、パーソナリティ認知の過程において  
 従来注目されてきた想定類似性以上に、対人  
 関係の成立過程や対人関係の維持・発展過程  
 にとって重要な役割を果たすことを明らかに  
 することができることである。本研究で解明  
 した自己一緻性の対人的適応機能は、パーソ  
 ナリティ認知の過程に新しい知見を加えるもの  
 である。これは、本研究で得られた一つの成  
 果である。

第2に、パーソナリティの自己一緻性を認知  
 する過程の個人差が、他者との関係において  
 自己の要因を強調するかあるいは他者の要  
 因を強調するかにかかわる動機傾向に基づく  
 ことを究明することができることである。こ  
 うしたパーソナリティ認知の過程に影響する個  
 人差要因の解明は、対人認知研究、ひいては  
 心理学研究の究極の目的である人間理解に一  
 歩近づく成果である。



本研究では、その検討課題を、自己一致性を認知する過程の対人的適応機能とその個人差の解明に焦点化した。そして、すでに総括したように、所期の目的はある程度達成することのできた。そこで、今後、パーソナリティ認知過程に関する研究をさらに深め、より適切な人間理解に近づくために必要な検討課題を述べておく。

まず、第1に、今後、認知者の発達の観点からの検討が必要になると思われる。本研究では、パーソナリティの自己一致性の認知過程そのものに焦点が向けられ、認知者の発達の要因に対する配慮をまったくしなかった。従来、社会心理学における対人認知研究でも、研究の関心が認知の正確さや認知の過程に向けられてきたことも半信して、認知者の発達の観点からの分析はほとんどなされていらない。また、発達心理学からの対人認知研究でも、たとえば乳幼児の母親識別に関する検討は行われても、それを一般的な対人認知の問題

領域にまで広げようとする試みはほとんどなされなかつた。しかしながら、本研究で問題としたようなパーソナリティ認知の過程は、自己および他者に関する概念化の過程であり、それを適切に理解するためには、認知者の側の発達水準との関連を考慮することがどうしても必要と思われる。

パーソナリティの自己一致性について説明すれば、本研究では、中学生・高校生・大学生がそれかれの検討課題に応じて被験者とされたけれども、それ以外の年齢集団についての検討はされていない。自己一致性の認知は、どのような発達段階にある個人にとっても認められる現象なのであろうか。また、ある発達段階にある個人の自己一致性の認知と、別の発達段階にある個人の自己一致性の認知とは、対人的適応という面からみて同じ意味をもつものなのであろうか。広く、社会化過程 (socialization process) との関連の中でこうした疑問に答えていくことは、より全体的な

人間理解に近づくことであると思われる。

第2に、役割関係からの検討の必要性が指摘される。これは、広義には、さきに述べた社会化過程からの検討と重複する問題点である。

本研究では、自己一致性の認知過程を、同性の同年齢の他者に対する好悪感情との関連から検討した。個人の社会化の過程は、そうした友人もしくは仲間との相互作用だけではなく、個人が所属したり関係をもつたりするさまざまな集団や制度との相互作用の中で進行する。ここでは、両親、同胞、先輩、教師などの個人や、家族、学校、地域社会などの集団や制度による種々の影響を受けていくことになる。そのような点からみて、種々の役割関係の中で行われるパーソナリティ認知の過程を究明することはきわめて興味深く、また意義深いことであると思われる。残された重要な検討課題の一つであろう。

最後に、パーソナリティ認知過程全体の構造

とその心理的意味に関する研究が今後 to 要請される。

すでに述べたように、これまで、特定のパーソナリティ認知過程間の関係とその意味について、かなりの検討が行われてきている。しかしながら、その際にとり上げられた認知過程は、あくまで個々の研究者が関心を持ち、また重要と考へた過程である。また、検討の対象とされた関係は、すべて、特定の二つの認知過程間のみのものである。本研究の場合もその例外ではない。

個々の研究で得られた成果をより意味あるものにするには、パーソナリティ認知過程全体を体系化もしくは構造化し、そうした構造のもつ心理的意味を解明する必要がある。こうした視点からの検討が、この研究領域の一つの発展的課題になると思われる。

## 引用文献

- Abelson, R. P., & Serfaty, V. 1962 Multidimensional scaling of facial expressions. *Journal of Experimental Psychology*, 63, 546-554.
- Adams-Webber, J. R. 1967 Construct and figure interactions within a personal construct system: An extension of repertory grid technique. (Unpublished doctoral dissertation, Brandeis University.)
- Adams-Webber, J. R. 1969 Cognitive complexity and sociality. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 8, 211-216.
- Alexander, J. B., & Gudeman, H. E. 1965 Perceptual and interpersonal measures of field dependence. *Perceptual and Motor Skills*, 20, 79-86.
- Allard, M., & Carlson, E. R. 1963 The generality of cognitive complexity. *Journal of Social Psychology*, 59, 73-75.
- Anderson, N. H. 1965a Primacy effects in personality impression formation using a generalized order effect paradigm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 1-9.
- Anderson, N. H. 1965b Averaging versus adding as a stimulus-combination rule in impression formation. *Journal of Experimental Psychology*, 70, 394-400.
- Anderson, N. H. 1966 Component ratings in impression formation. *Psychonomic Science*, 6, 279-280.
- Anderson, N. H. 1974 Cognitive algebra : Integration theory applied to social attribution. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 7. New York : Academic Press. Pp. 1-101.
- Anderson, N.H., & Barrios, A. A. 1961 Primacy effects in personality impression formation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 346-350.

- Anderson, N. H., & Hubert, S. 1963 Effects of concomitant verbal recall on order effects in personality impression formation. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 2, 379-391.
- Anderson, N. H., & Norman, A. 1964 Order effects in impression formation in four classes of stimuli. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 69, 467-471.
- Anderson, N. H., & Lampel, A. K. 1965 Effect of context on ratings of personality traits. *Psychonomic Science*, 3, 433-434.
- 青木孝悦 1971a 性格表現用語の心理-辞典的研究 — 455語の選択, 分類および望ましいの評定—. *心理学研究*, 42, 1-13.
- 青木孝悦 1971b 性格表現用語における個人的望ましいの因子分析的な研究. *心理学研究*, 42, 87-91.
- 青木孝悦 1972 性格表現用語580語の意味類似による多因子解析から作られた性格の側面. *心理学研究*, 43, 125-136.
- Arbuthnot, J. 1972 Cautionary note on measurement of field independence. *Perceptual and Motor Skills*, 35, 479-488.
- Argyle, M. 1972 Non-verbal communication in human social interaction. In R. A. Hinde (Ed.), *Non-verbal communication*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 243-269.
- Argyle, M. 1975 *Bodily communication*. London: Methuen.
- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Asch, S. E., & Witkin, H. A. 1948a Studies in space orientation: I. Perception of the upright with displaced visual fields. *Journal of Experimental Psychology*, 38, 325-337.
- Asch, S. E., & Witkin, H. A. 1948b Studies in space orientation: II. Perception of the upright with displaced visual fields and with body tilted. *Journal of Experimental Psychology*, 38, 455-477.

- Atkinson, J. W., Heyns, R. W., & Veroff, J. 1954 The effect of experimental arousal of the affiliation motive on thematic apperception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 405-410.
- Ausubel, D. P. 1953 Reciprocity and assumed reciprocity of acceptance among adolescents, a sociometric study. *Sociometry*, 16, 339-348.
- Ausubel, D. P. 1955 Sociempathy as a function of sociometric status in an adolescent group. *Human Relations*, 8, 75-84.
- Ausubel, D. P., Schiff, H. M., & Gasser, E. B. 1952 A preliminary study of developmental trends in sociempathy : Accuracy of perception of own and others' sociometric status. *Child Development*, 23, 111-128.
- Backman, C. W., & Secord, P. F. 1959 The effect of perceived liking on interpersonal attraction. *Human Relations*, 12, 379-384.
- Backman, C. W., & Secord, P. F. 1962 Liking, selective interaction, and misperception in congruent interpersonal relations. *Sociometry*, 25, 321-335.
- Backman, C. W., & Secord, P. F. 1964 The compromise process and the affect structure of groups. *Human Relations*, 17, 19-22.
- Backman, C. W., Secord, P. F., & Peirce, J. R. 1963 Resistance to change in the self-concept as a function of consensus among significant others. *Sociometry*, 26, 102-111.
- Bem, D. J. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz ( Ed. ), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 6. New York : Academic Press. Pp. 1-62.
- Bender, I. E., & Hastorf, A. H. 1953 On measuring generalized empathic ability ( social sensitivity ). *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 503-506.
- Berger, E. M. 1952 The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 778-782.

- Bieri, J. 1955 Cognitive complexity-simplicity and predictive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 263-268.
- Bieri, J. 1966 Cognitive structure and judgment. In J. Bieri, & A. L. Atkins et al. (Eds.), *Clinical and social judgment: The discrimination of behavioral information*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 182-206.
- Bieri, J., & Blacker, E. 1956 The generality of cognitive complexity in the perception of people and inkblots. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 53, 112-117.
- Bieri, J., & Messerley, S. 1957 Differences in perceptual and cognitive behavior as a function of experience type. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 217-221.
- Bone, R. N., & Eysenck, H. J. 1972 Extraversion, field-dependence, and the Stroop test. *Perceptual and Motor Skills*, 34, 873-874.
- Borden, R., & Hendrick, C. 1973 Internal-external locus of control and self-perception theory. *Journal of Personality*, 41, 32-41.
- Bruner, J. S., & Postman, L. 1949 Perception, cognition, and behavior. *Journal of Personality*, 18, 14-31.
- Bruner, J. S., & Tagiuri, R. 1954 The perception of people. In G. Lindzey (Ed.), *Handbook of social psychology*. Cambridge, Mass.: Addison-Wesley. Pp. 634-654.
- Bruner, J. S., Shapiro, D., & Tagiuri, R. 1958 The meaning of traits in isolation and in combination. In R. Tagiuri, & L. Petrullo (Eds.), *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford, Calif.: Stanford University Press. Pp. 277-288.
- Busch, J. C., & Deridder, L. M. 1973 Conformity in pre-school disadvantaged children as related to field-dependence, sex, and verbal reinforcement. *Psychological Reports*, 32, 667-673.



- Buzby, D. E. 1924 The interpretation of facial expression. *American Journal of Psychology*, 35, 602-604.
- Byrne, D., & Blaylock, B. 1963 Similarity and assumed similarity of attitudes between husbands and wives. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 636-640.
- Cartwright, D., & Harary, F. 1956 Structural balance : A generalization of Heider's theory. *Psychological Review*, 63, 277-293.
- Cline, V. B., & Richards, J. M., Jr. 1960 Accuracy of interpersonal perception --- a general traits ? *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 60, 1-7.
- Cooley, C. H. 1902 Human nature and the social order. New York : Scribner's Sons.
- Crockett, W. H. 1965 Cognitive complexity and impression formation. In B. A. Maher ( Ed. ), *Progress in experimental personality research*, Vol. 2. New York : Academic Press. Pp. 47-90.
- Cronbach, L. J. 1955 Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.
- Crow, W. J., & Hammond, K. R. 1957 The generality of accuracy and response sets in interpersonal perception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 54, 384-390.
- Crowne, D. P., & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 349-354.
- Crowne, D. P., & Marlowe, D. 1964 The approval motive. New York : John Wiley & Sons.
- Dana, R. H., & Goocher, B. 1959 Embedded-figures and personality. *Perceptual and Motor Skills*, 9, 99-102.
- Dargel, R., & Kirk, R. E. 1971 Manifest anxiety, field dependency, and task performance. *Perceptual and Motor Skills*, 32, 383-393.

- Dargel, R., & Kirk, R. E. 1973 Note on relation of anxiety to field dependency. *Perceptual and Motor Skills*, 37, 218.
- Darwin, C. 1872 The expression of the emotions in man and animals. London : Murray.
- Deutsch, M., & Solomon, L. 1959 Reactions to evaluations by others as influenced by self-evaluations. *Sociometry*, 22, 93-112.
- Dittes, J. E. 1959 Effect of changes in self-esteem upon impulsiveness and deliberation in making judgments. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 58, 348-356.
- Dunlap, K. 1927 The role of eye-muscles and mouth-muscles in the expression of the emotions. *Genetic Psychology Monographs*, 2, No. 3, 195-233.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1973 Effects of objective self-awareness on attribution of causality. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 17-31.
- Dymond, R. F. 1948 A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 12, 228-233.
- Dymond, R. F. 1949 A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127-133.
- Dymond, R. F. 1950 Personality and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 343-350.
- Edwards, A. L., Diers, C. J., & Walker, J. N. 1962 Response sets and factor loadings on 61 personality scales. *Journal of Applied Psychology*, 46, 220-225.
- Ekman, P. 1971 Universals and cultural differences in facial expressions of emotion. In J. K. Cole ( Ed. ), *Nebraska symposium on motivation*, Vol. 19. Lincoln, Nebraska : University of Nebraska Press. Pp. 207-283.
- Ekman, P., Sorenson, E. R., & Friesen, W. V. 1969 Pan-cultural elements in facial displays of emotion. *Science*, 164, 86-88.

- Ellsworth, P. C., & Carlsmith, J. M. 1968 Effects of eye contact and verbal content on affective response to a dyadic interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 15-20.
- Engen, T., Levy, N., & Schlosberg, H. 1958 The dimensional analysis of a new series of facial expressions. *Journal of Experimental Psychology*, 55, 454-458.
- Estes, S. G. 1938 Judging personality from expressive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 33, 217-236.
- Evans, F. J. 1967 Field dependence and Maudsley Personality Inventory. *Perceptual and Motor Skills*, 24, 526.
- Exline, R., Gray, D., & Schuette, D. 1965 Visual behavior in a dyad as affected by interview content and sex of respondent. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 201-209.
- Feleky, A. M. 1914 The expression of the emotions. *Psychological Review*, 21, 33-41.
- Festinger, L. 1957 A theory of cognitive dissonance. Stanford, Calif. : Stanford University Press.
- Fiedler, F. E. 1950 A comparison of therapeutic relationships in psychoanalytic, nondirective and Adlerian therapy. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 436-445.
- Fiedler, F. E. 1951 A method of objective quantification of certain countertransference attitudes. *Journal of Clinical Psychology*, 7, 101-107.
- Fiedler, F. E. 1954 Assumed similarity measures as predictors of team effectiveness. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 381-388.
- Fiedler, F. E. 1967 A theory of leadership effectiveness. New York : McGraw-Hill.
- Fiedler, F. E. 1978 The contingency model and the dynamics of the leadership process. In L. Berkowitz (Ed. ), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 11. New York : Academic Press. Pp. 59-112.

- Fiedler, F. E., & Senior, K. 1952 An exploratory study of unconscious feeling reactions in fifteen patient-therapist pairs. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 446-453.
- Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdell, F. J. 1952 Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 790-796.
- Fine, B. J. 1972 Field-dependent introvert and neuroticism : Eysenck and Witkin united. *Psychological Reports*, 31, 939-956.
- Fine, B. J. 1973 Field-dependence-independence as 'sensitivity' of the nervous system : Supportive evidence with color and weight discrimination. *Perceptual and Motor Skills*, 37, 287-295.
- Gaines, L. S., & Miller, L. M. 1973 Measures of psychological differentiation : Rod-and-frame test and the psychological differentiation inventory. *Perceptual and Motor Skills*, 37, 146.
- Gates, G. S. 1923 An experimental study of the growth of social perception. *Journal of Educational Psychology*, 14, 449-461.
- Gerard, H. B. 1961 Some determinants of self-evaluation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 288-293.
- Gilmor, T. M., & Minton, H. L. 1974 Internal versus external attribution of task performance as a function of locus of control, initial confidence and success-failure outcome. *Journal of Personality*, 42, 159-174.
- Goffman, E. 1959 *The presentation of self in everyday life*. New York : Doubleday.
- Gruen, W. 1960 Rejection of false information about oneself as an indication of ego identity. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 231-233.

- 浜名 外春男 1962 対人知覚に関する実験的研究 — Congruency現象の mechanismについて — . 中国四国心理学会第19回大会講演抄録, 110-111.
- 浜名 外春男・市河 淳章 1964 対人知覚における自己および他者のパーソナリティ認知の研究(Ⅱ). 中国四国心理学会第21回大会発表抄録, 61-62.
- 浜名 外春男・小川一夫・市河 淳章・高橋 邦 1970 認知的複雑性と対人機能. 日本心理学会第34回大会発表論文集, 506.
- Harvey, O. J. 1962 Personality factors in resolution of conceptual incongruities. *Sociometry*, 25, 336-352.
- Harvey, O. J., Kelley, H. H., & Shapiro, M. M. 1957 Reactions to unfavorable evaluations of the self made by other persons. *Journal of Personality*, 25, 393-411.
- Hastorf, A. H., & Bender, I. E. 1952 A caution respecting the measurement of empathic ability. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 574-576.
- Hastorf, A. H., Richardson, S. A., & Dornbusch, S. M. 1958 The problem of relevance in the study of person perception. In R. Tagiuri, & L. Petrullo (Eds.), *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford, Calif.: Stanford University Press. Pp. 54-62.
- Hastorf, A. H., Schneider, D. J., & Polefka, J. 1970 *Person perception*. Menlo Park, Calif.: Addison-Wesley.
- Heider, F. 1946 Attitudes and cognitive organization. *Journal of Psychology*, 21, 107-112.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons.
- Hellkamp, D. T. 1968 Perceptual response sets on the rod-and-frame task in a college sample. *Perceptual and Motor Skills*, 27, 591-594.
- Hewitt, J., & Goldman, M. 1974 Self-esteem, need for approval, and reactions to personal evaluations. *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 201-210.

- 肥田野直・岩及信九郎・岩崎三民・杉村健・福原真知子 1970  
E P P S 性格検査本引. 日本文化科学社.
- Homans, G. C. 1950 The human group. New York :  
Harcourt, Brace & World.
- Honigfeld, G., & Spigel, I. M. 1960 Achievement moti -  
vation and field independence. Journal of Consulting  
Psychology, 24, 550-551.
- 今川良雄・岩淵次郎 1981 対人認知過程の構造について — 好意的2人関係の  
因子分析的研究 — . 実験社会心理学研究, 21, 41-51.
- Jackson, D. N. 1956 A short form of Witkin's embedded-  
figures test. Journal of Abnormal and Social  
Psychology, 53, 254-255.
- Jackson, D. N., Messick, S. J., & Solley, C. M. 1957  
A multidimensional scaling approach to the perception  
of personality. Journal of Psychology, 44, 311-318.
- Jacobs, L., Berscheid, E., & Walster, E. 1971 Self-  
esteem and attraction. Journal of Personality and  
Social Psychology, 17, 84-91.
- Jenness, A. 1932 The recognition of facial expressions  
of emotion. Psychological Bulletin, 29, 324-350.
- Jones, E. E., & Davis, K. E. 1965 From acts to dis-  
positions : The attribution process in person percep -  
tion. In L. Berkowitz ( Ed. ), Advances in experi -  
mental social psychology, Vol. 2. New York :  
Academic Press. Pp. 219-266.
- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. 1971 The actor and the  
observer : Divergent perceptions of the causes of  
behavior. In E. E. Jones, D. Kanouse, H. H. Kelley,  
R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner ( Eds. ),  
Attribution : Perceiving the causes of behavior.  
Morristown, N.J. : General Learning Press. Pp. 79-94.
- Jones, S. C. 1973 Self- and interpersonal evaluations :  
Esteem theories versus consistency theories.  
Psychological Bulletin, 79, 185-199.
- Jones, S. C., & Ratner, C. 1967 Commitment to self-

- appraisal and interpersonal evaluations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 442-447.
- Jordan, N. 1953 Behavioral forces that are a function of attitudes and of cognitive organization. *Human Relations*, 6, 273-287.
- 梶田 敏一 1966 2者関係に及ぼす自己評価の効果——他者からの働きかけに対する反応を規定する要因として——. *教育・社会心理学研究*, 5, 231-238.
- 梶田 敏一 1967 他者についての概念化と対人感情. *心理学研究*, 38, 284-289.
- Kajita, E. 1968 Self-esteem, affect, and interpersonal cognition. *Japanese Psychological Research*, 10, 111-122.
- Kanner, L. 1931 Judging emotions from facial expressions. *Psychological Monographs*, No. 186 ( Vol. 41, No. 3 )
- Kelley, H. H. 1967 Attribution theory in social psychology. In D. L. Levine ( Ed. ), *Nebraska Symposium on motivation*, Vol. 15. Lincoln, Nebraska : University of Nebraska Press. Pp. 192-238.
- Kellogg, W. N., & Eagleson, B. M. 1931 The growth of social perception in different racial groups. *Journal of Educational Psychology*, 22, 367-375.
- Kelly, G. A. 1955 *The psychology of personal constructs*. Vols. 1-2. New York : Norton.
- Kipnis, D. M. 1961 Changes in self concepts in relation to perceptions of others. *Journal of Personality*, 29, 449-465.
- Kogan, N., & Tagiuri, R. 1958 On visibility of choice and awareness of being chosen. *Psychological Reports*, 4, 83-86.
- Koltov, B. B. 1962 Some characteristics of intrajudge trait intercorrelations. *Psychological Monographs*, No. 552 ( Vol. 76, No. 33 )
- League, B. J., & Jackson, D. N. 1961 Activity and passivity as correlates of field-independence. *Perceptual and Motor Skills*, 12, 291-298.

- Lerner, M. J., & Simmons, C. H. 1966 Observer's reaction to the "innocent victim" : Compassion or rejection ? *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 203-210.
- Lester, G. 1968 The rod-and-frame test :Some comments on methodology. *Perceptual and Motor Skills*, 26, 1307-1314.
- Leventhal, H. 1957 Cognitive processes and interpersonal predictions. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 55, 176-180.
- Leventhal, H., & Singer, D. L. 1964 Cognitive complexity, impression formation and impression change. *Journal of Personality*, 32, 210-226.
- Levine, R., Chein, I., & Murphy, G. 1942 The relation of the intensity of a need to the amount of perceptual distortion : A preliminary report. *Journal of Psychology*, 13, 283-293.
- Linton, H. B. 1955 Dependence on external influence : Correlates in perception, attitudes, and judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 502-507.
- Long, G. M. 1973 The rod-and-frame test : Further comments on methodology. *Perceptual and Motor Skills*, 36, 624-626.
- Lundy, R. M. 1956 Assimilative projection and accuracy of prediction in interpersonal perceptions. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 52, 33-38.
- Lundy, R. M. 1958 Self-perceptions regarding masculinity-femininity and descriptions of same and opposite sex sociometric choices. *Sociometry*, 21, 238-246.
- Lundy, R. M., & Berkowitz, L. 1957 Cognitive complexity and assimilative projection in attitude change. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 55, 34-37.
- Lundy, R. M., Katkovsky, W., Cromwell, R. L., & Shoemaker, D. J. 1955 Self acceptability and descriptions of sociometric choices. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 260-262.



- Maehr, M. L., Mensing, J., & Nafzger, S. 1962 Concept of self and the reaction of others. *Sociometry*, 25, 353-357.
- Manis, M. 1955 Social interaction and the self-concept. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 362-370.
- Marlowe, D. 1958 Some psychological correlates of field independence. *Journal of Consulting Psychology*, 22, 334.
- Mayo, C. W., & Crockett, W. H. 1964 Cognitive complexity and primacy-recency effects in impression formation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 68, 335-338.
- Mayo, P. R., & Bell, J. M. 1972 A note on the taxonomy of Witkin's field-independence measures. *British Journal of Psychology*, 63, 255-256.
- McClelland, D. C., & Atkinson, J. W. 1948 The projective expression of needs : 1. The effect of different intensities of the hunger drive on perception. *Journal of Psychology*, 25, 205-222.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society*. Chicago : University of Chicago Press.
- Mehrabian, A. 1968 Inference of attitudes from the posture, orientation, and distance of a communicator. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 32, 296-308.
- Mehrabian, A. 1972 *Nonverbal communication*. Chicago : Aldine-Atherton.
- Meltzer, B., Crockett, W. H., & Rosenkrantz, P. S. 1966 Cognitive complexity, value congruity, and the integration of potentially incompatible information in impressions of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 338-343.
- Messick, D. M., & Reeder, G. 1972 Perceived motivation, role variations, and the attribution of personal characteristics. *Journal of Experimental Social Psychology*, 8, 482-491.

- Moreno, J. L. 1953 Who shall survive ? ( 2nd. ed. )  
Beacon, New York : Beacon House.
- Morrisette, J. O. 1958 An experimental study of the  
theory of structural balance. Human Relations, 11,  
239-254.
- Murray, H. A. 1938 Explorations in personality.  
New York : Oxford University Press.
- 長島貞夫・藤原春樹・原野広太郎・春兩耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係  
についての研究(2) — Self-Differentialの作成 —. 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- 根本 猛夫 1971 Social Desirability尺度の作成と教示によるSDの変化.  
日本心理学会第35回大会発表論文集, 213-214.
- Newcomb, T. M. 1953 An approach to the study of communi-  
cative acts. Psychological Review, 60, 393-404.
- Newcomb, T. M. 1959 Individual systems of orientation.  
In S. Koch ( Ed. ), Psychology : A study of a  
science, Vol. 3. New York : McGraw-Hill. Pp. 384-  
422.
- Nidorf, L. J., & Crockett, W. H. 1965 Cognitive complex-  
ity and the integration of conflicting information  
in written impressions. Journal of Social Psychology,  
66, 165-169.
- Nisbett, R. E., Caputo, C., Legant, P., & Marecek, J.  
1973 Behavior as seen by the actor and as seen by  
the observer. Journal of Personality and Social  
Psychology, 27, 154-164.
- Northway, M. L., & Detweiler, J. 1955 Children's  
perceptions of friends and non-friends. Sociometry,  
18, 527-531.
- 釜師 焔 1969 対人態度における価値的認知と感情. 教育心理学研究, 17, 144-155.
- 小川一夫・藤原 哲 1962 選択感情と対人知覚の力学的関係(1)  
— Congruency Process について —. 教育・社会心理学研究, 3, 64-68.
- 小川一夫・浜名外吾用・市河淳彦・高橋 超 1966 印象形成過程の研究(1)  
Cognitive complexityの測度について. 日本心理学会第30回大会発表論文集, 367.

- 小川一夫・浜名外吾男・市河淳寛・高橋 祐 1967a 対人認知構造について(1).  
日本心理学会第31回大会発表論文集, 327.
- 小川一夫・浜名外吾男・市河淳寛・高橋 祐 1967b 対人認知構造について(2).  
日本心理学会第31回大会発表論文集, 328.
- 大橋正夫 1956a 選択行動と対人的知覚の研究(I) — 他の成員の自己に対する感情  
および人札の知覚—. 心理学研究, 27, 36-45.
- 大橋正夫 1956b 選択行動と対人的知覚の研究(II) — 他の成員の別の成員に対する態度  
の知覚—. 心理学研究, 27, 193-203.
- 大橋正夫 1958 選択行動と対人的知覚の研究(III) — 関係知覚における集団構造化の  
要因—. 心理学研究, 29, 235-245.
- 大橋正夫 1960 最近の Person Perception の研究. 心理学研究, 31, 243-256.
- 大橋正夫 1961 選択行動と対人的知覚の研究(IV) — 相互関係の知覚—.  
心理学研究, 31, 337-348.
- 長田 雅也 1966 対人認知. 心理学評論, 10, 85-102.
- Osgood, C. E., & Tannenbaum, P. H. 1955 The principle  
of congruity in the prediction of attitude change.  
Psychological Review, 62, 42-55.
- Passini, F. T., & Norman, W. T. 1966 A universal concep -  
tion of personality structure? Journal of Personality  
and Social Psychology, 4, 44-49.
- Phares, E. J., & Lamiell, J. T. 1975 Internal-external  
control, interpersonal judgments of others in need,  
and attribution of responsibility. Journal of  
Personality, 43, 23-38.
- Proshansky, H., & Murphy, G. 1942 The effects of reward  
and punishment on perception. Journal of Psychology,  
13, 295-305.
- Rosenberg, M. J. 1960 An analysis of affective-cognitive  
consistency. In C. I. Hovland & M. J. Rosenberg  
(Eds.), Attitude organization and change. New  
Haven, Conn. : Yale University Press. Pp. 15-64.
- Rosenberg, S., & Sedlak, A. 1972 Structural represent-  
ations of implicit personality theory.

- In L. Berkowitz ( Ed. ), Advances in experimental social psychology, Vol. 6. New York : Academic Press. Pp. 235-297.
- Rosner, S. 1957 Consistency in response to group pressures. Journal of Abnormal and Social Psychology, 55, 145-146.
- Ruckmick, C. A. 1921 A preliminary study of emotion. Psychological Monographs, No. 136 ( Vol. 30, No. 3 )
- Schachter, S. 1959 The psychology of affiliation. Stanford, Calif. : Stanford University Press.
- Schachter, S. 1964 The interaction of cognitive and physiological determinants of emotional state. In L. Berkowitz ( Ed. ), Advances in experimental social psychology, Vol. 1. New York : Academic Press. Pp. 49-80.
- Schiff, H. 1954 Judgmental response sets in the perception of sociometric status. Sociometry, 17, 207-227.
- Schlosberg, H. 1952 The description of facial expressions in terms of two dimensions. Journal of Experimental Psychology, 44, 229-237.
- Schutz, W. C. 1958 FIRO : A three-dimensional theory of interpersonal behavior. New York : Rinehart & Winston, Holt,
- Scodel, A., & Mussen, P. 1953 Social perceptions of authoritarians and nonauthoritarians. Journal of Abnormal and Social Psychology, 48, 181-184.
- Scott, W. A. 1962 Cognitive complexity and cognitive flexibility. Sociometry, 25, 405-414.
- Scott, W. A. 1963 Cognitive complexity and cognitive balance. Sociometry, 26, 66-74.
- Sechrest, L. , & Jackson, D. N. 1961 Social intelligence and accuracy of interpersonal predictions. Journal of Personality, 29, 167-182.

- Secord, P. F., & Backman, C. W. 1961 Personality theory and the problem of stability and change in individual behavior : An interpersonal approach. *Psychological Review*, 68, 21-32.
- Secord, P. F., & Backman, C. W. 1964 Interpersonal congruency, perceived similarity, and friendship. *Sociometry*, 27, 115-127.
- Secord, P. F., & Backman, C. W. 1965 An interpersonal approach to personality. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research*, Vol. 2. New York : Academic Press. Pp. 91-125.
- Secord, P. F., Backman, C. W., & Eachus, H. T. 1964 Effects of imbalance in the self-concept on the perception of persons. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 68, 442-446.
- Sell, J. M., & Duckworth, J. J. 1974 Field-dependence, neuroticism, and extraversion. *Perceptual and Motor Skills*, 38, 589-590.
- 源谷正敏 1977 対人関係の心理 . 培風館.
- Shaver, K. G. 1970 Defensive attribution : Effects of severity and relevance on the responsibility assigned for an accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 101-113.
- Shaw, M. E., & Sulzer, J. L. 1964 An empirical test of Heider's levels in attribution of responsibility. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 69, 39-46.
- Stephan, W. G. 1975 Actor vs observer : Attributions to behavior with positive or negative outcomes and empathy for the other role. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 205-214.
- Stotland, E., Thorley, S., Thomas, E., Cohen, A. R., & Zander, A. 1957 The effects of group expectations and self-esteem upon self-evaluation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 54, 55-63.
- Stringer, P. 1967 Cluster analysis of non-verbal judgements of facial expressions. *British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, 20, 71-79.

- 鈴木百合子 1971 交友関係におけるパーソナリティ認知 — 認知的適合性理論の適用による — . 日本社会心理学会第12回大会発表論文集, 10-12.
- 鈴木百合子 1974 交友関係におけるパーソナリティ認知の研究(第3報告) — 認知的均衡理論の適用による — . 日本社会心理学会第15回大会発表論文集, 105-108.
- Tagiuri, R. 1952 Relational analysis : An extension of sociometric method with emphasis upon social perception. *Sociometry*, 15, 91-104.
- Tagiuri, R. 1957 The perception of feelings among members of small groups. *Journal of Social Psychology*, 46, 219-227.
- Tagiuri, R. 1960 Movement as a cue in person perception. In H. P. David, & J. C. Brengelman ( Eds. ), *Perspectives in personality research*. New York : Springer. Pp. 175-195.
- Tagiuri, R. 1969 Person perception. In G. Lindzey & E. Aronson ( Eds. ), *The handbook of social psychology*, 2nd ed., Vol. 3. Cambridge, Mass. : Addison-Wesley. Pp. 395-449.
- Tagiuri, R., & Petrullo, L. 1958 Person perception and interpersonal behavior. Stanford, Calif. : Stanford University Press.
- Tagiuri, R., Blake, R. R., & Bruner, J. S. 1953 Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 585-592.
- Tagiuri, R., Bruner, J. S., & Blake, R. R. 1958 On the relation between feelings and perception of feelings among members of small groups. In E. E. Maccoby, T. M. Newcomb, & E. L. Hartley ( Eds. ), *Readings in social psychology*, 3rd ed. New York : Holt, Rinehart and Winston. Pp. 110-116.
- Tagiuri, R., Kogan, N., & Bruner, J. S. 1955 The transparency of interpersonal choice. *Sociometry*, 18, 624-635.
- Tagiuri, R., Kogan, N., & Long, L. M. K. 1958 Differentiation of sociometric choice and status relations in a group. *Psychological Reports*, 4, 523-526.

- Tajfel, H. 1957 Value and the perceptual judgment of magnitude. *Psychological Review*, 64, 192-204.
- 高橋 勉 1968 対人的判断に関する研究—初頭-新直効果に及ぼす積極性度と人格要因の影響について—。広島大学教育学部紀要, 第一部, 17, 189-195.
- 田中 無次郎 1955 学級社会における「社会的開放性」の発達と変容。教育心理学研究, 3, 133-145.
- Thibaut, J. W., & Riecken, H. W. 1955 Some determinants and consequences of the perception of social causality. *Journal of Personality*, 24, 113-133.
- Thompson, W. R., & Nishimura, R. 1952 Some determinants of friendship. *Journal of Personality*, 20, 305-314.
- Tripodi, T., & Bieri, J. 1963 Cognitive complexity as a function of own and provided constructs. *Psychological Reports*, 13, 26.
- Vaught, G. M. 1970 Expected scores in the rod-and-frame test revisited. *Psychonomic Science*, 18, 111.
- Vernon, P. E. 1933 Some characteristics of the good judge of personality. *Journal of Social Psychology*, 4, 42-58.
- Vernon, P. E. 1972 The distinctiveness of field independence. *Journal of Personality*, 40, 366-391.
- Videbeck, R. 1960 Self-conception and the reactions of others. *Sociometry*, 23, 351-359.
- Wachtel, P. L. 1972 Field dependence and psychological differentiation: Reexamination. *Perceptual and Motor Skills*, 35, 179-189.
- Walster, E. 1965 The effect of self-esteem on romantic liking. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 184-197.
- Walster, E. 1966 Assignment of responsibility for an accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 73-79.
- Walster, E. 1967 'Second guessing' important events. *Human Relations*, 20, 239-249.

- Walters, H. A., & Jackson, D. N. 1966 Group and individual regularities in trait inference : A multidimensional scaling analysis. *Multivariate Behavioral Research*, 1, 145-163.
- Weiner, B., & Kukla, A. 1970 An attributional analysis of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 1-20.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W. U., & Cook, R. E. 1972 Causal ascriptions and achievement behavior : A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 239-248.
- Wertheim, J., & Mednick, S. A. 1958 The achievement motive and field independence. *Journal of Consulting Psychology*, 22, 38.
- Wishner, J. 1960 Reanalysis of "impressions of personality". *Psychological Review*, 67, 96-112.
- Witkin, H. A. 1949 The nature and importance of individual differences in perception. *Journal of Personality*, 18, 145-170.
- Witkin, H. A., & Asch, S. E. 1948a Studies in space orientation : III. Perception of the upright in the absence of a visual field. *Journal of Experimental Psychology*, 38, 603-614.
- Witkin, H. A., & Asch, S. E. 1948b Studies in space orientation : IV. Further experiments on perception of the upright with displaced visual fields. *Journal of Experimental Psychology*, 38, 762-782.
- Witkin, H. A., Dyk, R. B., Faterson, H. F., Goodenough, D. R., & Karp, S. A. 1962 *Psychological differentiation*. New York : John Wiley & Sons.
- Witkin, H. A., Goodenough, D. R., & Karp, S. A. 1967 Stability of cognitive style from childhood to young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7, 291-300.



Witkin, H. A., Lewis, H. B., Hertzman, M., Machover, K.,  
Meissner, P. B., & Wapner, S. 1954 Personality  
through perception. New York : Harper & Brothers.

Wolitzky, D. L. 1973 Cognitive controls and person  
perception. Perceptual and Motor Skills, 36, 619-  
623.

Woodworth, R. S. 1938 Experimental psychology. New  
York : Holt, Rinehart & Winston.

Zajonc, R. B. 1960 The process of cognitive tuning in  
communication. Journal of Abnormal and Social  
Psychology, 61, 159-167.